京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二一－一一　平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡

2022年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡

2022年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、土地開発計画に伴う平安京跡・御土居跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

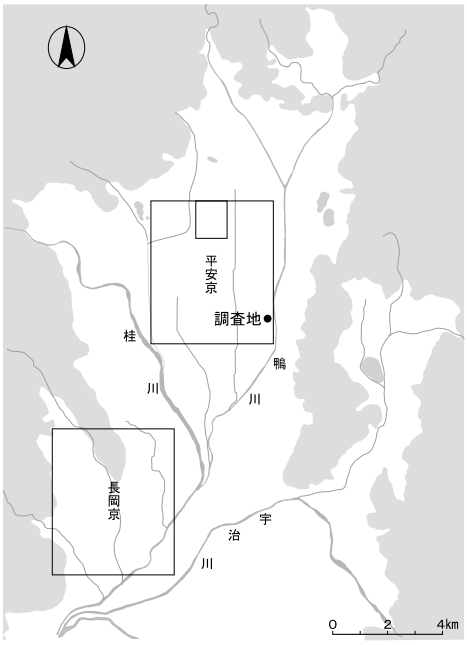
令和４年３月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	平安京跡・御土居跡　（京都市番号　20Ｈ741）
2	調査所在地	京都市下京区郷之町153番地７他
3	委　託　者	京都市　代表者　京都市長　門川大作
4	調 査 期 間	2021年４月26日～2021年９月24日
5	調 査 面 積	509.25㎡
6	調査担当者	岡田麻衣子・小檜山一良
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「五条大橋」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	岡田麻衣子・小檜山一良
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 本書で使用している『京都惣曲輪御土居絵図』は、京都大学総合博物館よりデータの提供を受けた。
15	協　力　者	調査に際して、以下の方々からご教示頂いた。記して感謝申し上げます。 網 伸也（近畿大学）、岩﨑奈緒子（京都大学総合博物館）、尾下成敏（京都橘大学）、木立雅朗（立命館大学）、高 正 龍（立命館大学）、近藤章子、高田 徹、中村武生・宮本いくえ（NPO法人 京都歴史地理同考会）、能芝 勉、山内政夫（柳原銀行記念資料館）、横田冬彦（京都大学） （五十音順、敬称略）



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 3
（１）調査地と環境 …… 3
（２）既往の調査 …… 4
３．遺　　構 …… 7
（１）基本層序 …… 7
（２）遺構の概要 …… 7
（３）第３面の遺構 …… 8
（４）第２面の遺構 …… 8
（５）第１面の遺構 …… 9
４．遺　　物 …… 12
（１）遺物の概要 …… 12
（２）土器類 …… 13
（３）瓦類 …… 20
（４）土製品 …… 21
（５）石製品 …… 23
（６）金属製品 …… 23
（７）銭貨 …… 24
（８）ガラス製品 …… 24
５．ま と め …… 26
（１）御土居について …… 26
（２）七条舟入の水路について …… 31
（３）六条村について …… 32

図　版　目　次

図版１　遺構　第３面平面図（１：200）
図版２　遺構　第２面平面図（１：200）
図版３　遺構　第１面平面図（１：200）
図版４　遺構　調査区北壁・東壁断面図（１：80）
図版５　遺構　調査区南壁断面図（１：80）
図版６　遺構　土塁97断面図、石積み95実測図（１：50）
図版７　遺構　暗渠94実測図（１：30）、土坑46・85実測図（１：120）
図版８　遺構　地業55実測図（１：60）、炉６実測図（１：30）
図版９　遺構　地業98・石列群99・護岸14実測図（１：60）、土坑61・69実測図（１：50）
図版10　遺構　溝96・石列73～75実測図（１：80）、室10・土坑21実測図（１：30）
図版11　遺構　『京都惣曲輪御土居絵図』（京都大学総合博物館所蔵）と今回の調査地（１：1,200）
図版12　遺物　耕作土・土坑85・石積み95出土土器実測図（１：４）
図版13　遺物　土坑46出土土器実測図１（１：４）
図版14　遺物　土坑46出土土器実測図２（１：４）
図版15　遺物　整地土出土土器実測図１（１：４）
図版16　遺物　整地土出土土器実測図２（１：４）
図版17　遺物　水路88・100・81、護岸14出土土器実測図（１：４）
図版18　遺物　溝１、石列73・74出土土器実測図（１：４、158のみ１：８）
図版19　遺物　石列75・溝96・室７出土土器実測図（１：４）
図版20　遺物　瓦類拓影及び実測図（１：４）
図版21　遺物　土製品（泥面子類）実測図（１：２）
図版22　遺物　土製品実測図（１：３、土92・93のみ１：４）
図版23　遺物　金属製品実測図・銭貨拓影（１：２）、ガラス製品実測図（１：４、ガ１～３のみ１：２）
図版24　遺構　１　１区　第２面全景（北から）
　　２　２区　第２面全景（東から）
図版25　遺構　１　３区全景（南西から）
　　２　石積み95検出状況（南西から）
図版26　遺構　１　暗渠94検出状況（南東から）
　　２　暗渠94開口部（北西から）
　　３　暗渠94内部（南東から）
図版27　遺構　１　水路88検出状況（北西から）

２　水路81検出状況（北から）
図版28　遺構　１　１区　第１面全景（北から）
２　２区　第１面全景（東から）
図版29　遺構　１　地業55検出状況（北から）
２　炉６検出状況（南西から）
３　炉６下部構造検出状況（西から）
図版30　遺構　１　地業98・石列群99・護岸14検出状況（北から）
２　護岸14検出状況（北東から）
図版31　遺構　１　溝96、石列73・74検出状況（南西から）
２　溝96底石検出状況（北西から）
３　土坑61検出状況（北東から）
図版32　遺物　土製品

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）　…… 1
図２　調査区配置図（１：500）　…… 2
図３　調査前全景（北西から）　…… 2
図４　作業状況（北東から）　…… 2
図５　周辺既往調査位置図（１：2,500）　…… 5
図６　基本層序図（１：30）　…… 7
図７　柱穴93・井戸８実測図（１：50）　…… 10
図８　土坑61出土土器実測図（１：10）　…… 17
図９　窯道具実測図（１：４）　…… 22
図10　石製品実測図（１：４、石１～３のみ１：１）　…… 23
図11　御土居既往調査地点図（１：40,000）　…… 27
図12　七条通東端の開口部（『京都惣曲輪御土居絵図』）　…… 29
図13　舟入東小口新旧比較図（『京都惣曲輪御土居絵図』）　…… 29
図14　『改正京都区分一覧之図』明治９年（1876）　…… 30
図15　『新撰京都古今全図』明治28年（1895）　…… 30
図16　昭和時代の溝１　中央部（北東から）　…… 30
図17　昭和時代の溝１　西部（南西から）　…… 30
図18　『大典記念京都市市街地図』大正４年（1915）　…… 31

図19　大正11年（1922）の都市計画図 …… 31
図20　『拾遺都名所図会』の高瀬川護岸 …… 31

表　目　次

表１　調査地周辺における略年表 …… 3
表２　遺構概要表 …… 8
表３　遺物概要表 …… 12
表４　御土居既往調査一覧表 …… 28

付　表　目　次

付表１　土器類観察表 …… 34
付表２　瓦類観察表 …… 39
付表３　土製品観察表 …… 40
付表４　石製品観察表 …… 42
付表５　金属製品観察表 …… 43
付表６　銭貨観察表 …… 43
付表７　ガラス製品観察表 …… 43

平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡

１．調査経過

調査地は、平安京左京八条四坊八町跡の東部と寛永18年（1641）から承応２年（1653）に行われた渉成園の建設を契機に付け替えられた江戸時代前期の御土居跡に相当する[1)]（図１）。

周辺の調査では、江戸時代前期の御土居の土塁基底部や江戸時代中期から明治時代初頭までの建物跡・井戸・収納施設、大正元年（1912）まで使用されていた七条舟入の水路の護岸などが確認されている。今回の調査においても同様の成果が想定され、当地における土地利用の変遷を明らかにすることを目的として調査を実施した。

発掘調査は、京都市都市計画局住宅室すまいまちづくり課から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行った。調査区は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）の指導に拠り、南東部が張り出す逆Ｌ字形に設定した。調査対象面積は南北最大30ｍ、東西最大24ｍの計509.25㎡である。また、場内に排土置き場を確保するため調査区を３つに分割し、東部を１区、南西部を２区、北部を３区として順に調査を行った（図２）。

調査は令和３年（2021）４月26日に開始した。３面の遺構面の調査を行い、図面類の作成、全

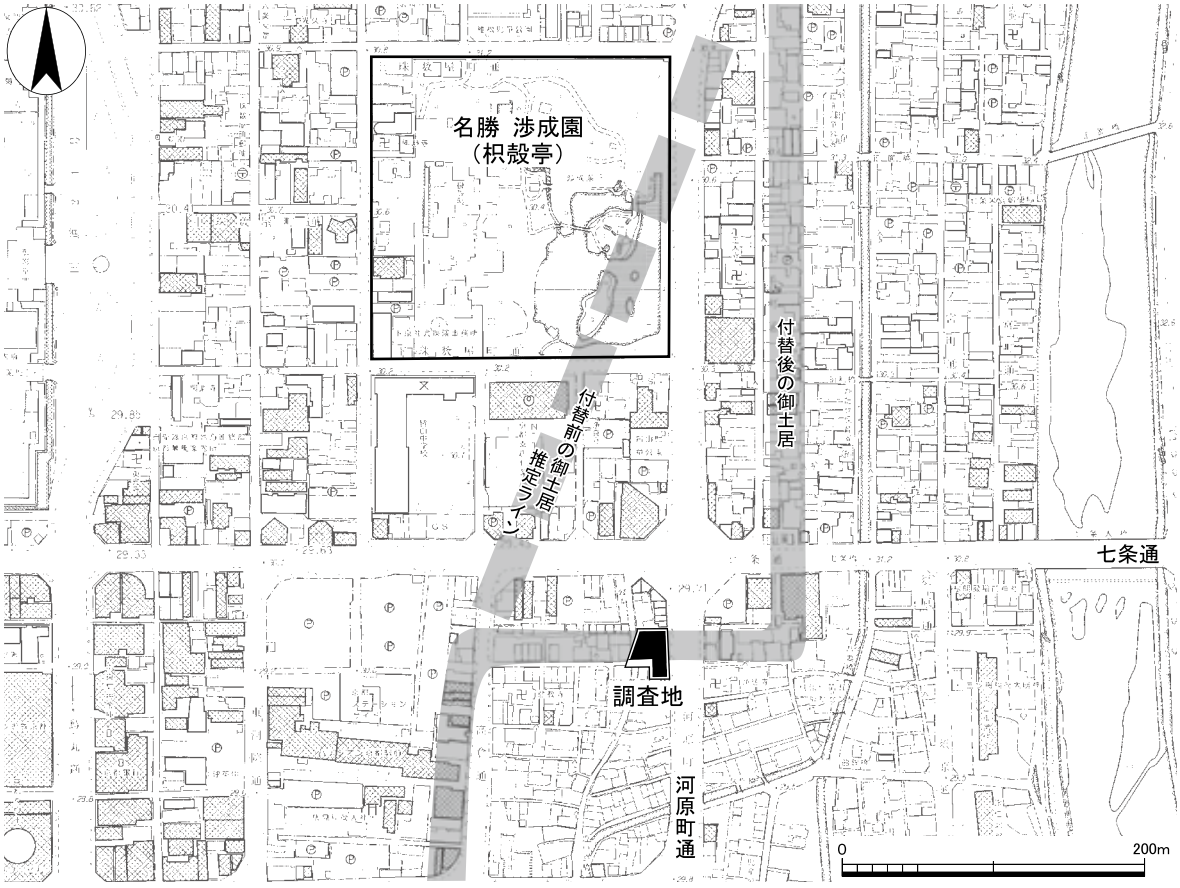


図１　調査位置図（１：5,000）

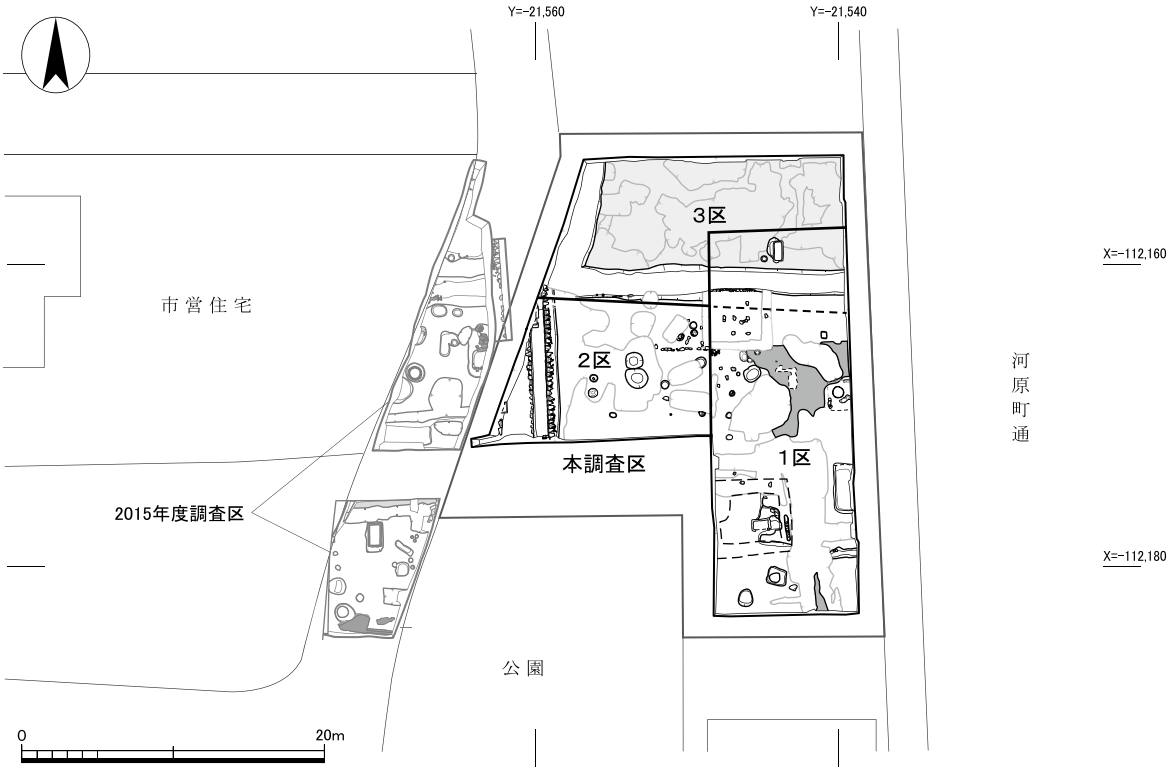


図２　調査区配置図（１：500）

図３　調査前全景（北西から）

図４　作業状況（北東から）

景・個別遺構写真撮影などの記録作業を行った。９月24日に全ての現地作業を終了した。

調査の結果、江戸時代前期の土塁、江戸時代後期の耕作土・整地土、江戸時代後期から末期頃の七条舟入の水路・六条村の建物跡・元治の大火による被災面、明治時代以降の溝などを検出した。

調査中は進展に伴い適宜、文化財保護課による臨検・指導や当事業における検証委員である近畿大学の網 伸也教授と立命館大学の木立雅朗教授による検証・指導を受けた。

２．位置と環境

（１）調査地と環境（表１）

本調査地は、JR京都駅から北東へ約500ｍ、七条通の南、河原町通の西に位置する。平安京内では左京八条四坊八町の東部にあたる。調査地より約600ｍ東側には鴨川が流れており、鴨川の西岸域である調査地周辺は氾濫原であるため砂礫層が厚く堆積している。調査地周辺は度々洪水がおこり、人が住みにくい環境だったと考えられる。そのため奈良時代以前の遺跡や平安京時代の居住者について記述した史料がなく、人々の生活の痕跡を詳しく知ることができていない[2)]。

安土桃山時代に豊臣秀吉が京都の都市改造の一環として、天正19年（1591）に洛中を土塁と堀で囲む御土居を築造する。『京都図屏風』（1621～1624年頃）や京都大工頭中井家作図の『寛永十四年洛中絵図』（1637年）によると、調査地周辺における御土居は、五条河原町から七条高倉まで北東から南西方向に描かれている。

江戸時代になると、寛永18年（1641）徳川家光が東本願寺に土地を寄進し、承応２年（1653）に真宗大谷派第13代目宣如の隠居所として渉成園（枳殻邸）が造営されたことで、渉成園造営後に描かれた『新板平安城東西南北町并洛外之図』（1654年）には、北東から南西方向の御土居がなくなり、「東本願寺新やしき」（渉成園）と共に七条通以南に東西方向の御土居が新たに描かれている。そのため、古地図の研究からも寛永18年（1641）～承応２年（1653）にかけて行われた渉成園造営を契機として、御土居が付け替えられたと考えられている[3)]。また同じく、慶安元年（1648）には渉成園造営と周辺開発を契機として、渉成園の約50ｍ南、七条通に沿って東西方向に長い舟入[4)]が造られた。また、この舟入に通じる南北方向の水路[5)]（七条舟入筋）も併せて整備される。この舟入は七条に造られたため「七条舟入」、また御土居の内側に造られたため「内浜」と呼ばれるようにな

表１　調査地周辺における略年表

年　　代	内　　容
天正19年（1591）	豊臣秀吉によって御土居が築造される
寛永18年（1641）	徳川家光が東本願寺に土地を寄進する → 渉成園造営計画開始（御土居の付け替えと舟入の造営）
寛永18年（1641） ～承応2年（1653）	渉成園造営並びに舟入（内浜）と舟入への水路が整備される
承応2年（1653）	渉成園完成
正徳3年（1713）	六条河原の人々、妙法院から移転を命じられる
正徳4年（1714）	六条河原の人々、完全移転完了 →「六条村」立村
享保16年（1731）	「銭座跡村」立村
天保14年（1843）	「大西組」立村
元治元年（1864）	元治の大火（蛤御門の変）
明治10年（1877）	七条停車場の新設
大正元年（1912）	七条通拡張と市電の新線開通 → 舟入が埋め立てられる
大正時代末頃	水路が埋め立てられる

る。内浜の周辺は発展していき、沿岸には材木商や薪炭商などが進出し、倉庫なども多く建てられるようになる。現在も「材木町」「納屋町」などの地名が残っている。

御土居築造後、長い間御土居の南側は柳原庄の畑地であった[6]が、江戸時代半ば頃になると御土居以南も宅地化が進んでいく。鴨川西岸の五条から六条の河原地には、鎌倉時代以前から警刑吏役と皮革業に携わる人々が生活する村があった。宝永４年（1707）に領主である妙法院がこの地を開発するため、居住地を移転するよう六条河原に住む人々に命じた。新規移転先として、同じく妙法院領の中から柳原庄という村の一部である北を御土居、東西と南を高瀬川に囲まれた三角形の土地が選ばれた。正徳３年（1713）から移転先の測量など準備が始められ、正徳４年（1714）には188戸789人の六条河原に住む人々が完全移転し、六条村となる。この六条村は、北側を六条村嘉兵衛、南側を天部村年寄三兵衛が支配しており、北東隅部には皮を塩漬けしたり洗浄する場所や西部と南東部には皮張り場があった。その後、六条村は藁や竹皮で編んだ草履の裏面に厚い皮底を縫い付けた雪踏などの皮革産業が爆発的に好況し、人口増加をもたらした。享保16年（1731）には、六条村の南で同じく柳原庄内の畑地を開発して村を開いた。この地は元禄13年（1700）３月から宝永５年（1708）１月まで貨幣を鋳造する銭座が一時置かれていたため、銭座跡村と呼ばれ、200人近い人々が移転した。しかし、その後も人口は増え続け、天保14年（1843）には六条村の舟入水路を挟んで西にあった天部村の畑地をさらに宅地として開発し、大西組と呼ばれる村を開いた。

明治維新後、調査地周辺は近代化が加速していく。内浜・水路は明治10年（1877）に新設された七条停車場によって次第にターミナル的機能が低下していき、ついには七条大宮と東大路を結ぶ七条通の拡張と市電の新線開通のため内浜は大正元年、水路は大正時代の末年に埋め立てられた。また、高瀬川は渉成園の池泉の水源として利用され、園内に残された御土居の土塁は築山などの景観造築に生かされている。しかし、調査地周辺の御土居の土塁は削平され、宅地化が進むこととなった。

（２）既往の調査（図５）

調査地周辺は、これまで100件以上にも及ぶ発掘調査や試掘調査が実施されている。本書では、今回の調査に関連する調査成果のみをまとめた。以下、既往調査成果から確認できる調査地周辺における様相について述べる。

調査１は、中世には手工業者が集う七条町であり、江戸時代には舟入の北岸に当たる。室町時代の溝・土坑・柱列、江戸時代の石組溝・土坑・柱列・内部床面に漆喰が貼られ、中心に焼土坑をもつ蔵などが検出された[7]。

調査２では、平安時代から室町時代の井戸・溝・土坑、江戸時代の墓跡・溝などが検出された。南北方向の御土居の位置に当たる場所であるが検出できず、近世以降の東西溝を数基確認している[8]。

調査３は、今回の調査地と同じく江戸時代前期に付け替えられた御土居跡と江戸時代中期以降には天部村領に相当する。江戸時代前期の御土居の土塁が検出された。御土居の土塁から江戸時代

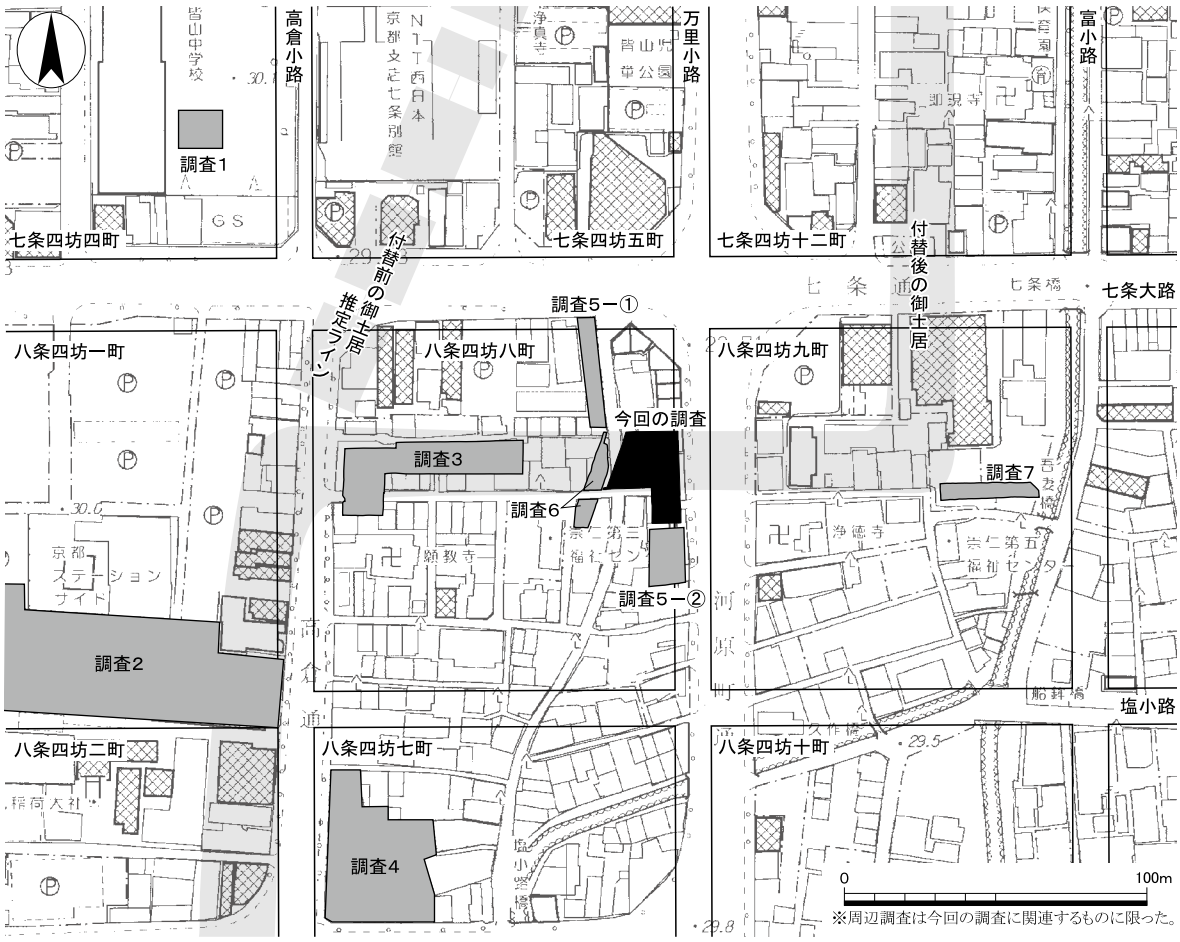


図５　周辺既往調査位置図（１：2,500）

前期の唐津椀が出土していることから、この御土居の土塁は江戸時代前期頃に築造されたことが明らかとなり、古地図の研究を裏付ける結果となった。また、江戸時代中期から後期の耕作溝・整地土・土坑、江戸時代後期から明治時代の溝・土坑・井戸などが検出され、当時の六条村の様相が確認された[9)]。

調査４では、平安時代の土坑・溝・杭痕、鎌倉時代の土坑・溝・井戸、江戸時代の土坑・旧高瀬川が検出されている。旧高瀬川の規模は幅8.9ｍ、深さ2.2ｍあり、肩口を板材と杭、南側の一部は石垣で護岸されていたが、改修後、幅は３ｍ程縮小されたことが確認された[10)]。

調査５－①では、明治時代の水路西護岸石積みと道路西側溝などが検出された。調査５－②では、元治の大火による焼土面や江戸時代後期から明治時代初頭の建物跡・土坑・カマド状遺構・井戸など六条村に関係する遺構を検出している[11)]。

調査６では、江戸時代後期の路面・園池・井戸・土坑・溝などが検出された[12)]。

調査７では、江戸時代後期から明治時代初頭の建物跡・土坑・井戸・舟入・側縁と底面を漆喰で塗固められた園池などが検出された。検出された舟入は、江戸時代後期頃に六条村内に設けられた舟入（船廻し）で、西壁を石や板材・木杭で護岸していることが確認された[13)]。

註

1） 『京都市遺跡地図』 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2020年

2） 山田邦和「第３章 左京と右京」『平安提要』 角川書店 1994年

3） 石田孝喜「近世初期の洛中絵図に関する考察」（四）・（五）『月刊古地図研究』97・98号 日本地図資料協会 1978年

4） 『新修 京都叢書 第21巻 京都坊目誌』 臨川書店 1970年

5） 七条舟入に通じる南北方向の水路は、当初の高瀬川を利用したとする説もある。
石田孝喜「京都 高瀬川 ―角倉了以・素庵の遺産―」 思文閣出版 2005年

6） 1786年に作成された『天明六年京都洛中洛外絵図』によると、「六条村」「畑」と描かれている。

7） 西森正晃・前田義明『平安京左京七条四坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008－6 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年

8） 吉川義彦『平安京跡発掘調査報告 左京八条四坊一町』 関西文化財調査会 2004年

9） 近藤章子『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013－11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年

10） 加納敬二・永田宗秀『平安京左京八条四坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2003－11 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年

11） 李 銀眞・山下大輝『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017－7 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年

12） 近藤章子『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015－12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年

13） 近藤章子『平安京左京八条四坊九町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015－11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年

3．遺　　構

（1）基本層序（図6）

調査地における現地表面の標高は、32.5～32.3ｍで北から南へ緩やかに下がる。調査地の基本層序は、現地表面から順に現代盛土（厚さ約0.3～1.6ｍ）、江戸時代後期から末期の整地土（厚さ約0.3ｍ）、江戸時代後期の耕作土（厚さ約0.3ｍ）、基盤層である。

調査地の北側では御土居の土塁基底部を現地表面から約0.3ｍ下で確認でき、高さ約0.7ｍ残存していた。江戸時代後期から末期の整地土上面は、広く被熱していることから元治の大火による被災面と考えられる。また、一部礫が固くしまった場所が確認できた。

調査では、江戸時代後期から末期の整地土上面を第１面、江戸時代後期の耕作土上面を第２面、基盤層上面を第３面として遺構検出を行い、江戸時代前期から明治時代の遺構を検出した。なお、基盤層は鴨川旧流路の氾濫堆積層で、平安時代から鎌倉時代の遺物を含むが、断割調査や攪乱坑の断面ではこれより下層に遺構面は確認できなかった。

（2）遺構の概要（表2）

今回の調査で検出した遺構の時期は、江戸時代前期・江戸時代後期・江戸時代後期から末期・明治時代以降に分けられる。

第１面では、江戸時代後期から末期の整地土・炉・地業・井戸・土坑・水路・柱穴、明治時代以降の石列・溝・室・土坑などを検出した。第２面では、江戸時代後期の耕作土・石積み・土坑・水路・暗渠などを検出した。第３面では、江戸時代前期の土塁・水路などを検出した。各遺構面で検出した水路は、いずれも七条舟入に通じる南北方向の水路である。

以下、時代の古い順に遺構の概要を述べる。

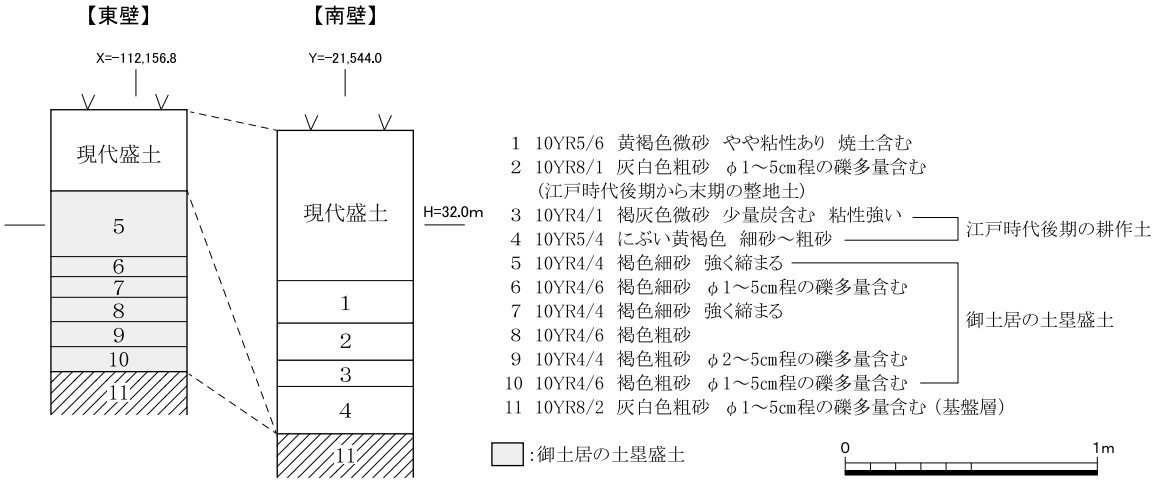


図6　基本層序図（1：30）

（３）第３面の遺構（図版１）

土塁97（図版６・25） 調査区北部で検出した東西方向の御土居の土塁である。南裾部の基底部に当たる。検出規模は東西17.5ｍ、南北7.5ｍ、北部と東部は調査区外へと延長する。土塁上部は後世に削平されており、基底部のみ高さ約0.7ｍ残存していた。基盤層によく似た砂質土・砂礫・粗砂・シルトなどを交互に積み重ねて盛土をしているが、版築のように強く叩きしめたような工法は見受けられない。基底部は大きな単位で土を盛り上げ（図版６－14～17層）、裾部はやや細かい単位で傾斜に沿って土が盛られる。裾部上面に貼られた漆喰を含むしまりの強い土層（図版６－１層）は、後世の修復土と考えられる。

水路100 調査区西部で検出した南北方向の水路である。遺構方位は、溝１以北の北半部では東へ振れる。幅は調査区北端で1.3ｍ以上、南半部の東肩が後述する水路88と重なるため不明である。深さは北端で約1.2ｍである。

（４）第２面の遺構（図版２・24・25）

石積み95（図版６・25） 調査区北部で検出した石積みである。土塁97の開口部南東隅部の上面で検出した。検出規模は南北2.4ｍ、東西2.3ｍあり、径0.3～0.8ｍの花崗岩を使用し、外側に面を持つようにしてコの字状に石が並ぶ。東側と西側の石列は埋設されていた。構築方法は、土塁裾部を切り崩し、裾部にＬ字に石を並べて本来の土塁の盛土との間に土を充填し、さらに東側に石を並べ、その石を覆うように土を盛る。土塁裾部の盛土の流出を防ぐために構築されたものと考えられる。内部からは江戸時代後期の染付磁器や焼締陶器などが出土した。

水路88（図版５・27） 調査区西部で検出した南北方向の水路である。この時期の水路は、水路100の北半部を埋めて方位を変更している。水路の東肩護岸は新旧２時期を検出した。新旧の東護岸はいずれも木杭と木板で造られていた痕跡が残る。検出規模は長さ約18ｍ、深さは約1.1ｍである。水路の両端は調査区外へと延長する。江戸時代後期の染付磁器・施釉陶器・焼締陶器・瓦・土製品などが出土した。

暗渠94（図版７・26） 調査区北西部で検出した木組みの暗渠で、水路88の底面の下に構築して

表２　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
江戸時代前期	土塁97	
江戸時代後期	耕作土、水路88、暗渠94、石積み95、土坑46・85	
江戸時代後期～末期	整地土、水路81、炉６、地業55、井戸８、土坑61・69、柱穴93、護岸14	
明治時代以降	石列73～75、溝１・96、室７・10、土坑21	

いる。掘形の規模は幅1.3ｍ、長さ2.5ｍ以上あり、西側は調査区外へ延長する。深さは検出面から0.4ｍある。木組みの底板は長さ1.8ｍ以上、幅0.5ｍで、両端に長さ1.8ｍ以上、幅0.15ｍの側板を立て、長さ0.5ｍ、幅0.2ｍの板を並べて蓋とする。蓋板は７枚が残存していた。東端は蓋板がなく開口しており、東側の溝（溝１により削平か）から水を流し入れ、西側へ流すためのものと考えられる。暗渠94の上から水路88東護岸新段階もしくは第１面の水路81の護岸杭が打ち込まれる。江戸時代の染付磁器や土製品などが出土した。

土坑46（図版７） 調査区中央部東側で検出した土坑である。平面形は隅丸方形であり、北部は後世に掘られた溝１により削平される。検出規模は南北3.2ｍ以上、東西5.1ｍある。深さは検出面から約0.4ｍである。江戸時代前期の土師器、江戸時代後期の施釉陶器・染付磁器・瓦・土製品・火打石・金属製品・銭貨などが出土した。

土坑85（図版７） 調査区中央部西側で検出した土坑である。平面形は隅丸方形で、検出規模は南北1.8ｍ、東西1.8ｍである。深さは検出面から約0.4ｍである。江戸時代後期の施釉陶器・染付磁器・瓦・骨などが出土した。

（５）第１面の遺構（図版３・28）

水路81（図版５・27） 調査区西部で検出した南北方向の水路である。水路の変遷のうち中段階に当たる。東護岸は木杭と木板で造られていた痕跡が残る。検出規模は長さ約12ｍ、深さは検出面から0.6ｍである。両端は調査区外へと延長する。第２面の水路88の東肩部を埋めており、東肩は水路88より約0.5ｍ西側になる。江戸時代後期から末期頃の染付磁器・施釉陶器・焼締陶器・瓦・土製品などが出土した。

柱穴93（図７） 調査区北西部、水路81の底部で検出した柱穴である。平面形は円形を呈し、検出規模は南北0.53ｍ、東西0.55ｍある。深さは検出面から0.1ｍ。中心に幅0.25ｍの角材が残存している。江戸時代後期から末期の染付磁器や焼締陶器などが出土した。

地業55（図版８・29） 調査区南部で検出した地業で、大壁構造の建物基礎と考えられる。検出規模は南北5.1ｍ、東西５ｍ以上、西側は調査区外へ延長する。一辺約５ｍの範囲を、深さ0.6ｍ程全体的に掘り込み土を入れ替え、さらに周縁にロの字状に幅0.7～１ｍの布掘溝を掘る。溝の下層には拳大の石を詰め、その上層は微砂、礫混じりの土を層状に入れる。江戸時代の染付磁器などが出土した。また地業55の周辺から被熱した瓦の小片が多量に出土している。

炉６（図版８・29） 調査区南部で検出した炉状遺構である。掘形の規模は南北約1.2ｍ、東西1.9ｍ、深さは約0.7ｍである。内部に漆喰と粘土、瓦で造られた炉状構築物がある。埋土には炭や焼土、焼けた瓦などが含まれていた。地業55の内部で検出したが、同時並存かは不明である。江戸時代後期から末期頃の施釉陶器・染付磁器・土製品（泥面子・ミニチュア製品など）・銭貨・金属製品・石製品などが出土した。特に泥面子・ミニチュア製品の土製品、銭貨の出土が多い。

地業98（図版９・30） 調査区中央部東側で検出した布掘地業で、大壁構造の建物基礎と考えられる。検出規模は南北４ｍ以上、東西約4.6ｍあり、北側は溝１によって削平される。布掘溝の幅

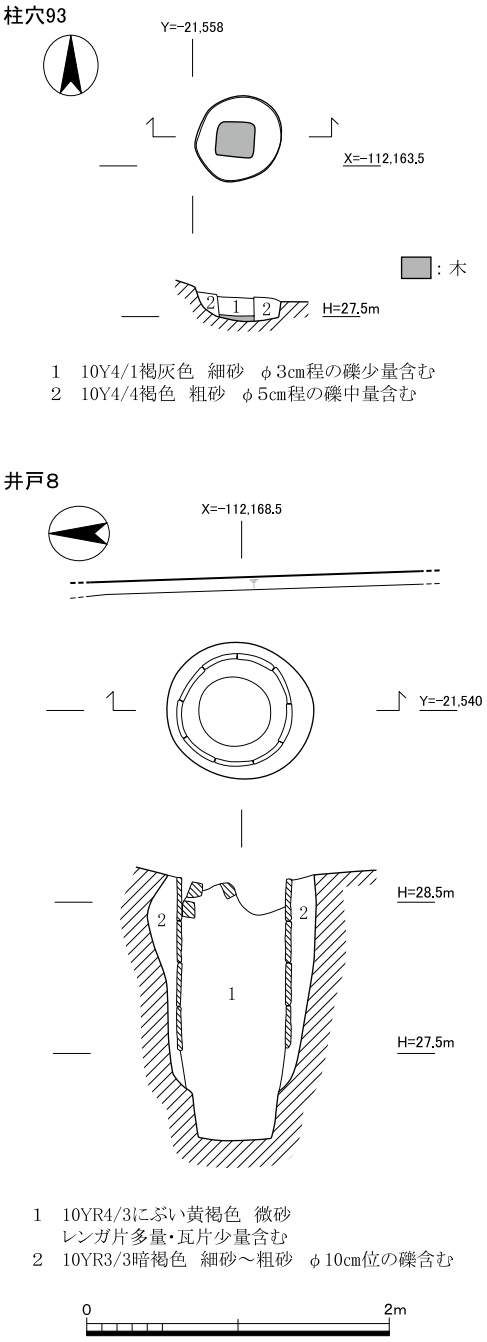


図７　柱穴93・井戸８実測図（１：50）

は0.5～0.7ｍ、深さは約0.1ｍである。溝の中には拳大の石が詰まる。

石列群99（図版９・30）　地業98の内部で石列群99を検出した。径0.2ｍ程の石が平坦面を上にして0.5～0.8ｍの間隔で並べられている。石列群99の周辺は被熱していた。

護岸14（図版９・30）　地業98を削平する溝１の護岸である。坩堝を２段並べて護岸とする。坩堝は底部を御土居側へ向けて積んでいる。底部は欠損する。裏込から江戸時代後期から末期頃の施釉陶器・染付磁器などが出土した。

井戸８（図７）　調査区東部で検出した井戸である。掘形の平面形は円形を呈し、径約0.95ｍ、深さ約1.75ｍ、底部の標高は26.95ｍである。井戸枠は瓦を円形に積み上げている。井戸枠の内径は約0.75ｍである。枠内から江戸時代後期から末期頃の施釉陶器・染付磁器・瓦・土製品、明治時代以降の煉瓦などが出土した。

土坑61（図版９・31）　調査区南西部で検出した土坑である。上部は削平を受ける。掘形の平面形は円形を呈し、径約0.7ｍ、深さは約0.4ｍ残存する。土坑の内部には、江戸時代後期から末期の信楽産の甕が据わる。さらに甕の内部に堺・明石系の擂鉢がモルタルで接着される。

土坑69（図版９）　調査区中央部で検出した土坑である。平面形は円形を呈し、径0.65ｍ、深さは約0.45ｍある。縁を漆喰で塗り固める。内部は立板を紐で縛った桶状のものが据えられていた痕跡を確認した。江戸時代後期から末期の染付磁器や土製品などが出土した。

室７（図版４）　調査区南東部で検出した室である。平面形は長方形を呈し、検出規模は南北3.6ｍ、東西1.2ｍ以上あり、東側は調査区外へ延長する。深さは検出面から1.2ｍ。最下層には径５㎜程の炭が多量に入る。明治時代の染付磁器・瓦・煉瓦・銭貨・ガラス製品などが出土した。

室10（図版10）　調査区北部で検出した室である。土塁97を掘り込む。平面形は長方形を呈し、掘形の規模は南北約1.5ｍ、東西約0.7ｍ、深さは約0.4ｍある。内部に内径南北1.2ｍ、東西0.4ｍ、深さ約0.2ｍの漆喰で塗り固めた槽を作る。最下層には少量の鉄屑が付着していた。染付磁器・銭貨・ガラス製品などが出土した。

土坑21（図版10） 調査区北部で検出した土坑である。土塁97を掘り込む。室10に隣接する。掘形の平面形は円形を呈し、径0.4ｍ、深さは約0.2ｍ残存する。内部には堺・明石系の擂鉢が据わる。銭貨などが出土した。

溝1（図版４） 調査区北部で検出した東西方向の溝である。検出規模は幅1.7～2.4ｍ、長さ17.5ｍ以上ある。西端は水路と合流し、東端は調査区外へ延長する。石や胴木による護岸が確認できた。深さは検出面から約0.6ｍ。江戸時代前期から末期の染付磁器や昭和時代のキーホルダーなどが出土した。

溝96・石列73～75（図版10・31） 調査区西部で検出した南北方向の溝と石列である。溝96は水路の変遷のうち新段階にあたる。石列73と石列74は溝96の護岸である。溝96は護岸の内径で幅約0.9ｍ、長さ8.8ｍ以上、残存深は約0.75ｍ。両端は調査区外へ延長する。東側護岸の石列73は約0.3ｍ四方、奥行約0.4ｍの間知石積みが３段、西側護岸の石列74は同様の間知石積みが１段分残る。溝底も石が用いられており、調査区南壁に一部残存している。1973年にこの溝を利用して水道管とガス管が埋められた際に、ほとんどの底石は取り外されたと考えられる。石列75は、石列74の西約２ｍのところで検出した。２石しか残存しないが、東に面を揃える。各構築土から明治時代半ばの施釉陶器・染付磁器・土製品・金属製品・ガラス製品・骨などが出土した。

４．遺　　物

（１）遺物の概要（表３）

土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・骨・ガラス製品など多種多様な遺物が遺物整理コンテナにして73箱出土した。大半を土器類が占め、平安時代から明治時代まで幅広い年代のものがある。ただし、平安時代から江戸時代中期の遺物はいずれも遺構に伴うものではなく、混入したものである。

平安時代の遺物は、摩滅が著しいため図化できなかったが、須恵器甕や瓦の小片が土塁97と基盤層より出土した。

鎌倉時代の遺物は、小片のため図化できなかったが、土師器皿・瓦器椀・焼締陶器鉢・輸入陶磁器壷が土塁97と基盤層より出土した。

江戸時代前期から中期の遺物は、土師器皿や肥前の染付磁器などが溝１他から出土した。

江戸時代後期の遺物は、土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・骨などが出土した。土器類には土師器皿、土師質土器などがある。磁器類では肥前、三田、珉平窯産などがある。陶器類には肥前や京・信楽系などの施釉陶器、堺・明石系や信楽産擂鉢、萩窯産、万古窯産などの焼締陶器がある。瓦類には桟瓦や道具瓦などがあり、一部には刻印が認められる。土製品には泥面子・人形・ミニチュア製品・京都深草の焼塩壷などがある。石製品には砥石、火打石、珠などがある。金属製品には銭貨などがある。骨には土坑85より出土した多量の鋸や鉈の切断痕が残る牛の骨がある。木製品には暗渠94の板材などがある。

明治時代以降の遺物は、土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・ガラス製品・骨などが出

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	須恵器、瓦				
鎌倉時代	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器				
江戸時代	土師器、土師質土器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品、銭貨、骨		土師器８点、土師質土器１点、焼締陶器５点、施釉陶器41点、磁器78点、瓦類12点、土製品91点、石製品５点、金属製品６点、銭貨８点		
明治時代以降	焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品、銭貨、ガラス製品、骨		焼締陶器１点、施釉陶器12点、磁器39点、土製品６点、石製品２点、銭貨１点、ガラス製品９点		
合　計		88箱	325点（15箱）	０箱	73箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より15箱多くなっている。

土した。土器類には土師質土器などがある。磁器類では肥前産、瀬戸・美濃系、京都産がある。陶器類は肥前産や京・信楽系などの施釉陶器、堺・明石系や信楽産擂鉢などの焼締陶器がある。瓦類には桟瓦などがある。土製品には人形・泥面子・窯道具がある。石製品には硯などがある。金属製品には銭貨・煙管・ミニチュア製品などがある。ガラス製品には瓶などがある。骨には溝96や整地土より出土した切断痕が確認できる猫・犬・猪・鳥などの骨がある[1)]。

以下、出土遺物の概要を時代の古いものから順に述べる。個々の詳細については、巻末の付表に記載した。

（２）土器類（図版12～19、付表１）

耕作土出土土器（図版12　１～20）　１～３は土師器皿Ｓである。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、内面底部に凹線状の圏線が巡る、底部はオサエ。京都13Ａ段階[2)]に属する。４は施釉陶器の水差しである。ロクロ成形で頸部には沈線が巡る。口縁内部から底部まで鉄釉が施される。５は色絵磁器の水差しである。型押し成形で肩部は呉須で模様が描かれ、体部は透明釉の上から色絵が施される。６は施釉陶器の鬢水入れである。型押し成形で全体に黄釉、口縁部に緑釉の斑が施される。京都産。７は染付磁器の小鉢である。ロクロ成形で、外面体部に呉須でぼかした線を引き、内面・体部・高台内に透明釉を施す。口縁部と高台部を釉剥ぎ。８は上絵磁器の椀である。ロクロ成形で全体に透明釉を施し、内面に鉄釉で１㎝間隔の線が引かれ、横方向に上段「二食匕」下段「一食」と書かれる。計量カップと考えられる。９は施釉陶器の蓋である。上部には白泥が塗られ、その上から呉須で模様が描かれる。植物を模したツマミを貼り付ける。10は青磁染付の椀蓋である。全体に白釉が塗られ、その上から外面に青緑釉、内面には呉須で梅、ツマミ内には角福が描かれる。口縁部とツマミ口縁部には離れ砂が付着する。全体的に釉溶けが悪い。11は染付磁器の椀蓋である。外面と内面に呉須で模様が描かれる。ツマミ口縁部に離れ砂が付着する。12は施釉陶器の丸椀である。ロクロ成形で高台を丁寧にケズリ出す。高台以外に明緑釉を施し、その上から鉄釉で絵を描く。内面底部には目跡が残る。13は施釉陶器の椀で、いわゆる「小杉椀」。ロクロ成形で高台を丁寧にケズリ出す。高台以外に白釉を施し、外面体部に杉が描かれる。全体的に貫入が入る。高台内部に薄く「寶山」と押される。京都産。14は染付磁器の筒型椀である。呉須で内面と外面体部に模様が描かれる。内面底部には潰れたコンニャク印判の五弁花が押される。高台に離れ砂が付着する。肥前産。15～17は染付磁器の椀で、いわゆる「くらわんか椀」。15の外面体部にはコンニャク印判で菊が押され、手描きで草文が描かれる。高台内部には文字が書かれるが判読できない。16は全て手描きで渦に松が描かれ、高台内部には文字が書かれるが判読できない。高台に離れ砂が付着する。17の内面底部にはコンニャク印判の五弁花が押される。外面体部にはコンニャク印判と手描きで竹やススキなどが描かれる。高台内には崩れた角福が書かれる。高台部は釉剥ぎ。15～17は全て肥前産。18は青磁染付の大皿である。内面には手描きで模様を描く。内面底部にはコンニャク印判で五弁花が押され、蛇の目釉剥ぎ。外面体部から高台内部まで青緑釉が施される。高台には離れ砂が付着する。肥前産。19は土師質土器の胞衣壷である。内面底部には煤が付着する。20は焼

締陶器の擂鉢である。内面には７条１単位の擂目が上から下へ引かれる。堺・明石系。

土坑85出土土器（図版12　21～23）　21は土師器皿Sである。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、内面底部に凹線状の圏線が巡る、底部はオサエ。京都13段階に属する。22は磁器の椀である。全体に透明釉、口縁端部に鉄紅を施す。高台に離れ砂が付着。23は施釉陶器の椀である。全体に暗灰黄色の釉を施し、刷毛で花などの模様を施す。高台は釉剝ぎ。唐津産。

石積み95出土土器（図版12　24）　24は焼締陶器の擂鉢である。内面には９条１単位のクシ目で上から下へ擂目が引かれる。堺・明石系。他にも小片のため図化できなかったが、江戸時代後期の土師器皿・染付磁器などが出土している。

土坑46出土土器（図版13　25～59）　25は土師器皿Sである。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、内面底部に凹線状の圏線が巡る、底部はオサエ。内面には煤が付着する。京都13A段階に属する。

26・27は施釉陶器の灯明皿である。26は内面から口縁部まで灰黄色の釉が施される。27は内面から口縁部まで灰色の釉が施される。口縁部内面に沈線が刻まれ、灯芯を支える菊形が貼り付けられる。内面底部には目跡が残る。ともに京・信楽系。28は施釉陶器の皿で、いわゆる「菊皿」。型打ち成形で高台を貼り付ける。高台以外に緑釉が施され、全体的に貫入が入る。口縁部は波状に型取られる。瀬戸・美濃産。29は施釉陶器の深皿である。高台以外に灰色の釉を施し、内面底部に鉄釉と白釉で模様を描く。高台は丁寧にケズリ出す。京都産。30・31は施釉陶器の鍋で、いわゆる「行平鍋」。ともに内面から外面まで鉄釉が施され、把手が貼り付けられる。30の底部には粒状の脚が貼り付けられ、煤が付着。ともに京・信楽系。32は染付磁器の仏飯器である。ロクロ成形で外面体部には呉須で模様が描かれる。高台は蛇の目高台。肥前産。33は色絵磁器の小物蓋である。ロクロ成形で口縁部以外に透明釉を施す。外面は呉須、透明釉の上から赤絵で梅を描く。口縁部は釉剝ぎ。肥前産。34・35は染付磁器の椀蓋である。ともに内面・外面に呉須で植物などが描かれる。ツマミ口縁部は釉剝ぎ。肥前産。36は施釉陶器壷の底部と考えられる。底部には四角に「元」の印が押され、内面は鉄釉が塗られる。信楽産。37・38は施釉陶器の丸椀である。高台以外に灰黄色の釉が施され、外面体部に模様が描かれる。高台を丁寧にケズリ出す。京都産。39は施釉陶器の椀で、いわゆる「小杉椀」。高台以外に灰白色の釉を施し、外面体部に簡素化した表現の杉が描かれる。高台を丁寧にケズリ出す。京都産。40～42は染付磁器、43は青磁染付の筒型椀である。40は内面底部にコンニャク印判の五弁花が押され、内面と外面体部に手描きで模様が描かれる。41・42は内面と内部底部、外面体部に手描きで模様が描かれる。41の高台内には角福も書かれる。43は外面体部・高台内に青緑釉が施される。内面底部にはコンニャク印判の五弁花が押され、内面は手描きで模様が描かれる。全て高台には離れ砂が付着し、いずれも肥前産。44・45は染付磁器の小椀である。44は内部底部・外面体部に手書きで文字、内部には手描きで模様が描かれる。高台釉剝ぎ。45は内面・内面底部・外面体部に手描きで模様が描かれる。高台釉剝ぎ。ともに肥前産。46は染付磁器の椀で、いわゆる「広東椀」。内面底部と高台外面に手描きで模様が描かれる。高台内には吉祥句が書かれる。肥前産。47～51は染付磁器の椀で、いわゆる「くらわんか椀」。47は外面体部に手描きで模様が描かれる。高台釉剝ぎ。48は内面底部に蛇の目釉剝ぎ。外面体部に手描きで模様を描

く。高台に離れ砂が付着する。49・50は内面底部にコンニャク印判の五弁花が押され、内面と外面体部に手描きで模様が描かれる。高台内には角福が書かれる。高台に離れ砂が付着する。51は内面底部にコンニャク印判の五弁花が押され、内面は手描き、外面体部はコンニャク印判の菊と手描きで模様が描かれる。高台内には角福が書かれる。高台に離れ砂が付着する。いずれも肥前産。52・53は青磁染付の鉢である。52は内面に手描きで模様が描かれ、外面体部には青緑釉を施す。蛇の目凹型高台か。53は内面は手描きで模様が描かれ、高台内部には角福が書かれる。蛇の目凹型高台。ともに肥前産。54～59は染付磁器の皿である。54は小皿、内外面は手描きで模様が描かれる。口縁部は釉剝ぎ。55は内面と外面体部に手描きで模様が描かれる。高台に離れ砂が付着する。56は深皿、内面と外面体部に手描きで模様が描かれる。内面底部にコンニャク印判の五弁花が押され、高台内には角福が書かれる。高台に離れ砂が付着する。57は深皿、内面と外面体部に手描きで模様が描かれる。高台は釉剝ぎ。58は内面に手描きで模様が描かれ、内面底部にコンニャク印判の五弁花が押され、蛇の目釉剝ぎ。高台に離れ砂が付着する。59は内面に手描きで模様が描かれ、内面底部にコンニャク印判の五弁花が押され、蛇の目釉剝ぎ。外面・高台内に緑釉を施す。高台に離れ砂が付着する。54～59は全て肥前産。

整地土出土土器（図版15・16　60～107）　60は土師器皿Sである。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、内面底部に凹線状の圏線が巡る、底部はオサエ。京都13A段階に属する。61～63は施釉陶器の灯明皿である。底部から体部部にかけてケズリ出し、上面に釉を施す。62の底部には重ね焼きの痕跡が確認できる。64～66は灯火具で、いわゆる「タンコロ」である。64はロクロ成形で底部はケズリ出し、内面から外面体部に鉄釉を施す。内面底部に灯芯挿入筒が貼り付けられる。65・66は高杯型で内面から高台まで鉄釉を施す。内面底部に灯芯挿入筒が貼り付けられる。底部は糸切りのち針を刺すための孔が開けられる。67は施釉陶器の蓋で、いわゆる「柚でんぼ」。型押し成形で全体に鉄釉が施される。68は施釉陶器の蓋である。内面から口縁部にかけてケズリ出し。上面には鉄釉を施し、簡素化した豆状の把手を貼り付ける。61～68は京・信楽系。69は施釉陶器の蓋である。ロクロ成形で全体に鮮やかな黄色釉を施す。兵庫珉平窯産。70は施釉陶器の蓋である。ロクロ成形でツマミ口縁部はケズリ出し。全体に白泥が施され、貫入が入る。口縁部と上面に鉄釉で模様が描かれる。瀬戸・美濃産。71・72・75は染付磁器の椀蓋である。内面と上面は手描きで模様が描かれる。72・75にはツマミ内に角福が書かれる。ツマミ口縁部は釉剝ぎ。73は色絵磁器の椀蓋である。全体に透明釉を施し、その上から内面は赤で模様を描き、上面は赤・青・緑・黄で植物を描く。焼接ぎがあり、ツマミ内に焼接ぎ業者の銘と角福が書かれる。瀬戸・美濃産。74は青磁染付の椀蓋である。内面上部には潰れたコンニャク印判の五弁花が押され、内面は手描きで模様を描く。外面には緑釉が施され、ツマミ内に文字が書かれるが判別できない。肥前産。76は施釉陶器の椀である。全体に白釉を施し、外面体部に鉄釉で絵を描く。高台内には「岩倉山」と刻印が押される。京都産栗田焼。77は施釉陶器の筒型椀である。ロクロ成形で高台は丁寧なケズリ出し。外面体部には鉄釉で線が入り、高台以外に白釉を施す。京都産。78は施釉陶器の椀で、いわゆる「小杉椀」。高台以外に白釉を施し、外面体部に簡素化した表現の杉を描く。高台は丁寧にケズリ出す。京都産。79・

80は染付磁器の筒型椀である。内面底部にはコンニャク印判の五弁花が押され、内面・外面体部・底部に手描きで模様が描かれる。肥前産。81～89は染付磁器の椀である。81・82の外面体部にはいわゆる「染色体文」が描かれ、口縁部に鉄紅を施す。85は外面体部にコンニャク印判の松と菊が押される。86は外面体部に手描きで植物が描かれる。内面底部に蛇の目釉剝ぎ、離れ砂が付着する。高台は釉剝ぎ。87は内面・内面底部・外面体部に手描きで模様が描かれる。88・89はいわゆる「広東椀」である。88は内面底部には手描きで花、外面体部に呉須・赤・黄色を使用し、手描きで植物を描く。89は外面体部に模様が描かれる。90は青磁染付の椀である。内面底部にはコンニャク印判の五弁花が押され、内面に手描きで模様を描く。口縁部から高台まで緑釉が施される。高台釉剝ぎ。91は施釉陶器の皿である。高台内に「乾山」と書かれ、尾形乾山銘の可能性が考えられる。胎土が灰色を呈し、京都の土ではない可能性がある。92は施釉陶器の皿である。口縁部から体部を型作りし、高台はロクロでケズリ出し。全体に白化粧を施し、内面は精密に植物を描く。口縁部に鉄紅を施し、輪花に型取られる。高台内には「道八」と書かれ、高橋道八銘の可能性が考えられるが、胎土が灰色を呈し、京都の土ではない可能性がある。93は染付磁器の皿である。型打ち成形で内面に龍、内面底部に菊が陰刻され、その上から呉須が塗られる。高台は釉剝ぎ。94は色絵磁器の皿である。型打ち成形で内面底部には壽文が陰刻される。後にその上から赤・青・白で植物模様が描かれる。95は白磁の皿である。94と同様内面底部に壽文が印刻される。96～103は染付磁器の皿である。96・97は小皿で内面・外面体部に手描きで模様が描かれ、内面底部にはコンニャク印判の五弁花が押される。高台に離れ砂が付着する。98は内面底部にコンニャク印判の五弁花が押され、蛇の目釉剝ぎがある。内面には手描きで模様が描かれる。高台は釉剝ぎ。99は内面に手描きで模様を描く。蛇の目凹型高台。100は内面底部にコンニャク印判の五弁花が押され、内面・外面体部・高台内に手描きで模様が描かれる。口縁部に鉄紅を施す。高台は釉剝ぎ。101は型打ち成形で高台を貼り付ける。内面に手描きで模様が描かれ、全体に透明釉を施す。102は内面・外面体部に手描きで模様を描く。蛇の目凹型高台。103は内面と外面体部に手描きで模様が描かれる。96～103は全て肥前産。104は施釉陶器の仏花瓶である。ロクロ成形で底部は丁寧にケズリ出す。口縁から底部まで緑釉が施される。京都・信楽系。105は色絵磁器の段重鉢である。全体に透明釉を施され、その上から外面体部に赤・白・青・黄・茶色で絵や模様を描く。口縁部や底部の重ね部分は釉剝ぎ。106は焼締陶器の擂鉢である。底部から口縁部までロクロナデ、内面底部には６条１単位で三角形状に擂目が入り、内面体部には10条１単位の擂目が下から上に向かって入る。堺・明石系。107は施釉陶器の鍋蓋である。口縁ヨコナデ、内面に鉄釉が塗られる。上面にはハケメ、白イッチンかけ。ツマミはケズリ出し。京・信楽系。

水路88出土土器（図版17　108～118）　108は染付磁器の椀蓋である。内面上部と上面に手描きで植物や模様が描かれる。口縁部は鉄紅。ツマミ口縁部は釉剝ぎ。肥前産。109・110は染付磁器の皿である。内面には呉須で濃淡のある植物などの模様が描かれる。蛇の目凹型高台。肥前産。111は施釉陶器の灯明皿である。ロクロ成形で内台を貼り付ける。上面には白泥が塗られる。京・信楽系。112は青磁染付の椀である。内面底部にはコンニャク印判の五弁花が押され、外面体部に緑釉

を施す。肥前産。113は染付磁器の筒型椀である。内面底部には手描きで潰れた五弁花、内面と外面体部に手描きで模様が描かれる。高台には離れ砂が付着する。肥前産。114は施釉陶器の小鉢である。ロクロ成形で底部はケズリ出す。口縁部は扁平になり、口縁部が釉剝ぎされていることから段重鉢と考えられるが、口縁部に煤が付着していることから灯明具として転用している。京・信楽系。115は染付磁器の段重鉢である。型押し成形で底部が段に突出する。底部側面と口縁部は釉剝ぎ。外面体部に手描きで鶴や竹が描かれる。瀬戸・美濃系。116は施釉陶器の徳利か。底部に「一本二文」の墨書がある。117は施釉陶器の汁注ぎである。ロクロ成形で高台から底部はロクロケズリ、体部側面に把手が取り付けられる。内面から外面体部に鉄釉を施す。底部に墨書で「□」の窯印が入る。京・信楽系。118は焼締陶器の擂鉢である。口縁部ヨコナデ、外面体部ヨコケズリ。内面には10条1単位の擂目が上から下へ引かれる。口縁部に降灰。堺・明石系。

水路100出土土器（図版17　119～123）　御土居の開口部より北側で出土した遺物である。119は土師器皿Sである。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、内面底周縁部に凹線状の圏線が巡る、底部はオサエ。口縁部に煤が付着。京都13A段階に属する。120は染付磁器の徳利である。口縁部から外面体部、高台内に灰白色の釉を施す。高台に離れ砂が付着する。121は染付磁器の小椀である。外面体部に手描きとコンニャク印判で違い鷹羽紋が描かれる。高台内に文字が書かれるが、判読できない。122は施釉陶器の椀である。ロクロ成形で高台を丁寧にケズリ出す。内面から外面体部まで灰緑色の釉が施される。内面には目跡など重ね焼きの痕跡が確認できる。京・信楽系か。123は染付磁器の皿である。内面底部に五弁花があり、蛇の目釉剝ぎされる。内面には手描きで植物が描かれる。全体に釉溶けが悪い。肥前産。

水路81出土土器（図版17　124～127）　124は施釉陶器の急須蓋である。京・信楽系。125・126は染付磁器の小椀である。内面・内面底部・外面体部に手描きで植物などの模様が描かれる。高台は釉剝ぎ。127は染付磁器の皿である。口縁から体部まで型打ち成形で、口縁部を輪花に型押し、鉄紅を施す。内面には呉須で濃淡のある絵が描かれる。蛇の目凹型高台。肥前産。

護岸14出土土器（図版17　128）　128は護岸14の裏込から出土した染付磁器の皿である。内面底部にコンニャク印判の五弁花が押され、蛇の目釉剝ぎされる。内面は手描きで模様が描かれる。高台は釉剝ぎ。肥前産。

土坑61出土土器（図8　129）　129は施釉陶器の甕である。外面体部に鉄釉を塗った信楽産の甕の底に堺・明石系の擂鉢をモルタルで貼り付けている。

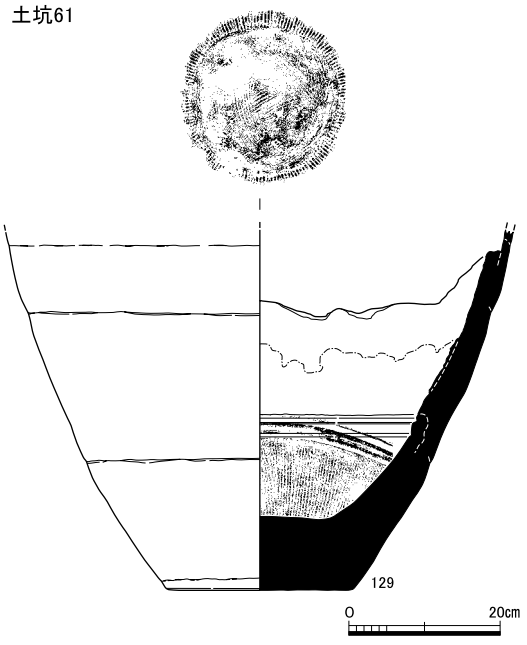


図8　土坑61出土土器実測図（1：10）

溝1出土土器（図版18　130～143）　130は土

師器皿Sである。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、内面底部に凹線状の圏線が巡る、底部はオサエ。京都13A段階に属する。131は施釉陶器の灯明皿である。ロクロ成形で底部から外面体部をケズリ出し、内面に内段を貼り付ける。内面には緑釉を施す。京・信楽系。132は染付磁器の皿である。型打ち成形で高台を貼り付ける。内面には鯱など模様が陽刻される。口縁部に鉄紅を施す。133は施釉陶器の栓である。ロクロ成形で内部をロクロケズリ、外面をロクロナデ。上面のみ白釉を施し、16枚菊の印判は中心からややずれる。上面に離れ砂が付着する。134は染付磁器の蓋である。外面に呉須で模様を描き、全体に透明釉を施す。ツマミ端部は釉剝ぎ。全体的に釉溶けが悪い。135は色絵磁器の椀蓋である。全体に透明釉を施し、その上から赤・緑・黄色で植物、内面には赤で蝶を描く。136・137は染付磁器の椀蓋である。内面・外面に呉須で植物などの模様を描く。137のツマミ内には角福が書かれる。138・139は染付磁器の筒型椀である。138は外面体部に手描きで植物が描かれる。139は内面底部・内面・外面体部に手描きで植物などの模様が描かれる。140は染付磁器の椀で、いわゆる「くらわんか椀」である。外面体部に手描きで模様が描かれる。高台内には手描きで文字が書かれるが判読できない。高台に離れ砂が付着する。141は染付磁器の鉢である。型打ち成形で高台を貼り付ける。高台は釉剝ぎ。142は染付磁器の鉢である。内面・外面体部に手描きで植物などの模様が描かれ、高台内には角福が書かれる。蛇の目凹型高台。肥前産。143は施釉陶器の汁注ぎである。ロクロ成形で丁寧にケズリ出し、内面と外面体部に白釉を施し、植物を描く。内面に目跡が残る。高台内に墨書で「教」と書く。京都産。

石列73出土土器（図版18　144～152）　144・145は染付磁器の椀蓋である。外面に銅板転写の線に呉須で色を塗る。144のツマミ内には「廣明舎製」と製造社名が書かれる。肥前産。145には「陶精園製」と製造社名が書かれる。瀬戸産。ともに時期は明治時代半ば以降。146・147は施釉陶器の蓋である。体部はロクロ成形でツマミを貼り付ける。146は外面に緑釉を施し、白イッチン描きする。147は上面に白泥を施し、手描きで模様を描き、緑イッチン描き。148は染付磁器の小椀である。内面底部に手描きで麒麟、外面体部には手描きで鳳凰などの模様が精工に描かれる。高台内に「原平精製」と製造社名が書かれる。高台は釉剝ぎ。時期は明治時代半ば。149～151は染付磁器の筒型椀である。149の外面体部は型紙摺りで模様が描かれる。150は内面に風景絵、外面体部にアヤメが転写される。外面体部のアヤメは色も転写されるがややずれる。高台内に手描きで「菊製」と製造社名が書かれる。瀬戸・美濃産。151の外面体部は緑色の花模様を転写し、その他の模様を型紙摺りしている。底部は碁笥底で釉剝ぎ。時期は明治時代半ば以降。152は染付磁器の鉢である。内面と外面体部ともに型紙摺りで模様を描く。蛇の目凹型高台。時期は明治時代半ば以降。

石列74出土土器（図版18　153～158）　153は色絵磁器の蓋である。全体に透明釉を施し、その上から朱・緑・濃青色で模様などを描く。口縁部には焼成後に外れやすいよう塗料が塗られる。肥前産。154は色絵磁器の仏飯器である。ロクロ成形で脚内部をケズリ出したのちナデ。全体に透明釉を施し、その上から外面体部に赤・青・緑色で模様を描く。肥前産。155は青磁の香炉である。底部は型押し成形で半月状の脚部と凸型の底を作り、体部は板作りで口縁部を丸く折り曲げる。体

部と底部を別につくり、貼り合わせる。底部には離れ砂が付着する。肥前産。156は染付磁器の椀である。体部は焼歪んで楕円形になる。全体的に透明釉を施し、口縁部から赤褐色の釉を流す。高台は割高台。外面体部には「五徳庵」、高台内には「平安兼山」と書かれる。これは「五徳庵」という店が「平安兼山」という製造会社に外注して製作されたものと考えられる。京都産。時期は明治時代初頭から半ば頃か。157は染付磁器の筒型椀である。外面体部は精工な手描きで模様が描かれる。高台は釉剝ぎ。158は施釉陶器の壷である。底部から口縁部にかけてロクロナデ。口縁部を折り曲げる。全体的に赤褐色の釉を施し、口縁から黒釉を流す。

石列75出土土器（図版19　159～176）　159は施釉陶器の鉢である。ロクロ成形で底部はケズリ出し。内面と外面体部に透明釉を施す。口縁端部は平たく、無釉であるため、段重鉢か。160は施釉陶器の小型の壷である。ロクロ成形で底部を糸切り。内部から外面体部まで緑灰釉を施し、白イッチンで文字が書かれるが判読できない。161・162は施釉陶器の仏花瓶である。ロクロ成形で高台を丁寧にケズリ出し、口縁部から体部に緑釉を施す。京都産。時期は江戸時代末期頃。163は染付磁器の蓋である。上面に植物などの模様が型紙摺りされる。口縁部は釉剝ぎ。164は施釉陶器の蓋である。ロクロ成形で内面底部はロクロケズリ、口縁部ロクロナデ、上部中央にツマミを貼り付ける。外面に白泥を回しかけ、透明釉を施す。京・信楽系。165～167は染付磁器の筒型椀である。165は内面と外面体部に手描きで植物などの模様を精工に描く。高台内に手描きで「大日本翁山造」と製造名が書かれる。高台釉剝ぎ。時期は明治時代初頭から中頃。京都産。166は内面と外面体部に手描きで植物などの模様を精工に描き、外面体部に線刻が波状に入る。高台内に手描きで「〇寿精製」と製造名が書かれる。高台釉剝ぎ。167は外面体部に植物や模様などが転写される。高台内に転写で「屋業三製」と書かれる。時期は明治時代。瀬戸・美濃産。168・169は染付磁器の小椀である。168は外面体部に赤褐色の釉を施す。高台内に手描きで「山兵造」と製造名が書かれる。京都産。時期は明治時代初頭から中頃。169は外面体部に手描きで植物などが描かれる。高台内に手書きで「大明成化年製」と書かれる。時期は江戸時代末期から明治時代。170～174は染付磁器の椀である。170はいわゆる「くらわんか椀」であり、外面体部に簡略化した手描きの梅林文が描かれる。肥前産。171は外面体部に龍が転写され、高台内に「勘王園製」と製造社名が書かれる。瀬戸・美濃産。172は外面体部に風景絵が転写され、高台内に「中淺井製」と製造社名が書かれる。173は内部・内面底部・外面体部に模様が型紙摺りされる。174は外面体部に模様が型紙摺りされる。175は青磁の鉢である。型押し成形で高台を貼り付ける。内面から高台外面まで緑釉を施し、高台内に透明釉を施す。瀬戸・美濃産。176は色絵磁器の皿である。全体に透明釉を施し、その上から赤・緑・黄・青・紫色で精工に植物などの模様を描く。口縁端部には鉄紅を施し、輪花に施す。蛇の目凹型高台。肥前産。

溝96出土土器（図版19　177～184）　177は施釉陶器の小型の壷である。ロクロ成形で底部を糸切り。口縁端部は釉剝ぎ。内面と外面体部に緑灰釉を施し、手描きで「京都木田」と書かれる。178は磁器の合子である。内面と外面体部に透明釉を施し、底部に一部判読できないが転写で「鹿印煉歯磨…」と書かれる。口縁部と高台は釉剝ぎ。1893年４月に長瀬商店（現在の花王）から発売され

た鹿印練歯磨の卵型容器である[3)]。179は施釉陶器の汽車土瓶である。外面体部に透明釉を施し、手描きで「姫路」「ひめじ」と書かれる。京都産。180は磁器の椀である。外面体部に鉄釉を流し、外面体部下を約14面ケズリ出す。高台内に刻印があるが判読できない。181は焼締陶器の布袋徳利である。底部に窯印が押される。備前産。182は染付磁器の椀である。やや口縁が体部から外反する。内外面に手描きで網目文を描く。高台に判読できないが手描きで文字が書かれる。高台は釉剝ぎ。瀬戸・美濃産。183が施釉陶器の壷である。ロクロ成形で側面に装飾の飾りを貼り付ける。全体に透明釉を施し、その上から赤・白・黒色で人物や植物などを描く。底部に意図的にあけたとみられる穿孔がある。京都産。184は磁器の酒瓶である。ロクロ成形で底部に焼成後はがれやすいように塗料が塗られる。底部には手書きで「山陰名産 八木桒酒 秋田醸造」と書かれる。

室７出土土器（図版19　185） 185は染付磁器のティーカップである。外面体部にはシノワズリーとよばれるヨーロッパで流行した中国風の絵柄、把手には植物が転写される。高台内に「MADE IN JAPAN」と書かれる。明治時代初頭以降に日本の陶磁器類が世界で流行し、海外を意識して作られたもの。時期は明治時代半ば以降。

（３）瓦類（図版20、付表２）

出土した瓦の多くは、地業55・98や炉６の構築、井戸枠として使用されていたものである。また、地業55・98の周辺で出土した瓦は被熱を受け、小片が多い。

軒平瓦（瓦１～６） 瓦１は外行３転唐草文、中心文は８葉文。調整は瓦当上部ヨコケズリ、下部ヨコナデ。平瓦部凹面ヨコナデ。凸面ナデ。井戸８掘形より出土。

瓦２は外行３転唐草文、中心文は２葉の下に珠点。調整は瓦当下部ヨコケズリ、裏面ヨコナデ。平瓦部凸面ナデ。井戸８掘形より出土。

瓦３は外行２転唐草文、両側２転は複線で表現、中心文は３葉文の下に珠点。調整は瓦当上部ヨコケズリ。側面ヨコナデ。平瓦部凹凸面共にナデ。瓦当にキラコ付着。整地土より出土。

瓦４は唐草文、中心文は５葉。瓦当側面ヨコナデ、瓦当裏面ヨコナデ。整地土より出土。

瓦５は外行２転唐草文、中心文は８葉文。調整は瓦当側面ヨコナデ、瓦当裏面ヨコナデ。平瓦部凹面工具によるタテナデ、キラコ付着。凸面ナデ、煤付着。整地土より出土。

瓦６は外行２転半唐草文、中心文は５葉文。調整は瓦当側面ヨコナデ、瓦当裏面ヨコナデ。平瓦部凹面ナナメナデ。凸面ヨコナデのちタテナデ、煤が付着。瓦当にキラコ付着。井戸８掘形より出土。

軒桟瓦（瓦７～９） 瓦７は軒桟瓦の軒平部分で、外行３転唐草文、中心文は珠点３つ。調整は瓦当側面ヨコナデ。平瓦部凹面ヨコナデのちタテナデ。凸面ヨコナデのちナナメナデ。炉６構築土より出土。

瓦８は軒桟瓦の軒平部分で、外行３転唐草文、両側２・３転目は複線で表現、中心文は３葉文の下に珠点。調整は瓦当側面ヨコナデ、裏面ヨコナデ。平瓦部凹面ナデ、キラコ付着。凸面タテナデ。耕作土より出土。

瓦９は軒桟瓦の軒丸部分で、頭と尾が離れる右巻三巴文。外区に珠文が16個。瓦当部にキラコが付着する。瓦当裏面はナデ、接合部ナデ。軒平部は欠損。整地土より出土。

棟丸瓦（瓦10） 凸弁十五葉一重菊の菊花文。瓦当裏面下半は工具によるナデ、瓦当側面はヨコナデ。瓦当にキラコが付着する。護岸14裏込より出土。

道具瓦（瓦11） 外行２転唐草文、中心文は３草文。調整は瓦当側面ヨコナデ。平瓦部凹面ヨコナデのちタテナデ。凸面ヨコナデのちナナメナデ。側面に刻印があり、板塀瓦の可能性もある。耕作土より出土。

丸瓦（瓦12） 凹面は縄タタキのち棒状圧痕。凸面はタテナデ、「御用 瓦師五良兵衛」刻印あり。燻瓦。炉６より出土。

（４）土製品（図版21・22・32、図９、付表３）

土製品は、泥面子・人形・ミニチュア製品・窯道具など多種多様なものが出土した。出土量は土器類に次いで多い。成形方法は型づくりと手捏ねがあり、型づくりには体部が中実のものと中空のものがある。対して手捏ねはほぼ中実である。磁器や施釉のものも含まれる。

土１～59は泥面子である。今回の調査で出土した泥面子の総数は200点以上にのぼる。大半が面打と分類される円盤状の形をしたものである（土１～46・51～56）。図柄には文字・道具・動物・植物・紋[4)]などがある。大きさは３つに分類することができ、径2.1～2.5㎝の小型（土41～46）、径2.7～3.1㎝の中型（土１～40）、径4.2～6.2㎝の大型（土51～56）がある。また、芥子面と分類される人面型のもの（土47～50）や泥面子の型（面模）（土57～59）もある。泥面子は全て表面は型づくりで裏面をナデとオサエで成形する。型の土57・58は適量の粘土玉に図柄を凸型に彫ったものを押し付けている。土59は粘土板に図柄を凸型に彫ったものを押し付け、さらに縁に粘土を巻いている。

土60～62はミニチュア製品の施釉陶器蓋である。型づくりで上面に白泥釉を施す。土62は上部と受口部を別々に型でつくり、貼り付けている。土63は紅皿の赤絵蓋である。型づくりで口縁部以外に透明釉を施し、赤絵で扇に束ね熨斗が描かれる。土64～67はミニチュア製品の椀である。土64は磁器製の型づくり成形。全体に透明釉がかかり、高台には離れ砂が付着する。土65は陶器製の型づくり成形。外面体部には植物柄が印刻され、その上から赤褐色の釉で丸模様が描かれる。土66は施釉陶器の型づくり成形。全体を型づくりしたのち内面をナデ。内面から外面体部まで黄釉が施こされる。67は磁器製のロクロ成形。土68・69はミニチュア製品の土師器皿である。土68は型に内面から押し付ける型押し成形。土69は手捏ね成形。口縁部をツマミ上げるようにして成形されているため、内面には爪痕がまるく残る。土70は紅皿である。磁器製で型づくり成形。内面から外面体部まで白釉が施される。

土71～73はいわゆるツボツボである。土71・72は手捏ね成形で底部が平ら。土73は型づくり成形で内部を削り出し、底部が突出する。

土74・75はいわゆるタンコロと呼ばれる灯火具である。共に体部は型づくり成形。内面上部に

棒状の粘土板を貼り付ける。粘土板の中央には灯芯挿入孔があり、土74には煤が付着する。

土76はいわゆる鳩笛と呼ばれる鳥を模した笛である。型づくり成形で体部上面と尾先には孔が開いている。

土77～79はミニチュア製品の羽釜蓋である。全て土師質で型づくり成形である。土79の表面にはキラコが付着する。土80～82はミニチュア製品の羽釜である。土80・81は施釉陶器の型づくり成形。羽より上部外面に波状の陽刻紋様、内面から外面羽根まで緑釉が施される。土82は土師質で型づくり成形である。羽より上部と下部で別々に型取りされ、接合される。外面にはキラコが付着する。

土83は土鈴である。土師質で手捏ね成形。薄い粘土板に径１㎝程の珠を入れて丸く包み、頂点を絞る。頂点の絞った場所には紐を通すための孔と底部には幅0.5㎝程の孔が開いている。

土84は焼塩壷である。土師質で手捏ね成形。内面は棒状のものに布を巻いたもので押し付け、外面は摩滅が著しい。京都深草産。

土85は虚無僧、土86は地蔵菩薩の人形である。共に型づくり成形で中実。土85の表面にはキラコが付着。土86の表面には白釉が施され、背に「千射之内施主　寅ノ年男」と刻印が押される。土87はミニチュア製品の七輪である。土師質で型づくり成形。上部には五徳、内部には目皿を入れる段、外面には風を取り入れて火力を調整するための戸口など細かく表現されている。土88はミニチュア製品の仏花瓶である。土師質で型づくり成形。上部には花を刺すための孔が表現されている。土89は独楽である。土師質で型づくり成形。上部中央には柄の差込孔があり、木が少量残存している。土90は玩具のガラガラである。土師質で型づくり成形。中が空洞になっており、振るとカラカラと音が鳴る。柄には墨が塗られている。土91は箱庭道具の塔である。土師質で型づくり成形、中が空洞になっている。屋根の瓦が細かく表現されており、表面にはキラコが付着している。土92はミミズクの人形である。土師質で型づくり成形、中が空洞になっている。ミミズクの背の羽部分は赤く塗られている。表面にはキラコが付着する。土93は狐の人形である。土師質で型押し成形、中が空洞になっている。

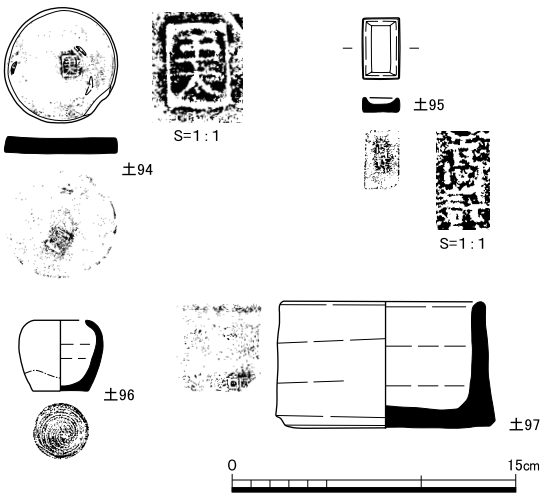


図９　窯道具実測図（１：４）

土94～97は窯道具である。土94はハマである。両面に四角に「王太」と刻印が押される。土95は磁器製の色見パレットである。裏面には「高〇」と刻印が押される。土96は陶器製の色見壷である。口縁部から外面体部に白釉が塗られ、貫入が入る。形はいわゆる粟田型。土94～97は溝96から出土した。土97は匣鉢である。底部から口縁部にかけてロクロケズリのちナデ。外面体部に刻印が押される。胎土は信楽産。水路81から出土した。

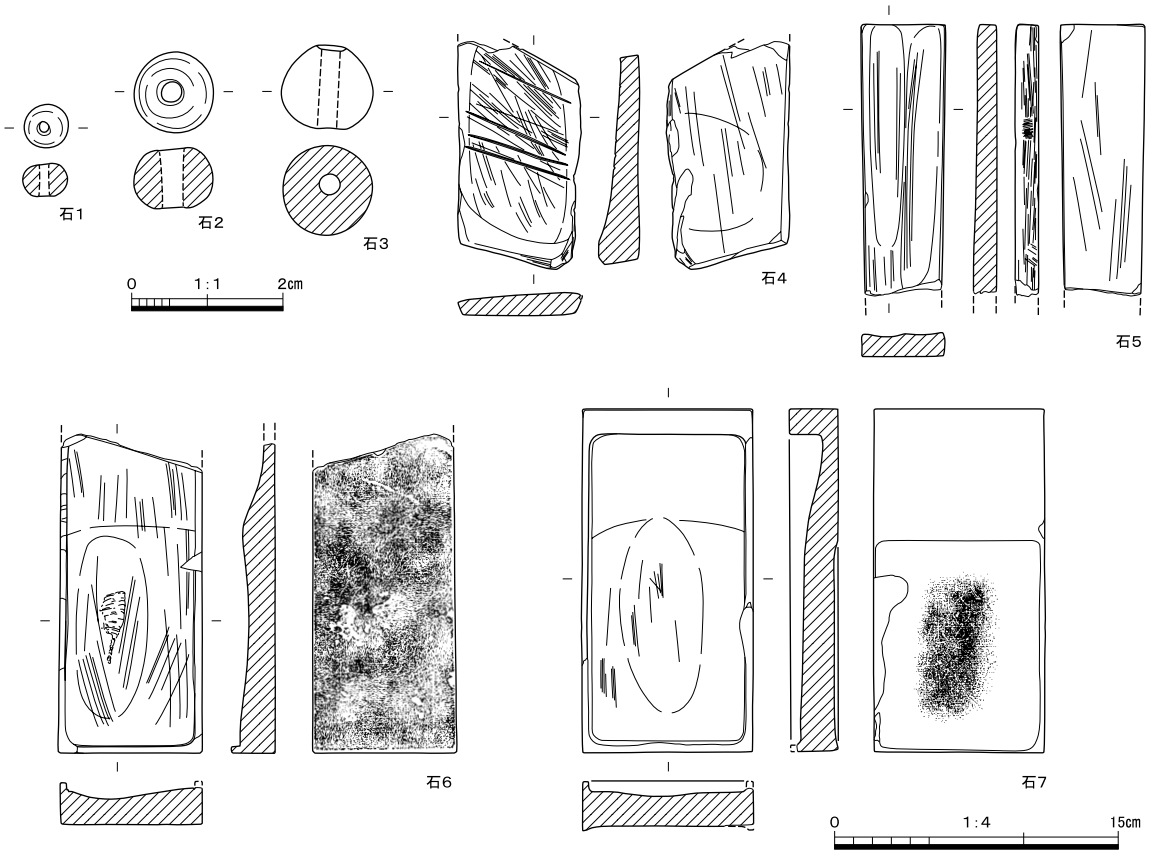


図10　石製品実測図（１：４、石１～３のみ１：１）

（５）石製品（図10、付表４）

出土した石製品には、珠・砥石・硯などがある。小片のため全てを図化できなかったが、特に砥石の小片が多量に出土している。

石１～３は珠である。碧玉製の数珠玉と考えられる。石１は緑透明色を呈し、耕作土より出土した。石２は青緑透明色を呈し、暗渠94の掘形より出土した。石３は白透明色を呈し、整地土より出土した。石４・５は砥石である。共に使用痕が見受けられる。石４の表面は中心にかけてやや窪み、斜めに強い刻線が入る。炉６より出土。石５の表面は幅２㎝程の溝が２条ある。整地土より出土。石６・７は硯である。石６の裏面には文字が線刻されるが判読できない。溝１より出土。石７の裏面は半分やや窪み、文字が線刻されるが判読できない。重機掘削時に出土した。

（６）金属製品（図版23、付表５）

出土した金属製品には、火箸・煙管・ミニチュア製品などがある。

金１は火箸である。上端から１㎝と３㎝の位置に凸線を巡らす。土坑46より出土。金２は煙管の吸口、金３～５は煙管の雁首である。金２の羅宇側には竹が残存している。土坑46より出土した。金３は耕作土より出土。金４の羅宇側には甲羅が残存していた。暗渠94掘形より出土。金５は土坑46より出土。金６はミニチュア製品の薙刀である。炉６より出土。

（７）銭貨（図版23、付表６）

銭貨は合計175枚出土した。そのうちの判読できるものの多くが寛永通寶である。他にも小片であるが、文久永寶や天禧通寶を１枚ずつ確認した。本書における銭貨の分類などは、永井久美男氏の分類[5)]に従った。

銭１は半銭である。表には「半銭」「二百枚」「換一圓」、背には中心に龍、「大日本・明治八年・1/2 SEN・」と記す。攪乱より出土。

銭２は文久永寶である。円形方孔の銭貨。表には上下右左の順に「文久永寶」と記す。背は波11。重機掘削時出土。

銭３～６はいわゆる「新寛永」。円形方孔の銭貨。表には上下右左の順に「寛永通寶」と記す。銭３の背は「文」で２期。暗渠94掘形より出土。銭４～６の背は無文。銭４は炉６より出土。銭５は耕作土より出土。銭６は整地土より出土。銭７・８はいわゆる「古寛永」で１期。円形方孔の銭貨。表には上下右左の順に「寛永通寶」と記し、背は無文。ともに整地土より出土。

銭９は寶永通寶である。円形方孔の銭貨で、十文銭。表には上下右左の順に「寶永通寶」、背輪には上下右左の順に「永久世用」と記す。永と世の間に「珍」の極印が打たれる。整地土より出土。

（８）ガラス製品（図版23、付表７）

出土したガラス製品には、瓶や皿、グラスなど多種多様なものがある。本書では、遺構の年代などを明らかにすることができるもののみを図化した。図化したガラス製品は全て瓶である。

ガ１・２は目薬瓶である。ガ１は「大阪 浪花薬舗」「目薬 ハツキリ」、ガ２は「大阪 永嶋」「目薬 瀧谷水」と陽刻される。瀧谷水とは眼病に御利益があるとされる大阪の瀧谷不動明王寺で汲まれた水[6)]と考えられる。ともに石列75より出土。時期は明治時代。

ガ３は化粧水瓶である。「美顔水」と陽刻される。美顔水は明治18年（1885）から販売されるようになる[7)]。石列73より出土。

ガ４は牛乳瓶である。「大阪驛」「全乳 水了軒」と陽刻される。水了軒とは明治21年創業の駅弁販売店である[8)]。石列75より出土。

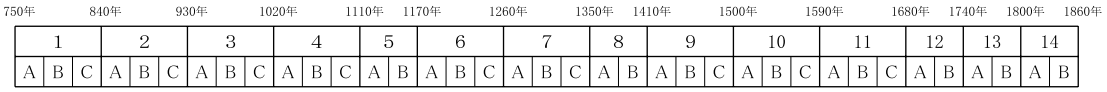
ガ５～８は清涼飲料瓶である。全て「みかん水」と陽刻される。同じみかん水であっても製造型の形が異なる。ガ５は石列75より出土。ガ６は石列73裏込より出土。ガ７・８は石列75より出土。みかん水は明治時代から販売されるようになる[9)]。

ガ９はビール瓶である。ヒール部分に「登録◎商標」「大日本麦酒株式會□□造」と陽刻される。大日本麦酒株式会社とは、明治39年（1906）に日本麦酒株式会社と大阪麦酒株式会社、桜田麦酒株式会社が合併して発足したビール会社である[10)]。これらの瓶は注ぎ口から底部にかけて側面に細い筋が入ることから型の中に溶けたガラスを吹き込む型吹き技法[11)]で成形されたとわかる。石列75より出土。

註

1） 骨については、東海大学の丸山真史准教授に同定・観察を依頼した。

2） 平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年



3） 国立科学博物館 産業技術史資料情報センター　https://sts.kahaku.go.jp/　HITNET産業技術資料共通データベース　花王ミュージアム（参照 2021-10-22）

4） 紋の名称については、以下の文献を参考した。
樋口清之・丹羽基二『家紋大図鑑』 株式会社 秋田書店　1971年

5） 永井久美男編『日本出土銭総覧　1996年度版』 兵庫県埋蔵銭調査会　1996年

6） 瀧谷水　https://takidanifudouson.or.jp/（参照 2021-10-22）

7） 美顔水　https://www.meishoku.co.jp/（参照 2021-10-22）

8） 水了軒の歴史　http://www.suiryoken.co.jp/history.html（参照 2021-10-22）

9） 桜井準也『増補　ガラス瓶の考古学』 株式会社 六一書房　2019年
庄司太一「蜜柑水壜覚書」『和ガラスの心 －勾玉からびいどろ・ぎやまんまで－』 MIHO MUSEUM　2006年

10） 神原雄一郎『盛岡の地中から発見されたガラス瓶－明治から昭和にかけてのガラス瓶－』平成23年度遺跡の学び館学芸講座「発掘された盛岡のまち」1　盛岡市遺跡の学び館　2011年
大日本麦酒株式会社の設立　https://www.sapporobeer.jp/company/history/1906.html（参照 2021-10-22）

11） 桜井準也『増補　ガラス瓶の考古学』 株式会社 六一書房　2019年

5．まとめ

本調査地は、平安京左京八条四坊八町跡の東部と寛永８年（1641）から承応２年（1653）に行われた渉成園の建設を契機にして、付け替えられた江戸時代前期の御土居跡に相当する。調査の結果、江戸時代前期の土塁、江戸時代後期の整地土・石積み・水路、江戸時代後期から末期頃の炉・地業・井戸・土坑・水路、明治時代以降の石列・溝・室・土坑などを検出した。以下に調査成果をまとめ、考察を述べたい。

（1）御土居について

御土居は寛文９年（1669）以降、豪商角倉家が幕府から管理を任されるようになる。御土居の管理・現状把握のために角倉家によって作成された『京都惣曲輪御土居絵図』（1702年、以下「絵図」という）は、土塁の規模や周辺の施設などを詳細に記しており、精度が高い。これまで数多くの御土居跡の発掘調査からその精度が確認されている（図11・表４）。

今回の調査地と「絵図」を合わせると、調査区北側に御土居の土塁、七条舟入の水路、門と塀、開口部の隅に石垣のようなものが描かれており、これらの検出が想定された（図版11）。調査の結果、「絵図」から想定していた位置で御土居の土塁97、七条舟入の水路と考えられる水路88・81・溝96、石積み95などを検出した。

御土居の開口部　開口部いわゆる「口」は、豊臣期の『三藐院記』によると10口、『京都図屏風』によると40口あり、徳川期になると人々が通りやすいよう、さらに御土居が切り崩されていき、「絵図」によると50口以上にもなる。今回検出した開口部は、「絵図」には「○○口」というような開口部としての名前はなく、主に七条舟入へと続く舟の入り口として使用されており、人は通行していなかったようである[1)]。また、口の規模は幅七間弐尺七寸（約13.5ｍ）と「絵図」には書かれているが、今回の調査では開口部の東側のみの検出であったため、規模については不明である。門や塀の柱穴の可能性がある柱穴93も検出したが、水路を何度も掘り替えているため、ほとんど削平されていた。

開口部から東側の御土居の土塁については「絵図」には「舟入東小口」と書かれており、その規模は幅六間三尺六寸（約12ｍ）とあり、高さについては記述がない。「絵図」は改修工事などで規模などが変わった際には上から紙を貼り、新たに情報を書き足しているが、「舟入東小口」については規模の変更はない。今回の調査で検出した「舟入東小口」と調査３で検出した「舟入西小口」は、いずれも南裾部を検出したにすぎず、全貌までは明らかにできなかった。

土塁の構築方法　豊臣期の土塁の構築方法と同じく、徳川期の土塁も付近の砂質土・砂礫・粗砂・シルトなど異なる土を交互に積み重ねて盛土をしていることが明らかとなった。今回の調査地付近で採取できる土は、鴨川氾濫の影響による砂礫・粗砂であるため崩れやすく、特に開口部付近では修復した痕跡が確認できた。修復痕跡の１つに石積み95が挙げられる。先述したように今回検出した開口部は人の通行路ではなかったためか、崩れた開口部の南西隅部のみ石を積み、補強

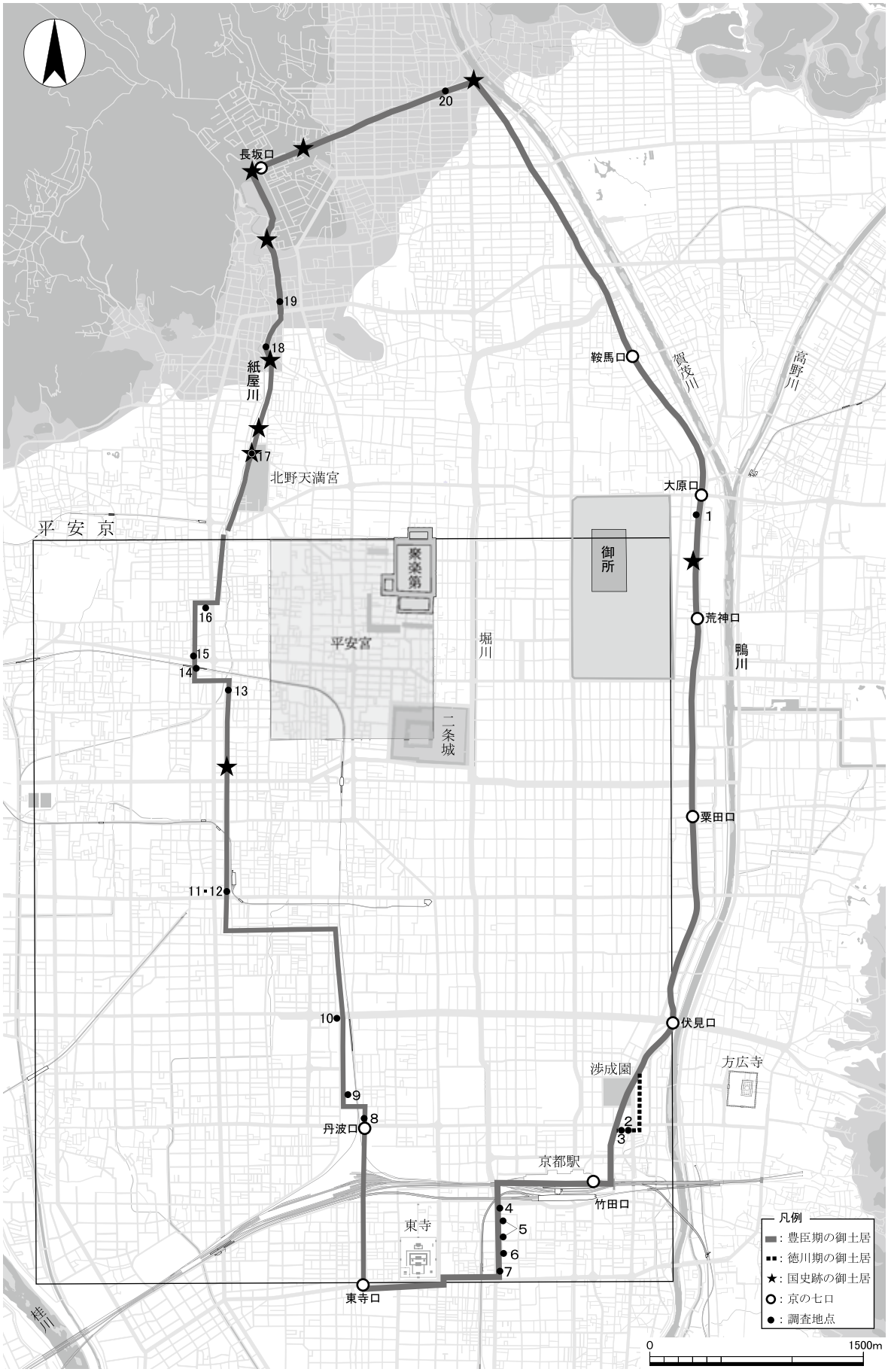


図11　御土居既往調査地点図（1：40,000）

表４　御土居既往調査一覧表

No.	調査地	調査期間	遺　構	御土居から出土した遺物	文　献
1	上京区御車道今出川下二丁目栄町361番地	2008.02.25	土塁内溝を検出。 幅1.6m以上、深さ0.6m。		馬瀬智光「御土居跡・寺町旧域」『京都市内遺跡調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
2	下京区郷之町153番地7ほか	2021.04.26 ～2021.09.24	17世紀前半に付け替えた土塁を検出。 幅7.5m以上、高さ0.7m		本報告
3	下京区小稲荷町22番地2ほか	2013.04.15 ～2013.08.12	17世紀前半に付け替えた土塁を検出。 幅4m、高さ0.6m。		近藤章子ほか『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年
4	南区西九条北ノ内町6・7・8番地1	2014.05.21 ～2014.09.26	堀を検出。 幅8.5m以上、深さ0.75m、南北長45m。	17世紀前半～19世紀の陶磁器・木製品が出土。	松吉祐希ほか『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年
5	南区西九条鳥居口町1番地	1991.05.01 ～1992.03.31	堀を検出。 幅14m以上、深さ2.5m。		菅田 薫「平安京左京九条二坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
6	南区西九条春日町13番地 (九条弘道小学校)	1980.09.16 ～1980.10.09	堀を検出。 幅17.5m、深さ2m。		「平安京左京九条二坊十三町」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
7	南区西九条春日町19番地	1984.05.21 ～1984.10.01	堀を検出。 幅20m、深さ1.5m。	「寛永二十一年」(1644)、「正保四年」(1647)の紀年銘木簡が出土。	丸川義広ほか「平安京左京九条二坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
8	下京区朱雀正会町1番地20	2009.03.09 ～2009.04.30	土塁基底部を検出。 幅5m以上、高さ0.25m。		小檜山一良『平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-1 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
9	下京区朱雀堂ノ口町	1982.01.27 ～1982.10.15	土塁と堀を検出。 土塁は幅20m、高さ2m。 堀は幅20m、深さ2m。	大量の木製品と共に人骨が出土。	平田 泰ほか「右京七条一坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
10	下京区中堂寺南町地内	2001.01.18 ～2001.04.06	堀を検出。 幅12.5m、深さ1.5m。	江戸時代前半の陶磁器や寛永通寶20数枚が出土。	平尾政幸ほか『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
11	中京区壬生淵田町7・8番地	2015.01.21 ～2015.04.30	堀を検出。 幅6m以上、深さ1.7m以上。		布川豊治ほか『平安京右京四条二坊十一町・西堀川小路跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-1 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年
12	中京区壬生淵田町7・8番地	2013.11.29 ～2013.12.02 2014.09.01 ～2013.09.19	土塁基底部を検出。 幅20m以上、深さ1m。		鈴木久史「平安京右京四条二坊十一町跡(13H408)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
13	中京区西ノ京笠殿町38番地	2012.05.08 ～2012.09.07	堀を検出。 幅14m以上、深さ3m。		高橋 潔ほか『平安京右京二条二坊十一町・西堀川小路跡、御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-25 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年
14	中京区西ノ京円町地内	1997.09.08 ～1998.02.13	土塁内溝を検出。 幅1.7m、深さ0.3m。		小檜山一良ほか「平安宮左馬寮ー朝堂院跡・平安京右京一・二条二～四坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
15	中京区西ノ京円町55番地1	1999.11.01 ～2000.03.25	土塁基底部と内溝を検出。 基底部は幅13～14m。 内溝は幅2.0m、深さ0.4m。		小森俊寛ほか「平安京右京一条二坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
16	中京区西ノ京中保町1番地4 (北野中学校)	1987.10.08 ～1987.11.30	堀を検出。 幅5m以上、深さ1m。	「天正十三年」(1585)、「慶長□□□」、「甲午 承應」(1654)、「寛文九年」(1669)、「延ヵ宝三年」(1675)の紀年銘木簡が出土。	菅田 薫「平安京右京一条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
17	上京区馬喰町・北町	2013.06.03 ～2013.08.09	土塁と石組暗渠を検出。 土塁は幅約17m。 暗渠は長さ19.3m。		『北野天満宮御土居 史跡等・登録記念物・歴史の道整備事業報告書』宗教法人北野天満宮 2014年
18	北区衣笠荒見町 (旧野口町)	1919年	土塁を測量。		西田直二郎「御土居」『京都府史蹟勝地調査報告 第二冊』京都府 1920年
19	北区紫野北花ノ坊町31番地	2016.09.01 ～2016.12.02	土塁基底部と堀を検出。 土塁は幅14m以上、高さ10.5m以上。 堀は9m以上、深さ4.5m。		持田透ほか『御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017年
20	北区紫竹上堀川町	2000.02.14	土塁の北端部を確認。		『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年

※ 御土居跡地と考えられる地点の調査はこれ以外にもあるが、主要なものに限定した。

している。対して人の通行路であった調査地より70ｍ北東にある七条通東端の開口部は、崩れてこないようしっかりと石を積んで補強している様子が描かれている（図12）。

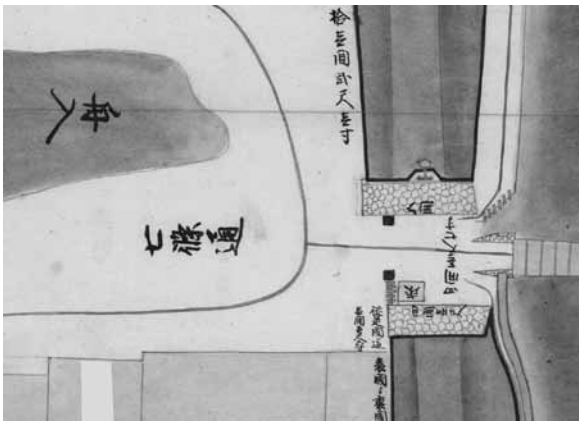


図12　七条通東端の開口部
（『京都惣曲輪御土居絵図』京都大学総合博物館所蔵）

徳川期の御土居堀の有無　豊臣期の御土居の調査から、堀はごみ捨て場として利用され、掘られてから約100年以内に埋没している例が多いことがわかっている。また、豊臣期の史料などには「土居堀」とあるのに対し、徳川期になると「土居」「御土居」と表記され、様々な絵図にも堀は描かれていない。徳川期には堀が軽視されている可能性が考えられている[2)]。また、調査３では土塁を検出したのみである。

以上のことから、豊臣期の御土居と徳川期の御土居の大きな相違点として「堀がないこと」が挙げられていた。今回の調査地では、御土居裾部で明治時代以降に掘削された溝１と、それに削平された江戸時代後期の護岸14が検出されたことから、江戸時代後期には御土居裾部に溝があったことが確認できた。「絵図」には作成された1702年の段階には堀の表現はないが、その後の修正では「舟入東小口」の南側のみ細い溝のようなものが書かれている（図13）。「絵図」の精度が高いことから溝の規模を推測すると、土塁の規模が幅12ｍであるため、溝の幅は１ｍ程ということになる。修正された時期はわからないが、角倉家が管理していた寛政３年（1791）までの絵図であるため、江戸時代中期にはこの細い溝のようなものがあったと考えられる。正徳４年（1714）以降、「舟入東小口」の南側に六条村の人々が生活し始めるのに伴い、排水のためにこの細い溝が「舟入東小口」の南側のみに掘られた可能性が考えられる。豊臣期の御土居にあたる調査７においても堀の埋没後に排水溝が設けられている。堀の機能に変化があった可能性が考えられる。

御土居の土塁「舟入東小口」と堀の存続時期　土塁は、『改正京都区分一覧之図[3)]』（図14）など明治９年（1876）までに作成された絵図や地図には「舟入東小口」「舟入西小口」ともに確認するこ

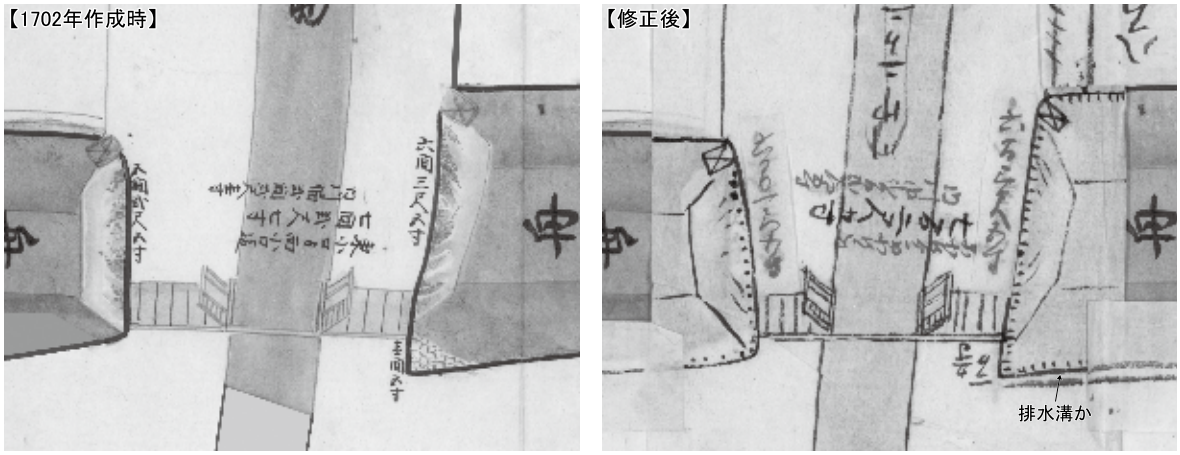


図13　舟入東小口新旧比較図　（『京都惣曲輪御土居絵図』京都大学総合博物館所蔵）

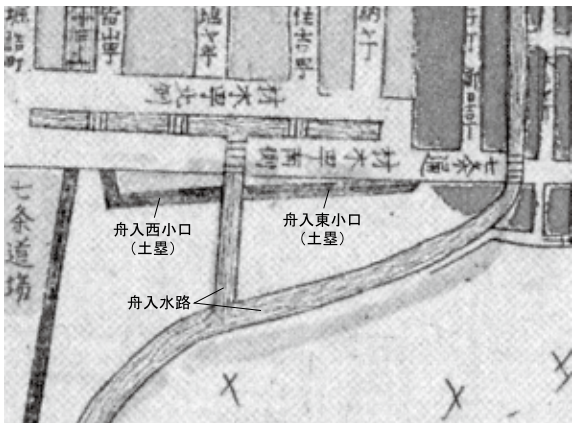


図14 『改正京都区分一覧之図』明治９年（1876）
『慶長昭和京都地図集成』柏書房より転載、一部加筆した。

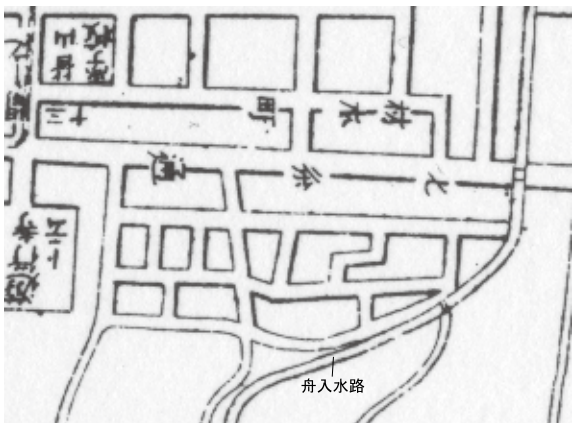


図15 『新撰京都古今全図』明治28年（1895）
『慶長昭和京都地図集成』柏書房より転載、一部加筆した。

とができ、それ以降に作成された『新撰京都古今全図』[4)]（図15）などの絵図や地図には確認することができない。。おそらく明治10年（1877）、調査地北側に七条停車場を新設するのに伴い、宅地地割などが変わり、土塁の上部が削られたものと考える。よって土塁は1653～1876年頃、約220年以上もこの地に存続していたことになる。また、現在の都市計画図を見てみると、土塁が失われた現在においても土塁の南裾ラインは、郷之町と材木町の地区を分ける境界線として残っている。

一方、土塁裾部に掘られた溝１は、明治10年（1877）以降に土塁が失われてからも、高瀬川からの水を東から西へ流す溝として昭和の中頃まで機能していたことが出土遺物から明らかとなった。溝１は一部で近代以降の石組護岸を検出した。溝中央部の護岸は石のサイズがやや大きく、胴木が使用されている（図16・17）。

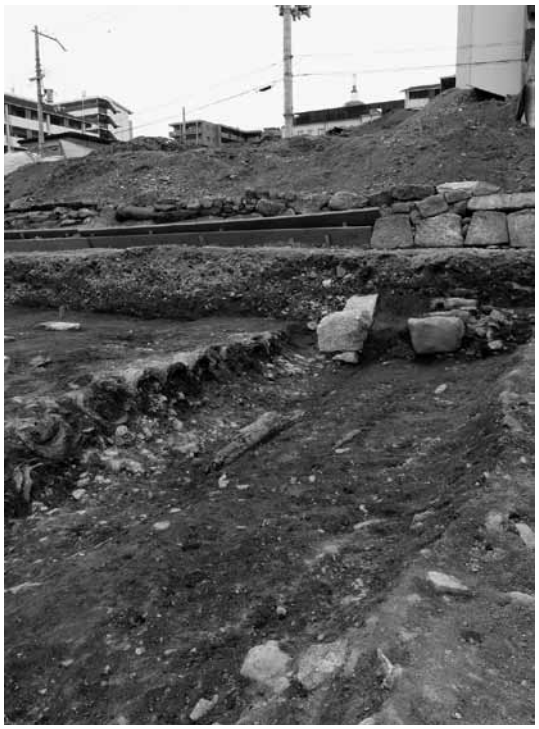


図16　昭和時代の溝１ 中央部（北東から）

図17　昭和時代の溝１ 西部（南西から）

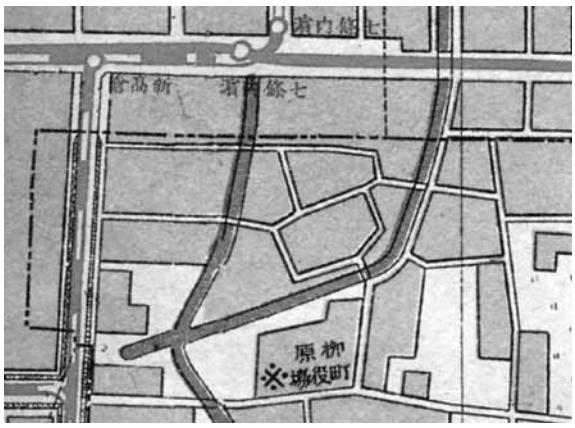


図18 『大典記念京都市市街地図』大正４年（1915）
『慶長昭和京都地図集成』柏書房より転載

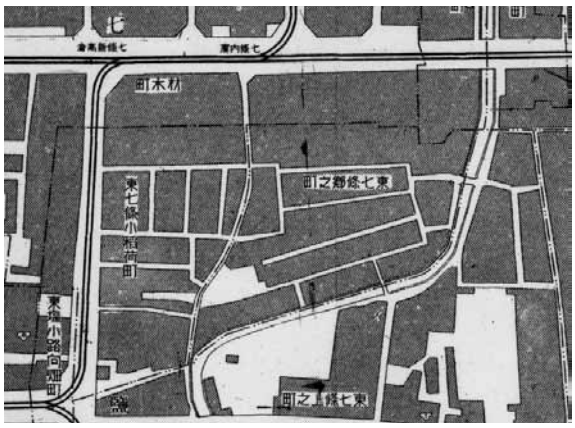


図19 大正11年（1922）の都市計画図
近代京都オーバーレイマップより転載

（２）七条舟入の水路について

七条舟入は慶安元年（1648）の渉成園造営と周辺開発を契機として、渉成園の約50ｍ南に造られたとあるため、水路の造営も同時期であると考えられる。舟入は、大正元年（1912）に七条大宮と東大路を結ぶ七条通の拡張と市電の新線開通のため埋め立てられた。しかし、舟入が埋め立てられた後も水路は残存していたようで『大典記念京都市市街地図』[5]（図18）など大正４年（1915）までは地図などから確認することができる。大正11年（1922）には六条村の南から北へ上がる水路が埋め立てられ、道路となっている（図19）。その後、昭和48年（1973）になると、ガスや水道管が埋設された。七条舟入の水路の場所は、水路がなくなった現在においても、小稲荷町と郷之町の境界線として残っている。

今回の調査では、江戸時代後期から明治時代中期頃の七条舟入への水路は、３時期の変遷（水路100・88・81）を確認することができた。水路100の段階では方位が東へ振れていたものが、水路88の段階で北半部を埋めて方位が逆に西へと変化している。また、その時期は水路100の埋土から18世紀以降であることがわかる。水路88と水路81護岸から出土した遺物には、時期差があまりないことから短期間で約0.5ｍ西側へ新しく造り直されていることが明らかとなった。また、護岸の材料には天明７年（1787）に刊行された『拾遺都名所図会』[6]の絵図（図20）のように丸杭と横板を使用していた。

明治時代半ば頃になると水路の護岸（石列73）は、凝灰岩の間知石を用いて、中段階の護岸から西へ約１ｍ移動して造り替えられる。また、今回の調査では慶安元年（1648）に造られた当初の水路を確認できなかった。このことから、当初の水路東護岸は今回検出した護岸よりも西側にあり、後世に削平されてしまったと考えられる。

図20 『拾遺都名所図会』の高瀬川護岸
『新修京都叢書』臨川書店より転載

高瀬川については様々な史料があるが、江戸時代以降の工事記録を記したものは少ない。さらに七条舟入の水路について記している資料はほとんどなく、規模については「絵図」にて「門川幅弐間弐尺五寸（約4.4ｍ）」と記されているのみである。時期はやや異なるが、慶長19年頃（1614）に書かれた『角倉文書』によると「五条丹波橋川幅平均四間（約7.3ｍ）」とあるため、水路は本流よりも半分ほどの規模だったことがわかる。1813年頃に作成された『高瀬覚書』によると、高瀬舟（十五石舟）の規模は「舖（しき）長 六間一尺（約11.2ｍ）」「舖幅 中 六尺七寸八分（約２ｍ）」とあるため、本流も水路も舟が方向転換できない川幅であった。

既往調査５－①（図５）では調査区の底で丸杭の痕跡を検出している。この丸杭の列が今回検出した護岸の中段階の護岸と対応するならば、水路の幅は約５ｍとなる。既往調査４（図５）で検出した水路について「規模は幅8.9ｍ、深さ2.2ｍあり、肩口を板材と杭、南側の一部は石垣で護岸されていた。」としているが、南側で検出した石垣の約2.5ｍ北側に板材と杭跡が図化されている。北側の板材と杭で造られた肩口と石垣の約2.5ｍ北側に図化されている板材と杭跡の幅は約５ｍとなり、今回の調査成果とほぼ同じ数値となる。

（３）六条村について

本調査地は六条村の最北端に位置する。『諸式留帳』によるとこの地には、正徳４年（1714）には六条村の人々が生活し始める。しかし今回の調査では18世紀半ば以前の遺構を検出できなかったことや1786年に作成された『天明六年京都洛中洛外絵図』には「畑」と書かれていることから、移転して直ぐには居住地ではなかったことが明らかとなった。水路100の一部を埋めて水路88へと水路方位の変更したのは、出土遺物の時期から、この六条村移転の頃と考えられる。

また、今回の調査と既往調査５－②では調査区の広範囲にわたり焼土面が広がっていることや出土遺物の年代から元治元年（1864）におこった元治の大火で焼けた痕跡だと考えた。元治の大火の被災範囲は当時発行されたかわら版などに記録が残っている。被災範囲の南限については、史料によって御土居藪際までと七条通以南のものとがあり、被災範囲にばらつきがある場所であったが、今回の調査と既往調査５－②の成果から、御土居藪を越えて六条村まで焼けていたことが明らかとなった。調査地周辺では他に被災の痕跡が確認できないことから、御土居の開口部から火が六条村の建物へと移ってきた可能性が考えられる。御土居の内側の調査では、元治の大火によって焼けた瓦が多量に出土するが、今回の調査では地業55と98の周辺のみ少量の出土にとどまった。六条村の建物の多くが瓦葺ではなかったことがわかる。

註

１）『京都惣曲輪御土居絵図』では人の通行路を赤色線で表現している。

２）中村武生「第３部 第３章 御土居藪と角倉与一」『角倉一族とその時代』 思文閣出版　2015年

３）「改正京都区分一覧之図」『慶長昭和京都地図集成1611（慶長16）～1940（昭和15）』 柏書房　1994年

４）「新撰京都古今全図」『慶長昭和京都地図集成1611（慶長16）～1940（昭和15）』 柏書房　1994年

５）「大典記念京都市市街地図」『慶長昭和京都地図集成1611（慶長16）～1940（昭和15）』柏書房　1994年

６）『新修 京都叢書　第７巻　拾遺都名所図会』 臨川書店　1967年

主要参考文献

石田孝喜「京都　高瀬川―角倉了以・素庵の遺産－」思文閣出版　2005年

『京都の部落史４』 京都部落史研究所　1986年

『京都の部落史５』 京都部落史研究所　1988年

「京都柳原町史」『日本庶民生活史料集成　第14巻』 三一書房　1971年

塚本章宏ほか「近世京都における大火被災地域の時空間的復元」『歴史都市防災論集 Vol.6』 立命館大学 歴史都市防災研究所　2012年

長尾泰源ほか「火災図を用いた「元治の京都大火」被災範囲の復原」『歴史都市防災論集 Vol.6』 立命館大学 歴史都市防災研究所　2012年

中村武生『御土居堀ものがたり』 京都新聞出版センター　2005年

山本尚友「六条村小史」『柳原銀行とその時代』 崇仁地区の文化遺産を守る会　1991年

『我ら、山水河原者の末裔なり～芸大移転に寄せて～』柳原銀行記念資料館20周年記念特別展図録 2017年

『2010年度 部落史連続講座 講演録』 京都部落問題研究資料センター　2011年

付表１　土器類観察表

番号	器種	器形	遺　構	法量(cm)			残存率(%)	胎土色調	釉色調など	生産地	備　考
				口径	器高	底径					
1	土師器	皿S	耕作土	9.0	1.6	－	40	橙色	－	京都	口縁に油煙付着
2	土師器	皿S	耕作土	10.1	1.7	－	40	にぶい黄橙色	－	京都	口縁に油煙付着
3	土師器	皿S	耕作土	10.4	1.7	－	25	灰白色	－	京都	
4	施釉陶器	水差し	耕作土	1.9	4.4	4.0	90	灰白色	鉄釉		
5	色絵磁器	水差し	耕作土	0.6	5.9	一辺6.9	50	灰白色	透明、呉須、赤・緑・紫色		型押し成形
6	施釉陶器	鬢水入れ	耕作土	長さ11.8	3.9	幅4.2	60	浅黄橙	黄釉、緑色	京都	型押し成形
7	染付磁器	鉢	耕作土	5.2	2.5	3.0	40	灰白色	透明、呉須		口縁部・高台部は釉剥ぎ
8	上絵磁器	椀	耕作土	5.4	(3.5)	－	40	白色	透明、鉄釉		内面に上絵目盛線「二食匕」「一食」
9	施釉陶器	蓋	耕作土	7.8	1.7	－	100	浅黄色	灰白色、呉須	京・信楽系	
10	青磁染付	蓋	耕作土	8.7	2.8	ツマミ3.2	80	灰白色	白・青緑色、呉須	肥前	ツマミ内に角福
11	染付磁器	蓋	耕作土	10.2	3.0	ツマミ3.9	60	白色	透明、呉須		
12	施釉陶器	椀	耕作土	10.6	5.6	4.6	40	灰黄褐色	緑灰色、鉄釉	京都	内面底部に目跡、外面に鉄絵
13	施釉陶器	椀	耕作土	10.7	6.1	4.8	30	灰白色	灰白色	京都	外面体部に細かい杉根、高台内に「〇倉山」刻印
14	染付磁器	椀	耕作土	6.5	5.4	3.3	60	白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花
15	染付磁器	椀	耕作土	9.5	5.4	3.7	80	灰白色	透明、呉須	肥前	外面体部にコンニャク印判の菊と手描き草文
16	染付磁器	椀	耕作土	9.4	5.7	3.9	60	灰白色	透明、呉須	肥前	
17	染付磁器	鉢	耕作土	15.6	8.3	6.3	30	白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花、外面体部にコンニャク印判と手描き文
18	青磁染付	皿	耕作土	18.7	4.4	9.0	50	灰白色	青緑色、透明、呉須	肥前	内面底部に蛇の目釉剥ぎとコンニャク印判の五弁花
19	土師質土器	壷	耕作土	10.8	6.7	12.8	25	にぶい橙	－		内面底部に煤が付着
20	焼締陶器	擂鉢	耕作土	34.9	13.5	15.7	50	赤褐色	－	堺・明石系	
21	土師器	皿S	土坑85	9.6	1.7	－	40	にぶい橙色	－	京都	
22	磁器	椀	土坑85	10.0	5.4	3.7	75	白色	透明、鉄釉		口縁端部に鉄紅
23	施釉陶器	椀	土坑85	9.8	5.6	3.8	50	灰褐色	暗灰黄色	唐津	
24	焼締陶器	擂鉢	石積み95	35.0	(11.3)	－	20	明赤褐色	－	堺・明石系	
25	土師器	皿S	土坑46	9.9	1.5	－	90	橙色	－	京都	口縁と内面に油煙付着
26	施釉陶器	灯明皿	土坑46	7.6	1.5	3.4	100	灰白色	灰黄色	京・信楽系	内面底部に油煙付着
27	施釉陶器	灯明皿	土坑46	11.3	2.3	4.9	100	灰白色	灰白色	京・信楽系	内面底部に目跡研磨、外面体部に油煙付着
28	施釉陶器	皿	土坑46	9.2	2.4	3.8	100	灰白色	緑色	瀬戸・美濃	型打ち成形
29	施釉陶器	皿	土坑46	9.4	2.9	5.0	40	灰白色	灰黄色	京都	
30	施釉陶器	鍋	土坑46	8.9	4.6	3.8	90	浅黄橙色	にぶい赤褐色	京・信楽系	底部に煤付着
31	施釉陶器	鍋	土坑46	14.6	(6.1)	－	60	褐灰色	暗赤褐色	京・信楽系	
32	染付磁器	仏飯器	土坑46	6.1	4.2	6.2	80	灰白色	透明、呉須	肥前	
33	色絵磁器	蓋	土坑46	4.2	2.0	－	50	灰白色	透明、呉須、赤色	肥前	赤絵は上絵付
34	染付磁器	蓋	土坑46	9.8	2.6	ツマミ3.4	80	灰白色	透明、呉須	肥前	

（ ）は残存値

番号	器種	器形	遺　構	法量(cm)			残存率(%)	胎土色調	釉色調など	生産地	備　考
				口径	器高	底径					
35	染付磁器	蓋	土坑46	10.4	2.3	ツマミ5.2	60	灰白色	透明、呉須	肥前	
36	施釉陶器	壷か	土坑46	−	(2.2)	4.6	20	浅黄橙色	鉄釉	信楽	底部に「元」刻印
37	施釉陶器	椀	土坑46	6.6	3.9	2.4	40	灰白色	灰黄色	京都	
38	施釉陶器	椀	土坑46	9.1	5.6	3.0	60	浅黄色	灰黄色	京都	
39	施釉陶器	椀	土坑46	10.2	6.1	3.9	40	灰白色	灰白色	京都	杉に根は描かれない
40	染付磁器	椀	土坑46	7.8	6.3	3.4	60	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印
41	染付磁器	椀	土坑46	8.2	6.1	4.2	40	灰白色	透明、呉須	肥前	高台内に角福
42	染付磁器	椀	土坑46	8.2	6.6	4.6	40	灰白色	透明、呉須	肥前	
43	青磁染付	椀	土坑46	8.7	6.1	4.2	40	灰白色	青緑色、透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判
44	染付磁器	椀	土坑46	8.3	4.1	3.1	30	灰白色	透明、呉須	肥前	
45	染付磁器	椀	土坑46	8.3	4.6	3.1	70	灰白色	透明、呉須	肥前	
46	染付磁器	椀	土坑46	−	(2.5)	6.0	20	灰白色	透明、呉須	肥前	高台内に吉祥句
47	染付磁器	椀	土坑46	9.8	5.1	3.8	50	灰白色	透明、呉須	肥前	
48	染付磁器	椀	土坑46	10.3	4.8	4.2	50	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部は釉剥ぎ
49	染付磁器	椀	土坑46	11.4	5.9	5.0	50	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花、高台内に角福
50	染付磁器	椀	土坑46	11.7	6.2	4.6	70	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花、高台内に角福
51	染付磁器	椀	土坑46	11.8	6.7	4.9	60	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花、高台内に角福
52	青磁染付	鉢	土坑46	14.4	5.6	8.0	40	灰白色	青緑色、透明、呉須	肥前	
53	青磁染付	鉢	土坑46	−	(3.3)	8.7	50	灰白色	青緑色、透明、呉須	肥前	高台内に角福
54	染付磁器	皿	土坑46	7.6	1.7	4.0	50	灰白色	透明、呉須	肥前	
55	染付磁器	皿	土坑46	14.4	4.3	8.5	50	灰白色	透明、呉須	肥前	
56	染付磁器	皿	土坑46	13.6	3.9	8.2	40	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花、高台内に角福
57	染付磁器	皿	土坑46	13.9	3.6	7.5	40	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花、高台内に角福
58	染付磁器	皿	土坑46	14.0	3.4	7.1	50	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花と蛇の目釉剥ぎ
59	青磁染付	皿	土坑46	18.6	4.3	8.6	60	灰白色	青緑色、透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花と蛇の目釉剥ぎ
60	土師器	皿S	整地土	9.8	1.5	−	20	灰白色	−	京都	
61	施釉陶器	灯明皿	整地土	6.7	1.5	3.0	80	灰白色	灰白色	京・信楽系	
62	施釉陶器	灯明皿	整地土	7.0	1.7	3.2	100	灰黄色	灰白色	京・信楽系	
63	施釉陶器	灯明皿	整地土	10.0	2.2	4.2	40	灰黄色	灰白色	京・信楽系	
64	施釉陶器	タンコロ	整地土	5.3	2.3	3.8	100	灰黄色	鉄釉	京・信楽系	
65	施釉陶器	タンコロ	整地土	3.9	4.0	2.9	80	黄灰	鉄釉	京・信楽系	台付
66	施釉陶器	タンコロ	整地土	6.3	5.4	4.8	80	灰黄色	鉄釉	京・信楽系	台付
67	施釉陶器	蓋	整地土	3.6	1.1	−	100	浅黄橙	鉄釉	京・信楽系	
68	施釉陶器	蓋	整地土	6.7	1.5	3.4	100	灰白色	鉄釉	京・信楽系	
69	施釉陶器	蓋	整地土	8.2	1.1	−	100	灰白色	明黄色	兵庫珉平窯	

( ) は残存値

番号	器種	器形	遺 構	法量(cm)			残存率(%)	胎土色調	釉色調など	生産地	備 考
				口径	器高	底径					
70	施釉陶器	蓋	整地土	11.0	2.8	ツマミ 4.0	60	灰白色	白色、鉄釉	瀬戸・美濃	
71	染付磁器	蓋	整地土	8.4	2.6	ツマミ 3.5	100	白色	透明、呉須		
72	染付磁器	蓋	整地土	8.8	2.9	ツマミ 3.8	60	灰白色	透明、呉須		高台内に角福
73	色絵磁器	蓋	整地土	8.6	2.4	ツマミ 3.2	100	白色	透明、赤・緑・黄・紫色	瀬戸・美濃	上絵、焼継と字
74	青磁染付	蓋	整地土	9.8	2.8	ツマミ 3.9	90	灰白色	青緑色、透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印
75	染付磁器	蓋	整地土	12.3	3.3	ツマミ 6.5	80	白色	透明、呉須		高台内に角福
76	施釉陶器	椀	整地土	-	(3.3)	3.8	底部 100	にぶい黄橙	灰白色	京都	高台内に「岩倉山」刻印
77	施釉陶器	椀	整地土	7.6	5.8	4.4	90	灰白色	灰白色、鉄釉	京都	
78	施釉陶器	椀	整地土	10.6	6.4	4.4	90	灰白色	灰白色	京都	杉に根は描かれない
79	染付磁器	椀	整地土	6.9	5.4	3.7	75	灰白色	白色、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花
80	染付磁器	椀	整地土	6.9	5.7	3.8	90	灰白色	白色、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花
81	染付磁器	椀	整地土	8.5	4.0	2.8	50	白色	透明、呉須		口縁端部に鉄紅
82	染付磁器	椀	整地土	8.5	4.4	2.8	40	白色	透明、呉須		口縁端部に鉄紅
83	染付磁器	椀	整地土	6.6	3.6	2.8	30	白色	透明、呉須		高台内に「○○精製」
84	染付磁器	椀	整地土	8.8	5.9	3.8	60	灰白色	透明、呉須	肥前	
85	染付磁器	椀	整地土	9.8	5.2	4.0	40	灰白色	透明、呉須	肥前	外面体部にコンニャク印判の松
86	染付磁器	椀	整地土	10.4	5.4	4.0	30	灰白色	透明、呉須		内面底部に蛇の目釉剥
87	染付磁器	椀	整地土	10.8	6.3	4.2	30	灰白色	透明、呉須		内面に墨弾き
88	染付磁器	椀	整地土	11.2	5.7	6.0	30	灰白色	透明、呉須、赤・緑色	肥前	上絵付
89	染付磁器	椀	整地土	11.4	6.5	5.8	30	灰白色	透明、呉須	肥前	
90	青磁染付	椀	整地土	11.7	6.6	4.6	50	灰白色	青緑色、透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花
91	施釉陶器	皿	整地土	-	(2.4)	5.0	60	にぶい黄橙	鉄釉	京都か	高台内に「乾山」銘
92	施釉陶器	皿	整地土	10.2	2.6	5.4	25	灰黄褐色	灰白色、鉄釉	京都か	高台内に「道八」銘
93	染付磁器	皿	整地土	8.8	2.6	4.1	60	灰白色	透明、呉須	肥前	型打ち成形
94	色絵磁器	皿	整地土	9.2	2.3	5.2	60	白色	透明、白・赤・青・淡黄色		型打ち成形、内面底部に壽文の陰刻、後に色絵付
95	白磁	皿	整地土	9.5	2.0	5.0	80	白色	透明		型打ち成形、内面底部に壽文の陰刻
96	染付磁器	皿	整地土	9.2	2.5	4.4	50	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花
97	染付磁器	皿	整地土	9.8	2.8	4.8	90	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花
98	染付磁器	皿	整地土	13.6	3.1	7.4	40	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花と蛇の目釉剥
99	染付磁器	皿	整地土	14.2	3.6	8.2	40	灰白色	透明、呉須	肥前	
100	染付磁器	皿	整地土	13.0	3.2	8.6	35	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花、口縁端部に鉄紅
101	染付磁器	皿	整地土	15.4	2.6	7.1	40	灰白色	透明、呉須	肥前	
102	染付磁器	皿	整地土	15.2	3.7	9.8	40	灰白色	透明、呉須	肥前	
103	染付磁器	皿	整地土	20.3	2.9	12.3	50	灰白色	透明、呉須	肥前	

( ) は残存値

番号	器種	器形	遺　構	法量(cm)			残存率(%)	胎土色調	釉色調など	生産地	備　考
				口径	器高	底径					
104	施釉陶器	瓶	整地土	1.4	8.8	3.0	100	浅黄橙	灰青緑色	京・信楽系	
105	色絵磁器	鉢	整地土	14.2	5.6	8.0	30	灰白色	透明、赤・青・緑・黄・白色		上絵付
106	焼締陶器	擂鉢	整地土	16.0	6.1	7.0	20	明赤褐色	−	堺・明石系	
107	施釉陶器	蓋	整地土	18.2	6.0	ツマミ3.9	30	にぶい赤褐色	黒褐色	京・信楽系	白イッチン
108	染付磁器	蓋	水路88	10.2	2.9	ツマミ3.1	50	白色	透明、呉須	肥前	口縁部に鉄紅
109	染付磁器	皿	水路88	13.7	3.8	8.5	50	白色	透明、呉須	肥前	
110	染付磁器	皿	水路88	13.8	3.7	9.0	40	白色	透明、呉須	肥前	
111	施釉陶器	灯明皿	水路88	11.0	2.6	4.3	100	にぶい橙色	灰白色	京・信楽系	
112	青磁染付	椀	水路88	9.9	5.5	3.7	100	灰白色	青緑色、透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花
113	染付磁器	椀	水路88	6.5	5.3	3.6	40	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花
114	施釉陶器	鉢	水路88	7.9	4.1	6.2	80	灰白色	灰白色	京・信楽系	口縁部に煤が付着
115	染付磁器	鉢	水路88	13.2	4.7	8.0	30	白色	透明、呉須	瀬戸・美濃	底部外側釉剥ぎ
116	施釉陶器	徳利か	水路88	−	(3.5)	4.6	30	灰白色	明オリーブ色	京・信楽系	底部に墨書「一本二文」
117	施釉陶器	汁注ぎ	水路88	7.2	10.1	4.6	50	灰黄色	鉄釉	京・信楽系	底部に墨書「□」
118	焼締陶器	擂鉢	水路88	36.8	(9.0)	−	40	赤色	−	堺・明石系	
119	土師器	皿S	水路100	10.2	1.8	−	30	浅黄橙色	−	京都	口縁部に煤付着
120	染付磁器	瓶	水路100	2.2	10.6	3.8	90	灰白色	灰白色、呉須		
121	染付磁器	椀	水路100	8.8	5.0	3.4	50	灰白色	透明、呉須		
122	施釉陶器	椀	水路100	10.8	5.8	4.4	70	灰白色	灰白色	京・信楽系	目跡など重ね焼き痕跡
123	染付磁器	皿	水路100	18.8	4.1	9.3	25	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部に蛇の目釉剥
124	施釉陶器	蓋	水路81	8.0	2.9	ツマミ2.6	40	浅黄色	灰オリーブ色	京・信楽系	白イッチン
125	染付磁器	椀	水路81	9.4	5.0	4.1	50	灰白色	透明、呉須		
126	染付磁器	椀	水路81	9.2	4.8	3.3	40	白色	透明、呉須		
127	染付磁器	鉢	水路81	14.7	4.7	8.4	40	白色	透明、呉須	肥前	口縁部に鉄紅
128	染付磁器	皿	護岸14裏込	13.8	3.1	7.4	40	灰白色	透明、呉須	肥前	内面底部にコンニャク印判の五弁花と蛇の目釉剥
129	施釉陶器・焼締陶器	甕・擂鉢	土坑61	−	48	25	60	浅黄橙色・赤褐色	−	信楽、堺・明石系	鉄泥掛け信楽甕の中に堺・明石系の擂鉢を設置
130	土師器	皿S	溝1	9.6	1.4	−	40	橙色	−	京都	
131	施釉陶器	灯明皿	溝1	10.7	2.0	4.4	100	灰黄色	灰黄色	京・信楽系	
132	染付磁器	皿	溝1	8.9	2.6	4.9	80	白色	薄明緑灰色		型打ち成形、口縁端部に鉄紅
133	施釉陶器	栓	溝1	4.0	(2.7)	−	80	灰白色	灰黄色		上面に16葉菊花文
134	染付磁器	蓋	溝1	4.5	1.4	ツマミ1.2	100	灰白色	透明、呉須		
135	色絵磁器	蓋	溝1	7.8	2.7	ツマミ2.4	60	白色	朱・緑・黄色		上絵付
136	染付磁器	蓋	溝1	9.2	3.0	ツマミ3.1	90	白色	透明、呉須		
137	染付磁器	蓋	溝1	10.6	2.5	ツマミ5.1	90	白色	透明、呉須		ツマミ内に角福
138	染付磁器	椀	溝1	7.2	5.9	3.7	40	白色	透明、呉須		

( ) は残存値

番号	器種	器形	遺　構	法量(cm)			残存率(%)	胎土色調	釉色調など	生産地	備　考
				口径	器高	底径					
139	染付磁器	椀	溝1	7.2	6.2	3.4	40	灰白色	透明、呉須		
140	染付磁器	椀	溝1	10.5	5.6	4.1	50	灰白色	透明、呉須	肥前	
141	染付磁器	鉢	溝1	12.6	6.1	5.4	40	白色	透明、呉須		
142	染付磁器	鉢	溝1	15.0	4.6	9.5	40	灰白色	透明、呉須	肥前	高台内に角福
143	施釉陶器	汁注ぎ	溝1	－	(6.6)	5.5	60	灰白色	浅黄色	京都	高台内に墨書「教」
144	染付磁器	蓋	石列73裏込	8.7	2.1	ツマミ2.3	80	灰白色	透明、呉須	肥前	転写唐子絵、ツマミ内に「廣明舎製」
145	染付磁器	蓋	石列73裏込	－	(2.0)	ツマミ4.0	80	白色	透明、呉須	瀬戸	転写、ツマミ内に「陶精園製」
146	施釉陶器	蓋	石列73裏込	6.4	2.9	－	100	褐灰色	深緑色		白イッチン
147	施釉陶器	蓋	石列73裏込	8.2	4.0	ツマミ2.3	100	灰白色	透明、呉須		緑イッチン
148	染付磁器	杯	石列73裏込	6.9	2.9	2.7	60	灰白色	透明、呉須		精密絵、内面底部麒麟、外面鳳凰ほか、高台内に「原平精製」
149	染付磁器	椀	石列73裏込	6.6	6.3	4.2	100	灰白色	透明、濃呉須		型紙摺り
150	染付磁器	椀	石列73裏込	6.4	7.3	3.7	60	灰白色	透明、呉須	瀬戸・美濃	転写、外面アヤメ釉下彩、色ずれ、高台内に「菊製」
151	染付磁器	椀	石列73裏込	7.9	7.4	6.1	80	灰白色	透明、呉須		型紙摺り
152	染付磁器	鉢	石列73裏込	18.2	7.8	9.3	70	灰白色	透明、濃呉須		型紙摺り
153	色絵磁器	蓋	石列74裏込	7.3	2.4	－	100	灰白色	透明、朱・緑・濃青色	肥前	上絵付
154	色絵磁器	仏飯器	石列74裏込	5.8	5.0	4.2	70	灰白色	透明、赤・青・緑色	肥前	上絵付
155	青磁	香炉	石列74裏込	5.1	4.5	5.0	100	灰白色	薄明緑色	肥前	体部は板作り、底部は型押し成形
156	磁器	椀	石列74裏込	(9.8)	5.0	4.2	100	白色	透明、呉須、鉄釉	京都	外面体部に「五徳庵」、高台内に「平安茉山」、割高台
157	染付磁器	椀	石列74裏込	6.4	7.6	3.9	80	灰白色	透明、呉須	肥前	
158	施釉陶器	壷	石列74裏込	18.8	23.1	12.7	60	灰白色	鉄釉	京・信楽系	黒釉流し
159	施釉陶器	鉢	石列75下層	6.5	3.6	4.7	90	褐灰色	透明		口縁端部は釉剥
160	施釉陶器	小型の壷	石列75下層	4.4	4.3	3.6	90	灰黄褐色	暗灰黄色		体部外面に釉下イッチン書き文字、底部に糸切痕
161	施釉陶器	仏花瓶	石列75下層	1.8	7.6	2.9	100	灰白色	灰緑色	京都	
162	施釉陶器	仏花瓶	石列75下層	2.0	10.4	3.3	100	灰白色	灰緑色	京都	
163	染付磁器	蓋	石列75下層	8.7	1.9	－	100	白色	透明、呉須、緑色		型紙摺り
164	施釉陶器	蓋	石列75下層	8.4	2.0	－	100	赤褐色	透明、白泥	京・信楽系	
165	色絵染付	椀	石列75下層	5.7	6.0	3.7	100	白色	透明、呉須	京都	高台内に「大日本翁山造」
166	染付磁器	椀	石列75下層	7.0	7.1	4.3	100	白色	透明、呉須		高台内に「〇寿精製」
167	色絵染付	椀	石列75下層	7.2	8.3	4.6	33	白色	透明、青・緑・紫色	瀬戸・美濃	転写、高台内に「屋業三製」
168	染付磁器	椀	石列75下層	6.1	4.4	2.3	60	灰白色	透明、呉須、鉄釉	京都	高台内に「山兵造」
169	染付磁器	椀	石列75下層	5.9	4.2	2.5	90	灰白色	透明、呉須		高台内に「大明成化年製」
170	染付磁器	椀	石列75下層	9.4	5.0	3.5	100	灰白色	透明、呉須	肥前	
171	染付磁器	椀	石列75下層	－	(4.6)	3.7	60	灰白色	透明、呉須	瀬戸・美濃	外面転写龍、高台内に「勘王園製」
172	染付磁器	椀	石列75下層	－	(3.8)	5.0	40	灰白色	透明、呉須	瀬戸・美濃	転写風景絵、高台内に「中淺井製」

（ ）は残存値

番号	器種	器形	遺 構	法量(cm)			残存率(%)	胎土色調	釉色調など	生産地	備 考
				口径	器高	底径					
173	染付磁器	椀	石列75下層	9.6	5.2	3.2	70	灰色	透明、呉須		型紙摺り
174	染付磁器	椀	石列75下層	11.3	6.0	4.8	80	灰白色	透明、呉須		型紙摺り
175	青磁	鉢	石列75下層	14.0	5.0	8.0	80	白色	薄緑色	瀬戸・美濃	型押し成形
176	色絵磁器	皿	石列75下層	14.8	4.0	7.6	60	灰白色	透明、赤・緑・黄・青・紫色	肥前	
177	施釉陶器	小型の壷	溝96	4.1	3.9	3.3	50	灰白色	明オリーブ灰色	京都	口縁部無釉、外面に「京都木田」
178	磁器	合子身	溝96	5.6	2.4	3.5	100	白色	透明		高台内に「鹿印煉歯磨…」
179	施釉陶器	土瓶	溝96	7.7	(6.6)	−	60	灰白色	浅黄色	京都	汽車土瓶、「ひめじ　姫路」
180	磁器	椀	溝96	11.2	4.8	3.5	50	灰白色	薄明緑灰・暗オリーブ褐色		高台内に刻印
181	焼締陶器	瓶	溝96	−	(7.3)	6.0	33	灰赤・明赤褐	暗赤褐色	備前	布袋徳利、外底部に刻印
182	染付磁器	椀	溝96	−	(7.8)	4.2	50	灰白色	灰白色、呉須	瀬戸・美濃	内外面は網目文、高台内に文字
183	施釉陶器	壷	溝96	−	(13.6)	3.9	90	灰色	透明、薄青・朱・黒色	京都	上絵付、底部穿孔あり
184	磁器	瓶	溝96	−	(20.9)	7.6	90	白色	灰白色	京都	呉須「山陰名産　八木菜酒秋田醸造」
185	染付磁器	椀	室7	5.4	2.9	2.7	50	灰白色	灰白色、呉須		転写、シノワズリー、高台内面:「MADE IN JAPAN」

( ) は残存値

付表２　瓦類観察表

番号	種 類	遺 構	法量(cm)			残存率(%)	胎土色調	焼成・胎土	備 考
			長さ	幅	厚さ				
瓦1	軒平瓦	井戸8掘形	(3.5)	(10.1)	(4.2)	10	灰黄色	良好・密	
瓦2	軒平瓦	井戸8掘形	(6.5)	(11.4)	(4.6)	10	灰色	良好・密	
瓦3	軒平瓦	整地土	(10.9)	(14.2)	5.0	20	暗灰色	良好・密	
瓦4	軒平瓦	整地土	(2.3)	(11.0)	4.2	10	灰白色	良好・密	
瓦5	軒平瓦	整地土	(9.2)	(18.0)	4.3	40	灰色	良好・密	
瓦6	軒平瓦	井戸8掘形	(2.3)	(11.1)	4.2	40	灰白色	良好・密	
瓦7	軒桟瓦	炉6構築土	(13.0)	(23.3)	4.1	40	暗灰色	良好・密	
瓦8	軒桟瓦	耕作土	(6.9)	(17.1)	4.5	40	灰色	良好・密	
瓦9	軒桟瓦	整地土	(4.8)	(15.0)	−	40	暗灰色	良好・密	
瓦10	棟丸瓦	護岸14裏込	−	(2.8)	−	50	灰白色	良好・緻密	
瓦11	道具瓦	耕作土	(10.0)	(23.2)	4.5	40	灰色	良好・密	
瓦12	丸瓦	炉6	24.9	13.2	1.7	100	暗灰色	良好・緻密	「御用 瓦師 五良兵衛」刻印

( ) は残存値

付表３　土製品観察表

番号	種　類	遺　構	法量(cm)			残存率(%)	胎土色調	手法・形態	生産地	備　考
			縦	横	厚さ・高さ					
土1	泥面子	炉6	3.0	2.9	0.8	100	橙色	型・中実		文字「い」
土2	泥面子	整地土	(3.0)	3.0	0.8	90	淡橙色	型・中実		文字「や」
土3	泥面子	重機掘削中	2.9	3.0	0.8	90	にぶい橙色	型・中実		文字「セ」
土4	泥面子	整地土	(2.7)	(2.7)	0.7	100	橙色	型・中実		丸の内に二つ引
土5	泥面子	遺構検出中	3.1	3.1	0.85	100	にぶい橙色	型・中実		文字「チ」
土6	泥面子	重機掘削中	3.1	3.0	0.8	100	にぶい黄橙色	型・中実		
土7	泥面子	整地土	3.0	2.8	0.7	90	橙色	型・中実		文字「小」
土8	泥面子	整地土	3.0	3.0	0.7	100	橙色	型・中実		桐角字
土9	泥面子	遺構検出中	3.0	2.9	0.8	100	にぶい橙色	型・中実		文字「稲」
土10	泥面子	炉6	3.0	2.9	1.0	90	橙色	型・中実		文字「稲」
土11	泥面子	整地土	3.1	2.9	0.9	100	橙色	型・中実		文字「寅」
土12	泥面子	整地土	3.1	3.1	1.0	100	にぶい橙色	型・中実		文字「己」
土13	泥面子	土坑85	(2.8)	3.0	0.9	80	にぶい橙色	型・中実		文字「雲」
土14	泥面子	遺構検出中	2.9	(2.7)	0.8	90	浅黄橙色	型・中実		文字「達」
土15	泥面子	炉6	3.0	3.1	1.0	100	橙色	型・中実		渦に碇
土16	泥面子	整地土	2.6	2.5	0.8	100	にぶい橙色	型・中実		渦に碇
土17	泥面子	遺構検出中	3.0	3.0	0.8	100	橙色	型・中実		小槌
土18	泥面子	耕作土	3.0	3.0	0.9	100	橙色	型・中実		小判
土19	泥面子	耕作土	3.1	(2.8)	0.9	100	橙色	型・中実		子持ち分銅
土20	泥面子	水路88	3.2	3.2	0.7	100	にぶい橙色	型・中実		分銅
土21	泥面子	水路88	3.1	(3.0)	0.7	100	にぶい橙色	型・中実		分銅
土22	泥面子	水路81	3.1	3.1	0.8	100	橙色	型・中実		網籠か
土23	泥面子	水路81	3.1	3.0	0.7	100	橙色	型・中実		鍵
土24	泥面子	整地土	3.0	3.0	0.8	90	にぶい橙色	型・中実		檜扇
土25	泥面子	耕作土	2.8	2.8	0.9	80	橙色	型・中実		八つ矢車
土26	泥面子	土坑85	2.8	2.8	0.9	100	浅黄橙色	型・中実		源氏車
土27	泥面子	土坑46	3.1	3.0	0.8	100	にぶい橙色	型・中実		筒守
土28	泥面子	整地土	3.4	3.4	1.0	100	橙色	型・中実		人面または猿か
土29	泥面子	炉6	3.2	3.2	1.0	90	浅黄橙色	型・中実		天狗
土30	泥面子	土坑46	(3.2)	3.1	0.8	90	にぶい黄橙色	型・中実		鶏
土31	泥面子	土坑46	3.1	3.2	0.8	100	にぶい橙色	型・中実		餅つき兎
土32	泥面子	整地土	3.0	2.9	0.8	100	にぶい橙色	型・中実		三つ盛片喰
土33	泥面子	遺構検出中	2.7	2.7	1.2	90	明赤褐色	型・中実		持ち合い吉文字亀甲、縁が六角形
土34	泥面子	整地土	3.1	3.1	0.9	100	橙色	型・中実		三つ銀杏
土35	泥面子	炉6	2.8	2.8	0.8	100	明赤褐色	型・中実		桔梗
土36	泥面子	水路81	3.0	2.9	1.0	100	橙色	型・中実		轡
土37	泥面子	整地土	2.9	2.8	1.0	100	橙色	型・中実		荒枝付き右三階松
土38	泥面子	整地土	3.1	3.1	1.0	100	にぶい橙色	型・中実		覗き菊

（ ）は残存値

番号	種　類	遺　構	法量(cm)			残存率(%)	胎土色調	手法・形態	生産地	備　考
			縦	横	厚さ・高さ					
土39	泥面子	整地土	3.0	3.0	0.9	100	にぶい赤褐色	型・中実		五三桐
土40	泥面子	耕作土	3.4	3.2	1.1	100	浅黄橙色	型・中実		鶴丸
土41	泥面子	遺構検出中	2.2	2.2	0.8	100	浅黄橙色	型・中実		丁子
土42	泥面子	炉6	2.4	2.4	0.7	100	橙色	型・中実		
土43	泥面子	炉6	2.2	2.1	0.6	100	にぶい黄橙色	型・中実		三巴
土44	泥面子	炉6	2.2	2.2	0.7	100	にぶい黄橙色	型・中実		捻り梅か
土45	泥面子	溝1	2.4	2.4	0.7	100	橙色	型・中実		三つ大
土46	泥面子	水路81	2.5	2.5	0.7	100	にぶい橙色	型・中実		束ね熨斗
土47	泥面子	整地土	2.8	(2.5)	1.0	100	にぶい橙色	型・中実		人面
土48	泥面子	水路88	3.2	(2.9)	1.4	100	にぶい橙色	型・中実		人面
土49	泥面子	整地土	3.1	(3.1)	1.3	100	橙色	型・中実		人面
土50	泥面子	遺構検出中	(3.5)	(3.5)	1.7	100	橙色	型・中実		人面
土51	泥面子	写真清掃中	4.2	4.3	1.1	100	にぶい橙色	型・中実		文字「達」
土52	泥面子	遺構検出中	4.4	4.3	1.1	100	橙色	型・中実		源氏車
土53	泥面子	水路81	4.4	(4.2)	1.3	90	橙色	型・中実		五七桐
土54	泥面子	重機掘削中	(5.5)	(5.6)	1.1	70	にぶい橙色	型・中実		剣片喰
土55	泥面子	整地土	5.8	5.7	1.0	100	浅黄橙色	型・中実		文字「エ」
土56	泥面子	整地土	6.2	6.0	1.2	100	にぶい橙色	型・中実		九枚笹
土57	泥面子型	炉6	3.6	3.8	1.8	100	浅黄色	型		
土58	泥面子型	整地土	4.0	4.7	0.9	100	灰白	型・中実		竹林に虎
土59	泥面子型	暗渠94掘形	5.3	5.2	1.4	100	にぶい黄橙色	型・中実		三つ枇杷の葉か
土60	ミニチュア製品蓋	炉6	口径1.8	ツマミ径0.9	1.3	100	胎土)灰黄褐色 釉)灰白色	型・中実		
土61	ミニチュア製品蓋	整地土	口径1.8	ツマミ径0.8	1.5	100	胎土)灰黄褐色 釉)灰白色	型・中実		
土62	ミニチュア製品蓋	土坑46	口径2.0	－	1.5	100	胎土)灰白色 釉)灰白色	型と貼付		菊花状、上部施釉
土63	ミニチュア製品色絵磁器蓋	炉6	口径3.5	－	0.8	100	胎土)灰白色 釉)透明・赤色	型・中実		上絵付
土64	ミニチュア製品椀	土坑46	口径2.3	底径0.6	1.3	60	胎土)灰白色 釉)透明	型・中実		高台に離れ砂付着
土65	ミニチュア製品椀	炉6	口径2.1	底径1.0	1.3	100	胎土)淡黄色 釉)暗赤色	型		外面体部に陽刻文様
土66	ミニチュア製品椀	石列75下層	口径3.2	底径1.6	2.1	100	胎土)赤褐色 釉)黄色	型・中実		
土67	ミニチュア製品赤絵磁器椀	土坑46	口径4.6	底径3.0	2.0	50	灰白色	ロクロ	肥前	
土68	ミニチュア製品土師皿	炉6	口径3.2	－	0.9	100	にぶい黄橙色	型・中実		
土69	ミニチュア製品土師皿	土坑46	口径3.6	－	0.9	95	灰白色	手捏ね		内外面に爪圧痕
土70	ミニチュア製品磁器皿	水路88	口径3.5	底径1.3	1.6	100	胎土)灰白色 釉)白色	型・中実		紅皿
土71	ツボツボ	水路88	口径2.3	－	2.3	100	淡黄色	手捏ね		
土72	ツボツボ	土坑46	口径2.3	－	2.2	100	灰白色	手捏ね		
土73	ツボツボ	護岸14	口径2.7	－	2.3	100	灰白色	型		内部削り出し
土74	灯火具　タンコロ	炉6	口径3.3	底径1.8	1.5	100	にぶい黄橙色	型		

（ ）は残存値

番号	種　類	遺　構	法量(cm)			残存率(%)	胎土色調	手法・形態	生産地	備　考
			縦	横	厚さ・高さ					
土75	灯火具　タンコロ	土坑46	口径 4.7	底径 3.3	2.0	100	浅黄橙	型		灯芯挿入孔に煤付着
土76	鳩笛	土坑46	長さ 7.2	幅 2.7	4.3	100	胎土)灰白色 釉)明緑灰色	型・中空		背と尾先に吹き出し孔
土77	ミニチュア製品 釜蓋	炉6内部	3.8	3.6	1.2	100	橙色	型・中実		
土78	ミニチュア製品 釜蓋	土坑85	3.8	3.7	1.2	100	にぶい黄橙色	型・中実		
土79	ミニチュア製品 釜蓋	護岸14	5.0	5.0	1.6	100	にぶい橙色	型・中実		表面にキラコ付着
土80	ミニチュア製品 羽釜	土坑46	口径 2.2	底径 1.6	2.2	100	胎土)灰白色 釉)明緑灰色	型		内外面に施釉、 外面に陽刻文様
土81	ミニチュア製品 羽釜	土坑46	口径 2.3	底径 1.6	2.2	100	胎土)灰白色 釉)明緑灰色	型		内外面に施釉、 外面に陽刻文様
土82	ミニチュア製品 羽釜	炉6	口径 3.9	－	3.7	100	浅黄色	型		
土83	土鈴	護岸14	最大径 5.1	－	4.2	100	にぶい黄橙色	手捏ね・中空		
土84	焼塩壷	水路81	口径 4.0	底部 2.8	6.4	100	橙色	手捏ね	京都	
土85	人形　虚無僧	遺構検出中	幅 1.9	奥行 1.4	4.3	100	明褐灰色	型・中実		表面にキラコ付着
土86	人形　地蔵菩薩	整地土	幅 3.2	奥行 2.5	7.1	100	胎土)灰白色 釉)灰白色	型・中実		背面「千躰之内施主 寅ノ年男」印
土87	ミニチュア製品 七輪	炉6	一辺 4.3	－	4.2	100	にぶい橙色	型		
土88	ミニチュア製品 仏花瓶	護岸14	口径 1.2	底径 1.4	4.2	100	にぶい黄橙色	型・中実		
土89	独楽	水路88	径 2.7	－	1.3	100	にぶい黄橙色	型・中実		柄差込孔に木が少量 残存
土90	玩具　ガラガラ	暗渠94	長さ (9.5)	幅 4.7	2.3	70	浅黄色	型・中空		持ち手部に墨塗
土91	箱庭道具　塔	耕作土	幅 6.3	奥行 6.6	14.4	70	灰白色	型・中空		表面にキラコ付着
土92	人形　ミミズク	整地土	幅 6.6	奥行 6.5	11.8	60	にぶい黄橙色	型・中空		表面にキラコ付着、 背が赤く塗られる
土93	人形　狐	井戸8掘形	幅 7.9	奥行 12.2	20.0	90	黄橙色	型・中空		眷属
土94	窯道具　ハマ	溝96	6.1	6.0	1.0	100	灰黄色	中実	京都	両面に印・釉付着
土95	窯道具 色見パレット	溝96	長さ 3.3	幅 2.0	0.8	100	胎土)白色 釉)透明	中実	京都	
土96	窯道具　色見壷	溝96	2.8	3.8	3.0	100	胎土)灰色 釉)透明	中実	京都	栗田型
土97	窯道具　匣鉢	水路81	10.4	6.7	10.9	75	にぶい赤褐色	中実	信楽	体部外面に刻印あり

（ ）は残存値

付表４　石製品観察表

番号	種　類	遺　構	法量(cm)			重量(g)	残存率(%)	備　考
			長さ	幅	厚さ			
石1	珠	耕作土	径0.6	－	－	0.3	100	緑透明
石2	珠	暗渠94掘形	径1.0	－	－	1.8	100	青緑透明
石3	珠	整地土	径1.1	－	－	181.1	100	白透明
石4	砥石	炉6	(12.1)	(6.5)	2.2	174.1	70か	
石5	砥石	整地土	(14.3)	4.5	1.3	3.1	80か	
石6	硯	溝1	(16.9)	7.6	2.3	490.5	95	裏面に文字線刻
石7	硯	重機掘削中	18.2	9.1	2.6	722.0	100	裏面に文字線刻

（ ）は残存値

付表５　金属製品観察表

番号	種類	出土遺構	法量(cm)			重量(g)	材質	備　考
			長さ	幅	厚さ			
金1	火箸	土坑46	14.0	－	0.3	4.04	銅製鋳造	
金2	煙管吸口	土坑46	5.7	1.1	0.2	14.77	銅製鋳造	
金3	煙管雁首	耕作土	6.1	1.9	0.1	16.00	銅製鋳造	
金4	煙管雁首	暗渠94掘形	5.6	1.6	0.1	9.15	銅製鋳造	
金5	煙管雁首	土坑46	6.7	1.2	0.1	18.63	銅製鋳造	
金6	薙刀ミニチュア	炉6	23.9	0.8	0.4	14.89	銅製鋳造	

付表６　銭貨観察表

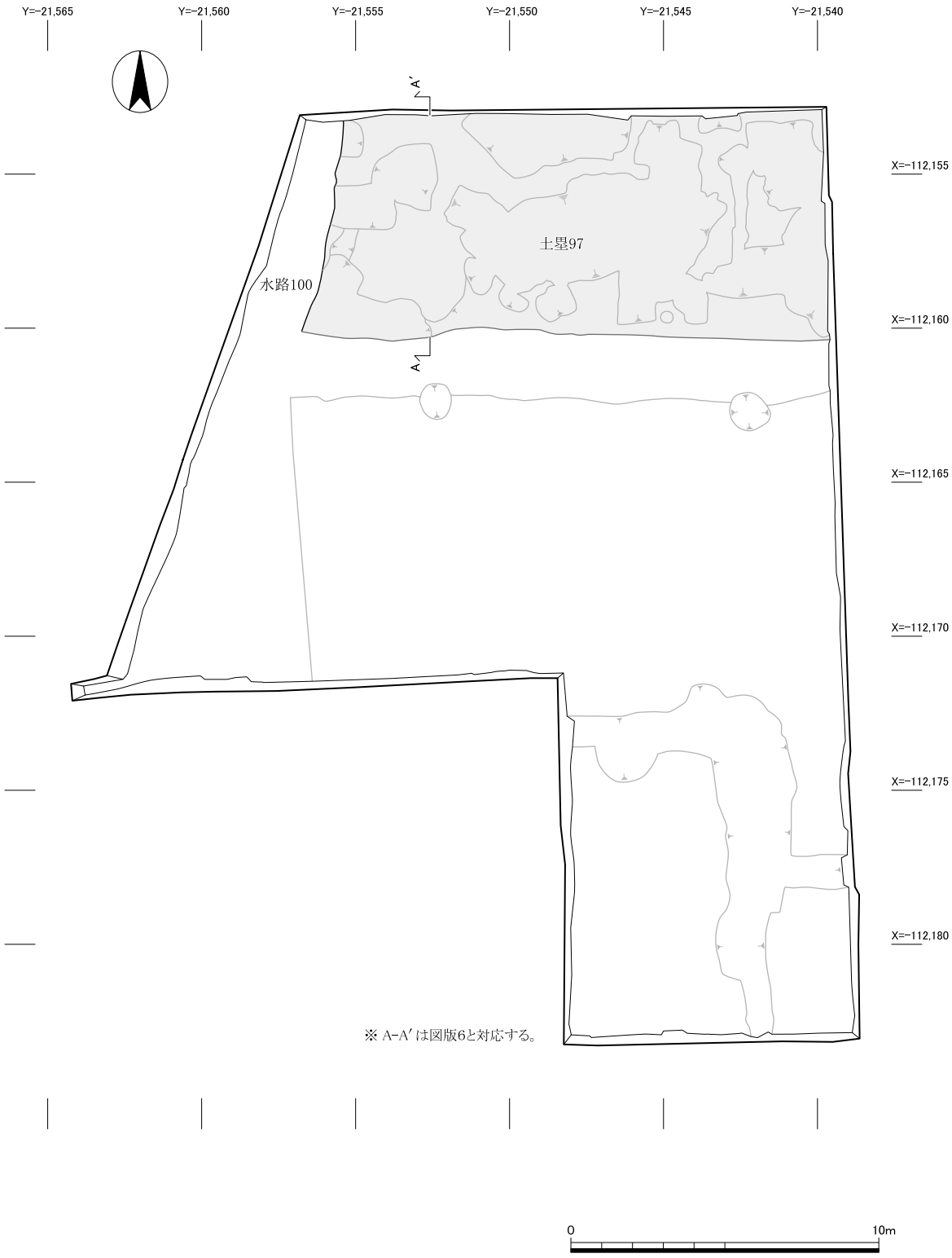
番号	種類	出土遺構	法量(cm)			重量(g)	材質	初鋳年	備　考
			外径	穿孔径	厚さ				
銭1	半銭	攪乱	2.25	－	0.13	3.44	銅製鋳造	明治8年(1875)	表:「半銭」、「二百枚」「換一圓」 背:中心に龍、「大日本・明治八年・1/2 SEN・」
銭2	文久永寶	重機掘削	2.70	0.7	0.09	3.00	銅製鋳造	文久3年(1863)	表:上下右左の順に「文久永寶」、 背:波11
銭3	新寛永通寶	暗渠94掘形	2.50	0.5	0.13	3.48	銅製鋳造	寛文8年(1668)	表:上下右左の順に「寛永通寶」、 背:「文」
銭4	新寛永通寶	炉6	2.30	0.7	0.08	1.71	銅製鋳造	元禄10年(1697)	表:上下右左の順に「寛永通寶」、 背:無文
銭5	新寛永通寶	耕作土	2.40	0.6	0.12	3.32	銅製鋳造	元禄10年(1697)	表:上下右左の順に「寛永通寶」、 背:無文
銭6	新寛永通寶	整地土	2.55	0.6	0.15	4.18	銅製鋳造	元禄10年(1697)	表:上下右左の順に「寛永通寶」、 背:無文
銭7	古寛永通寶	整地土	2.50	0.6	0.12	3.60	銅製鋳造	寛永13年(1636)	表:上下右左の順に「寛永通寶」、 背:無文
銭8	古寛永通寶	整地土	2.45	0.5	0.12	3.95	銅製鋳造	寛永13年(1636)	表:上下右左の順に「寛永通寶」、 背:無文
銭9	寶永通寶	整地土	3.70	0.9	0.13	8.32	銅製鋳造	宝永5年(1708)	表:上下右左の順に「寶永通寶」、 背:背輪上下右左の順に「永久世用」永と世の間に「珍」刻印

付表７　ガラス製品観察表

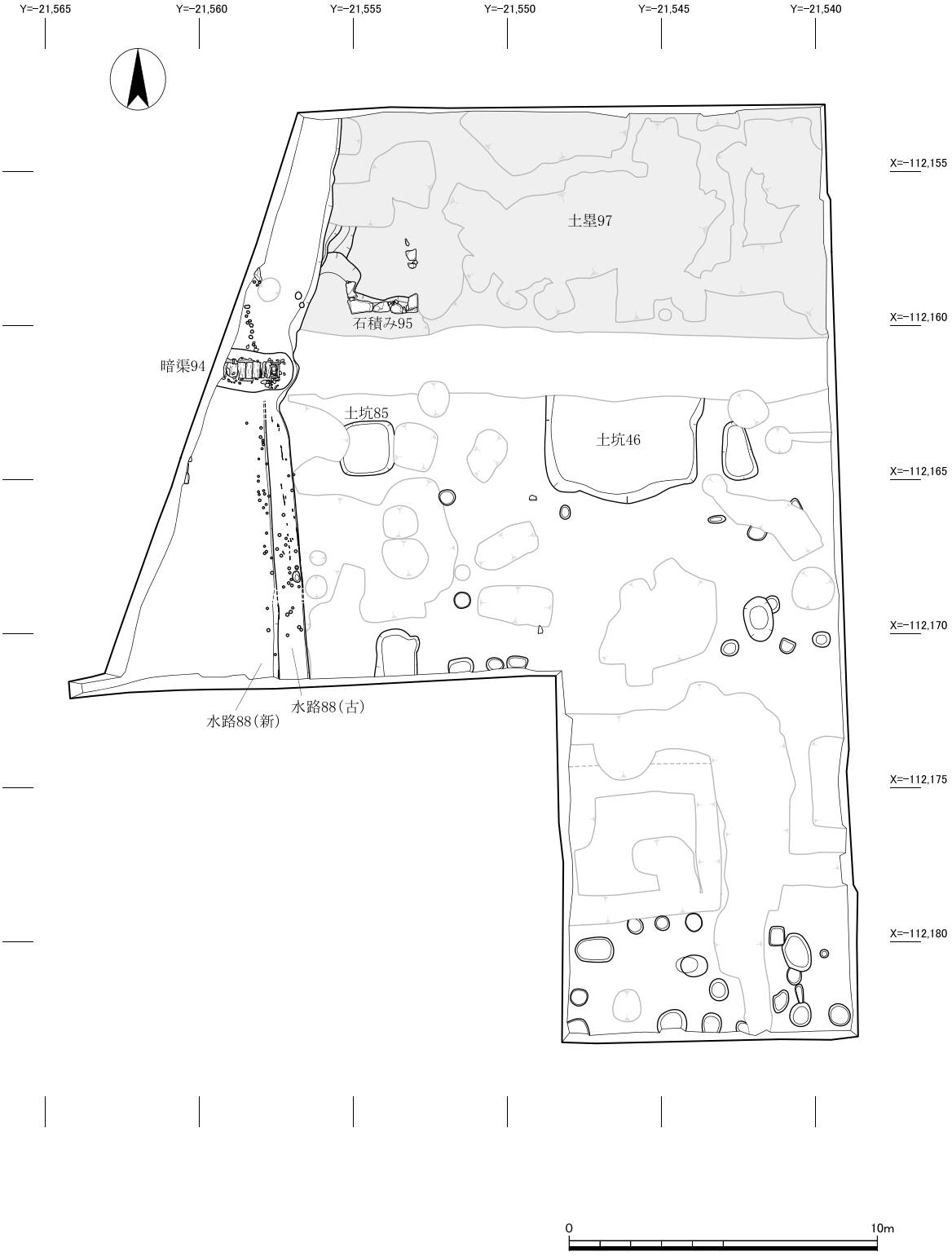
番号	種類	遺構	法量(cm)			残存率	色	備考
			口径	高さ	底部幅			
ガ1	目薬瓶	石列75下層	0.9	5.9	2.0	100	透明	「大阪 浪花薬舗」「目薬 ハツキリ」。型吹き
ガ2	目薬瓶	石列75下層	－	(5.5)	2.1	90	透明	「大阪 永嶋」「目薬 瀧谷水」。型吹き
ガ3	化粧瓶	石列73裏込	1.1	7.5	2.4	100	濃青透明	「美顔水」。型吹き
ガ4	牛乳瓶	石列75下層	－	(11.6)	5.0	70	薄青透明	「大阪驛」「全乳 水了軒」。型吹き
ガ5	みかん水瓶	石列75下層	－	(8.5)	－	60	薄青透明	「みかん水」。型吹き
ガ6	みかん水瓶	石列73裏込	－	(11.6)	3.8	90	薄青透明	「みかん水」。型吹き
ガ7	みかん水瓶	石列75下層	1.6	14.5	3.8	100	薄青透明	「みかん水」。型吹き
ガ8	みかん水瓶	石列75下層	1.5	15.0	3.0	90	薄青透明	「みかん水」。型吹き
ガ9	ビール瓶	石列75下層	2.3	27.5	6.9	100	赤褐色透明	「登録◎商標」「大日本麦酒株式會□□造」。型吹き

( ) は残存値

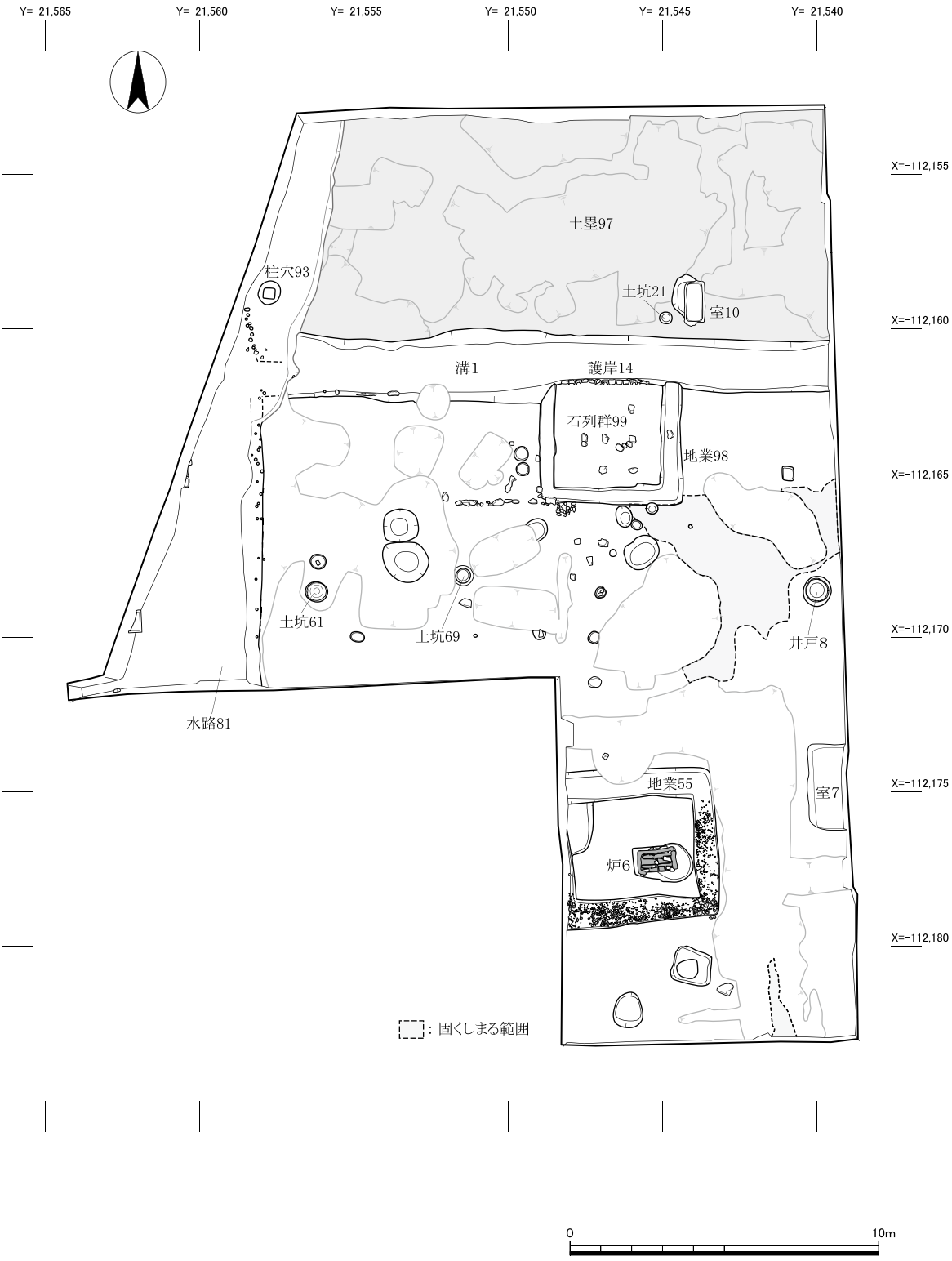
図　　版


Y=-21,565
Y=-21,560
Y=-21,555
Y=-21,550
Y=-21,545
Y=-21,540
X=-112,155
X=-112,160
X=-112,165
X=-112,170
X=-112,175
X=-112,180
A
A'
土塁97
水路100
※ A-A'は図版6と対応する。
0
10m

第３面平面図（１：200）


Y=-21,565
Y=-21,560
Y=-21,555
Y=-21,550
Y=-21,545
Y=-21,540
X=-112,155
X=-112,160
X=-112,165
X=-112,170
X=-112,175
X=-112,180
土塁97
石積み95
暗渠94
土坑85
土坑46
水路88（古）
水路88（新）
0
10m

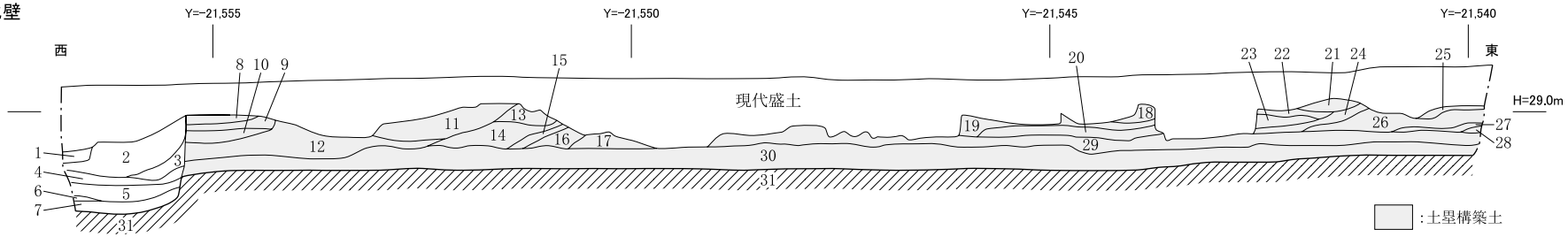
第２面平面図（１：200）


Y=-21,565
Y=-21,560
Y=-21,555
Y=-21,550
Y=-21,545
Y=-21,540
X=-112,155
X=-112,160
X=-112,165
X=-112,170
X=-112,175
X=-112,180
土墨97
柱穴93
土坑21
室10
溝1
護岸14
石列群99
地業98
土坑61
土坑69
井戸8
水路81
地業55
室7
炉6
：固くしまる範囲
0
10m

第1面平面図（1：200）

調査区北壁・東壁断面図（1：80）

北壁



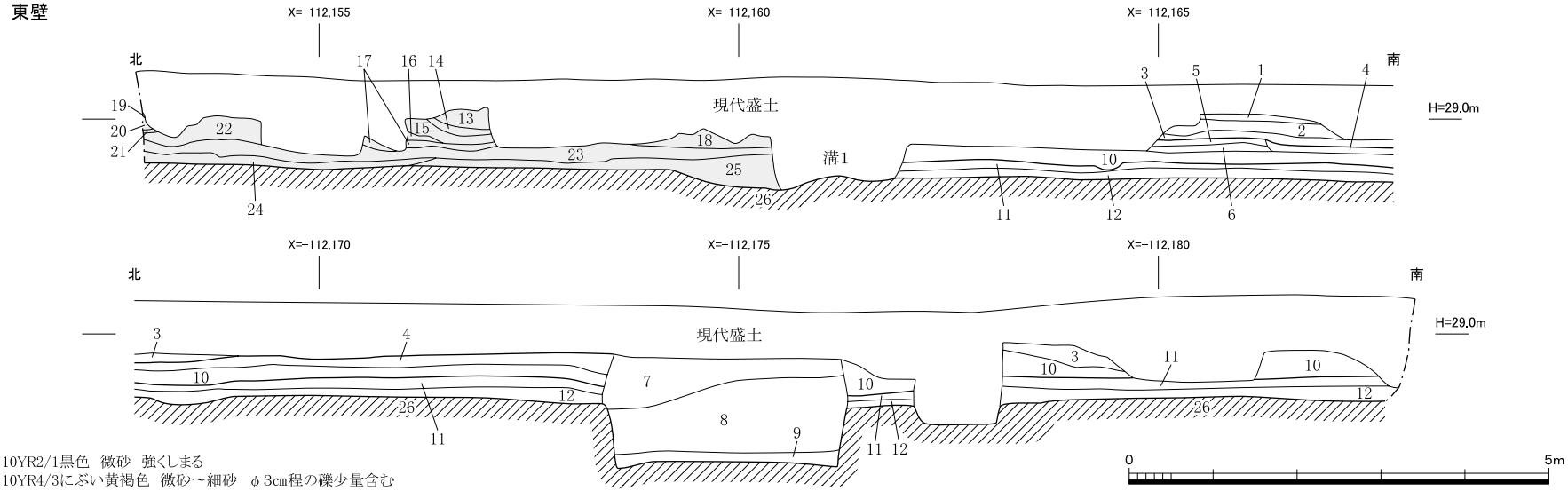
1　10YR2/1黒色　粗砂　炭・φ1～5cmの礫・陶磁器・瓦含む
2　10YR3/1黒褐色　粗砂　炭・φ1～3cmの礫・瓦含む
3　10YR3/1黒褐色　微砂　粘性あり　炭含む
4　10YR2/1黒色　細砂　やや粘性あり　炭・φ1～3cmの礫少量含む
5　10YR4/1褐灰色　細砂　粘性あり　炭・φ3～10cmの礫含む
6　10YR3/1黒褐色　微砂　粘性あり　炭含む
7　10YR2/2黒褐色　微砂＋10YR3/1黒褐色細砂のブロック含む
（水路100）

8　10YR3/2黒褐色　微砂　粘性あり
9　10YR4/6褐色　微砂　粘性あり
10　10YR4/1褐灰色　微砂　粘性あり
11　2.5Y3/3暗オリーブ褐色　細砂～粗砂
12　10YR4/3にぶい黄褐色　微砂　粘性あり
13　2.5Y4/4オリーブ褐色　微砂
14　2.5Y4/4オリーブ褐色　細砂～粗砂　φ2～5cmの礫含む
15　2.5Y3/3暗オリーブ褐色　細砂～粗砂

16　2.5Y3/3暗オリーブ褐色　微砂
17　2.5Y4/4オリーブ褐色　微砂
18　2.5Y4/4オリーブ褐色　微砂
19　2.5Y4/2暗灰黄色　微砂
20　2.5Y4/2暗灰黄色　細砂～粗砂
21　2.5Y4/4オリーブ褐色　細砂～粗砂
22　2.5Y4/4オリーブ褐色　微砂
23　2.5Y4/2暗灰黄色　微砂

24　2.5Y4/2暗灰黄色　細砂～粗砂
25　10YR4/6褐色　粗砂
26　10YR5/2灰黄褐色　微砂　粘土ブロック含む
27　10YR4/6褐色　細砂～粗砂　φ1～3cmの礫含む
28　10YR4/6褐色　微砂
29　10YR4/4褐色　粗砂　φ2～3cmの礫含む
30　10YR3/4暗褐色　粗砂　粘性あり
31　10YR6/1褐灰色　粗砂　φ1～5cmの礫含む（基盤層）

東壁



1　10YR2/1黒色　微砂　強くしまる
2　10YR4/3にぶい黄褐色　微砂～細砂　φ3cm程の礫少量含む
3　10YR5/6黄褐色　微砂　焼土と漆喰多量含む　やや粘性あり
4　10YR4/1褐灰色　微砂～細砂　焼土含む
5　10YR8/3浅黄橙色　微砂　強くしまる
6　10YR6/1褐灰色　微砂　強くしまる
7　2.5Y5/2暗灰黄色　細砂～粗砂　煉瓦多量含む
8　2.5Y8/6黄色　細砂～粗砂　漆喰ブロック多量含む
（室7）
9　炭

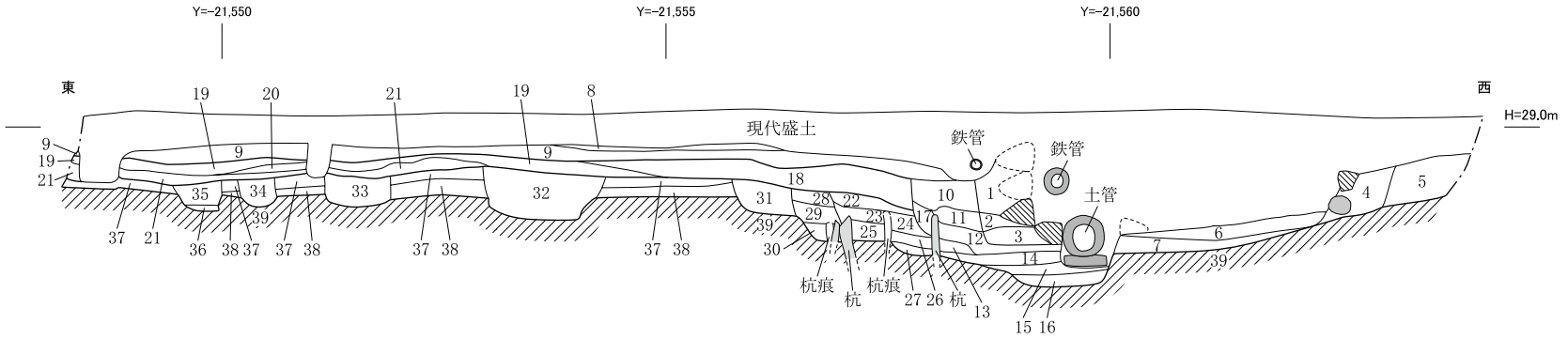
10　5YR5/6明赤褐色　微砂　ややしまる　焼土面
11　10YR4/1褐灰色　微砂　ごく少量炭含む　粘性強い
12　10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～粗砂
（江戸時代後期の耕作土）
13　10YR4/4褐色　細砂　ややしまる
14　10YR4/6褐色　細砂　φ1～5cmの礫含む

15　10YR4/4褐色　細砂
16　10YR4/4褐色　粗砂　φ1～5cmの礫含む
17　10YR4/6褐色　粗砂
18　10YR3/4暗褐色　粗砂　φ2～3cmの礫含む
19　10YR4/6褐色　粗砂
20　10YR5/2灰黄褐色　微砂　粘土ブロック含む

21　10YR4/6褐色　細砂～粗砂　φ1～3cmの礫含む
22　10YR4/6褐色　微砂
23　10YR4/4褐色　粗砂　φ2～3cmの礫含む
24　10YR4/6褐色　粗砂　粘性あり
25　10YR3/4暗褐色　粗砂　φ1～5cmの礫含む　粘性あり
26　10YR6/1褐灰色　粗砂　φ1～5cmの礫含む（基盤層）

調査区南壁断面図（1：80）

南壁



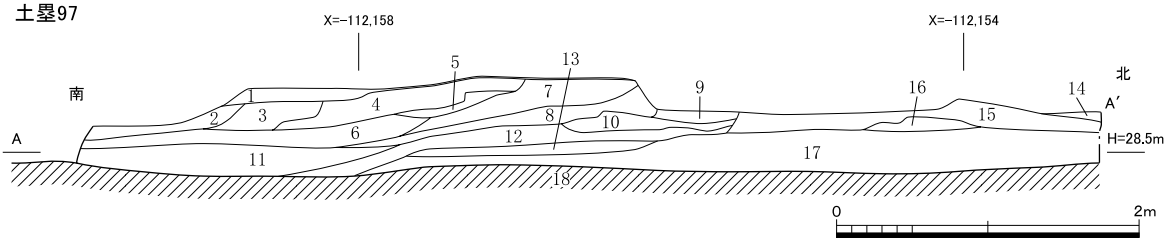
1 10YR3/1黒褐色 粗砂 φ5～10cmの礫多量含む
2 10YR6/2灰黄褐色 微砂 やや粘性あり
3 10YR3/3暗褐色 粗砂 やや粘性あり
（石列73裏込め）
4 10YR2/2黒褐色 微砂 5cm程の礫少量含む
5 10YR2/2黒褐色 細砂～粗砂 やや粘性あり
6 10YR2/2黒褐色 微砂
7 10YR3/2黒褐色 微砂
8 10YR7/6明黄褐色 微砂 漆喰床 強くしまる
9 5YR5/4にぶい赤褐色 微砂 焼土ブロック・焼瓦多量含む
10 10YR2/2黒褐色 粗砂 φ1～5cmの礫含む
11 10YR3/2黒褐色 微砂 やや粘性あり φ5cm程の礫少量含む
12 10YR3/2黒褐色 微砂 やや粘性あり
13 10YR3/2黒褐色微砂＋10YR6/2灰黄褐色粗砂ブロック含む
14 10YR6/8明黄褐色 粗砂 φ3～5cmの礫中量含む
15 10YR6/1褐灰色 粗砂 φ1～5cmの礫多量含む
16 10YR5/3にぶい黄褐色 微砂 やや粘性あり
17 10YR3/3暗褐色 微砂 やや粘性あり
（水路81）
18 10YR6/4にぶい黄褐色 微砂 φ2～10cmの礫多量含む
19 5YR5/6明赤褐色 微砂 焼土多量含む
20 10YR7/8黄橙色 微砂 漆喰床 強くしまる
21 10YR7/6明黄褐色 微砂 よくしまる
（江戸時代後期の整地土）

22 10YR7/1にぶい黄褐色 微砂～細砂 φ3～5cmの礫含む よくしまる
23 10YR4/2灰黄褐色 微砂
24 10YR4/2灰黄褐色 微砂～細砂
25 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂
26 10YR4/2灰黄褐色 微砂～細砂＋10YR6/3にぶい黄褐色粗砂ブロック
27 10YR4/2灰黄褐色 微砂～細砂 やや粘性あり
28 10YR4/1褐灰色 細砂
29 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂
30 10YR5/2灰黄褐色 微砂～細砂
31 10YR3/2黒褐色 微砂～細砂
（水路88）
32 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂～シルト（土坑）
33 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂～シルト（土坑）
34 10YR3/2黒褐色 微砂～細砂（土坑）
35 10YR6/8明黄褐色 シルト 粘性強い
36 10YR4/4褐色 微砂
（土坑）
37 10YR4/1褐灰色 微砂～細砂 やや粘性あり 炭含む
38 10YR4/6褐色 微砂
（江戸時代後期の耕作土）
39 10YR6/2灰黄褐色 細砂～粗砂 φ1～5cmの礫少量含む（基盤層）

0 5m

図版5 遺構

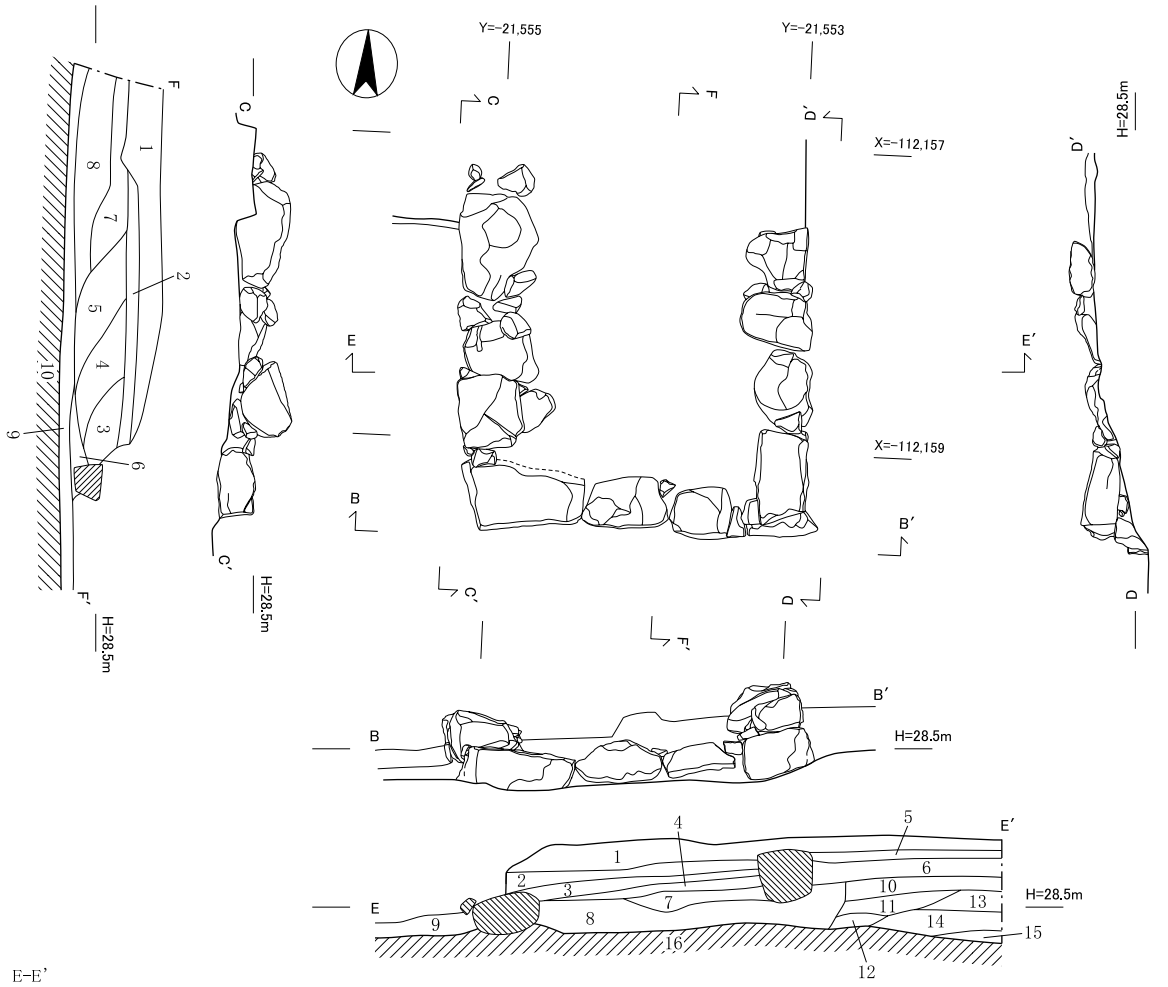
土塁97



※ A-A′は図版1と対応する。

1 2.5Y8/6黄色 微砂 φ1cm程の礫・漆喰含む しまりとても強い
2 10YR3/3暗褐色 細砂
3 10YR4/4褐色 微砂
4 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ～5cmの礫少量含む
5 2.5Y5/4黄褐色 粗砂 φ2cm程の礫含む
6 10YR5/2灰黄褐色 細砂 φ～5cmの礫少量含む
7 2.5Y4/4オリーブ褐色 微砂 やや粘性あり
8 10YR4/4褐色 粗砂 φ2cm程の礫少量含む
9 10YR4/4褐色 微砂
10 2.5Y4/3オリーブ褐色 微砂 やや粘性あり
11 2.5Y5/2暗灰黄色 細砂～粗砂
12 10YR4/6褐色 細砂
13 10YR4/4褐色 微砂 やや粘性あり
14 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂～細砂
15 10YR4/6褐色 細砂～粗砂
16 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂
17 2.5Y4/2暗灰黄色 細砂～粗砂
18 10YR4/6褐色 粗砂 φ1～5cmの礫多量含む(基盤層)

石積み95



E-E'

1 2.5Y8/6黄色 微砂 φ1cm程の礫・漆喰含む しまりとても強い
2 10YR4/3にぶい黄褐色 砂泥 炭・φ～4cmの礫少量含む
3 10YR4/4褐色 砂泥 炭・φ～3cmの礫少量含む
4 10YR3/4暗褐色 砂泥 炭・φ～3cmの礫少量含む
5 10YR5/4にぶい黄褐色 砂泥 φ～5cmの礫少量含む
6 10YR7/3にぶい黄橙色 粗砂
7 10YR5/4にぶい黄褐色 粗砂 φ5cmの礫含む
8 10YR5/6黄褐色 微砂 φ5cm程の礫少量含む
9 10YR4/4褐色 微砂

石積み95

10 10YR4/4褐色 細砂～粗砂 やや粘性あり
11 10YR4/3にぶい黄褐色 微砂
12 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂 φ1cm程の礫多量含む
13 10YR5/3にぶい黄褐色 微砂
14 10YR5/3にぶい黄褐色 粗砂 φ3cm程の礫多量含む
15 10YR5/3にぶい黄褐色 微砂
16 10YR5/3にぶい黄褐色 微砂 しまり強い(基盤層)

土塁97

F-F'

1 2.5Y8/6黄色 微砂 φ1cm程の礫・漆喰含む しまりとても強い
2 10YR6/4にぶい黄橙色 細砂 炭・φ2～5cmの礫含む
3 10YR4/4褐色 粗砂 φ1～2cmの礫含む
4 10YR3/4暗褐色 砂泥 炭・φ～3cmの礫少量含む
5 2.5Y4/4オリーブ褐色 細砂 しまり強い
6 10YR4/6褐色 粗砂

土塁97

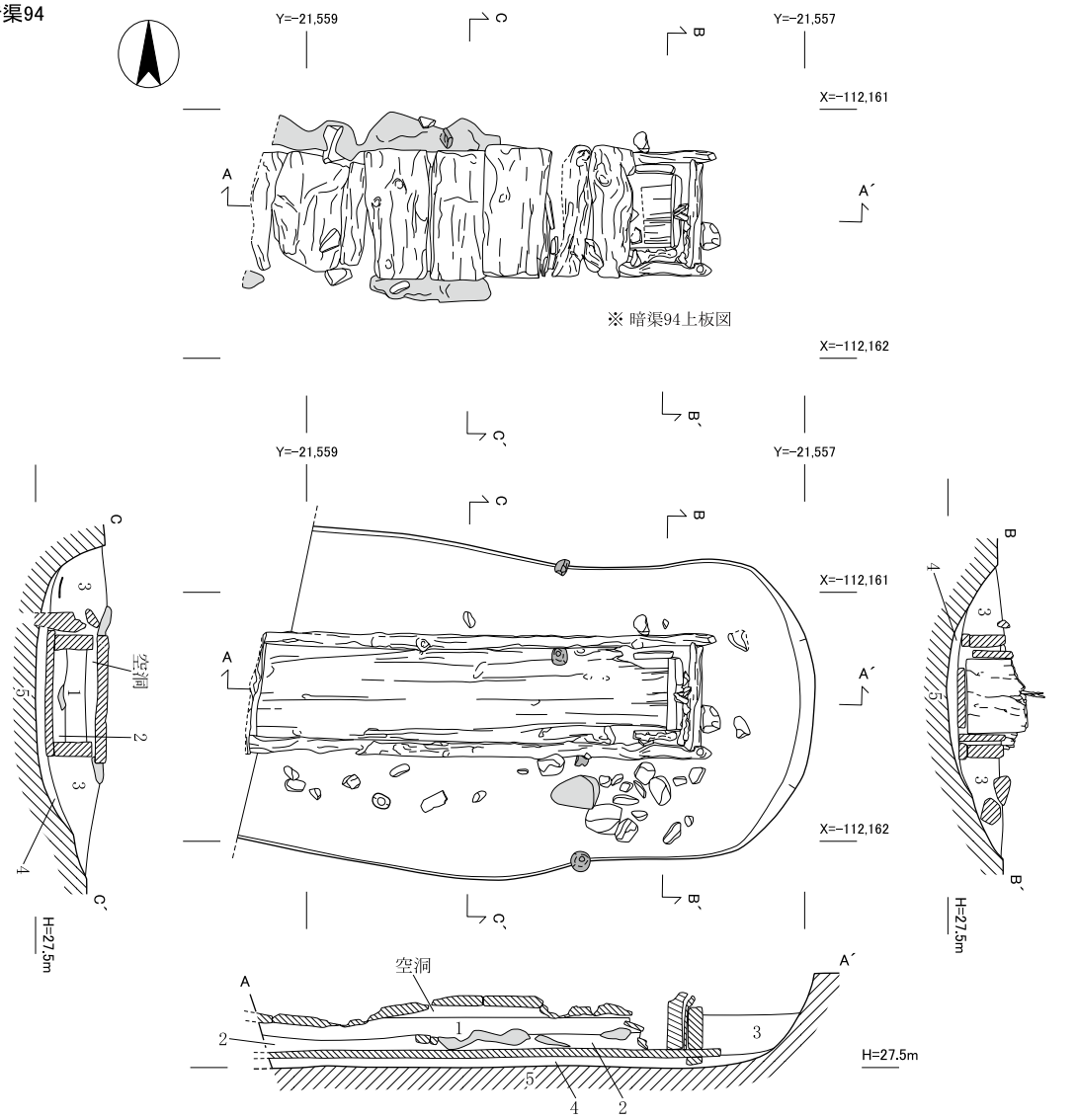
7 10YR5/6黄褐色 粗砂＋10YR5/8黄褐色細砂ブロック含む
8 10YR4/4褐色 細砂 φ3～5cmの礫含む
9 10YR4/2灰黄褐色 粗砂 φ3～10cmの礫含む

石積み95

10 10YR4/6褐色 粗砂 φ3～5cmの礫中量含む しまり強い(基盤層)

土塁97断面図、石積み95実測図（1：50）

暗渠94



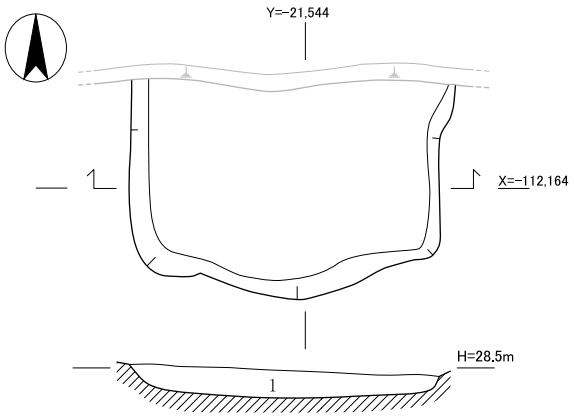
※ 暗渠94上板図

1　10YR2/2黒褐色　シルト　粘性強い
2　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性強い　粘土ブロック含む
3　10YR3/1黒褐色　細砂～粗砂　φ2～10cmの礫少量含む
4　10YR3/2黒褐色　微砂　粘性あり
5　10YR6/1褐灰色　粗砂　φ1～5cmの礫含む(地山)

：木杭
：粘土

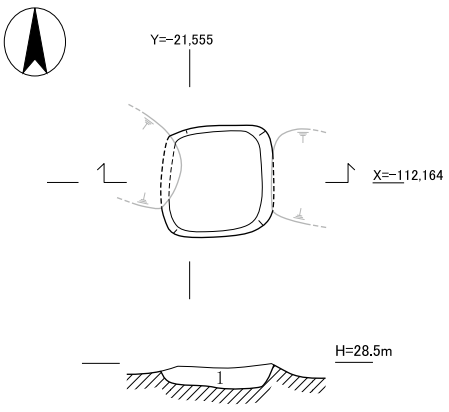
0　1m

土坑46



1　10YR4/2灰黄褐色　細砂　φ5～10cmの礫・炭多量含む

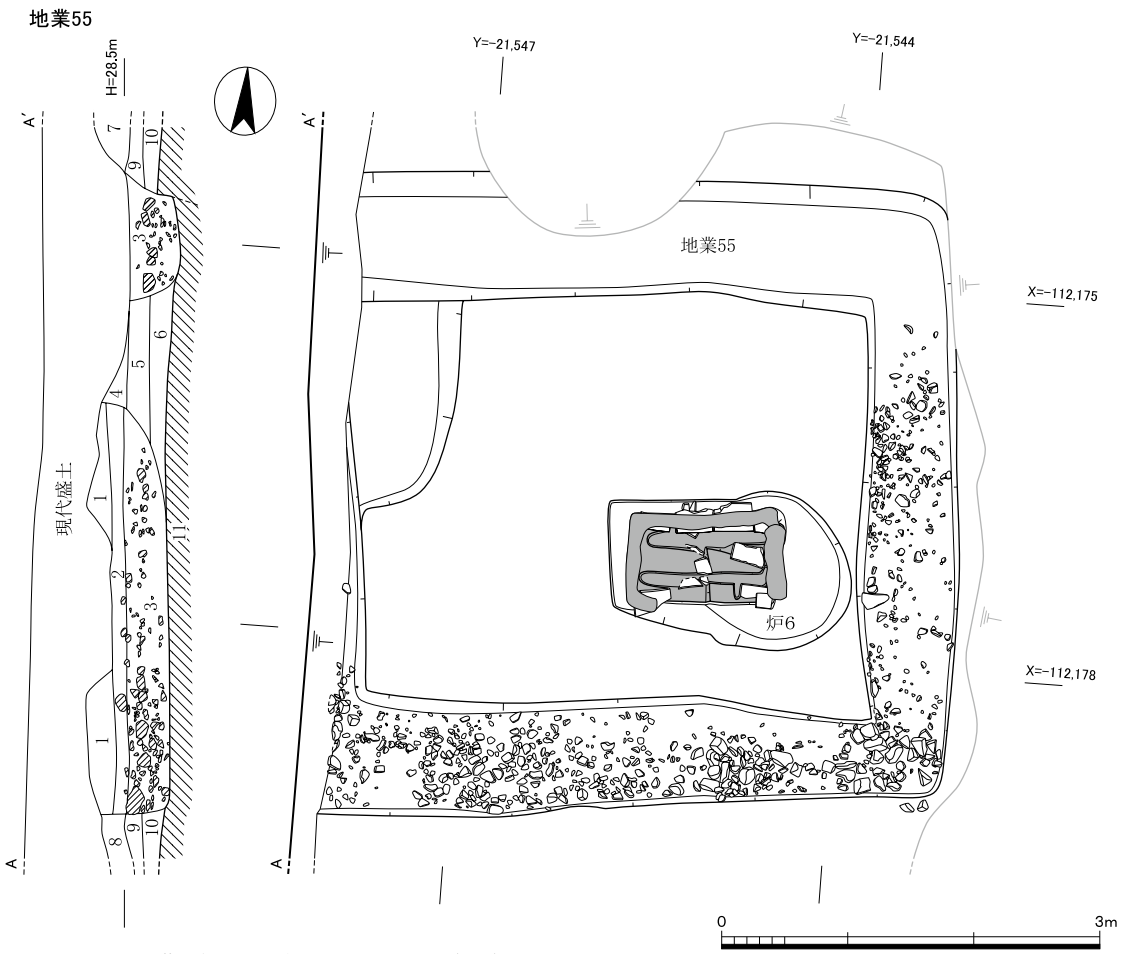
土坑85



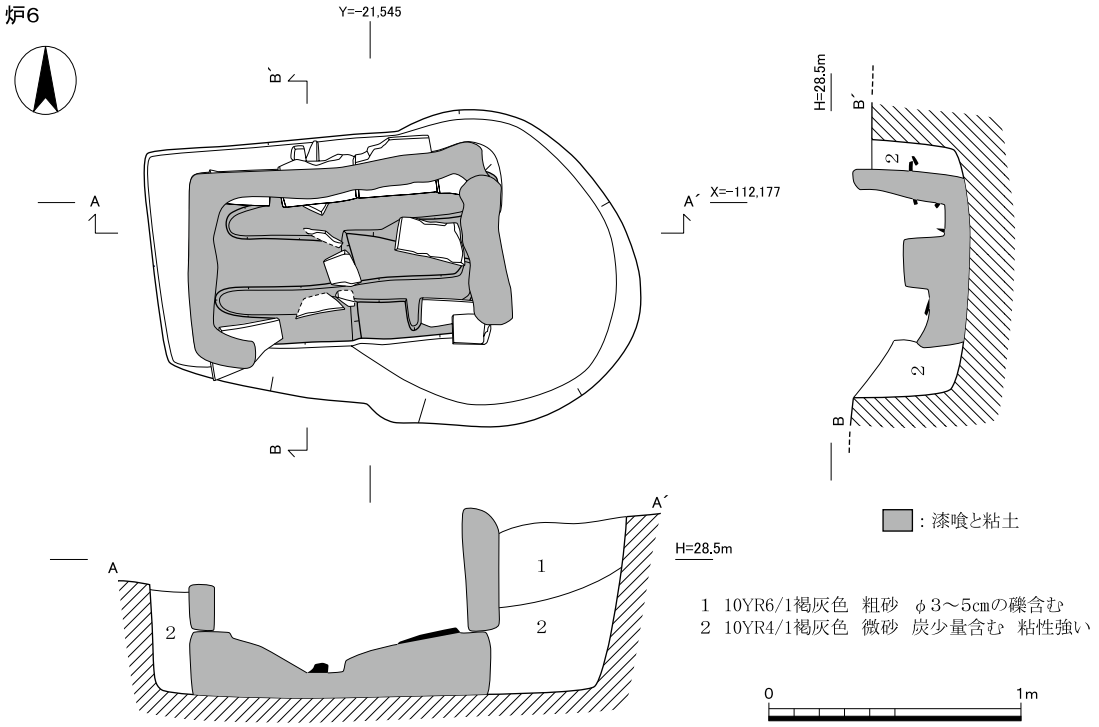
1　10YR4/2灰黄褐色　微砂　φ5～10cmの礫多量含む

0　5m

暗渠94実測図（1：30）、土坑46・85実測図（1：120）



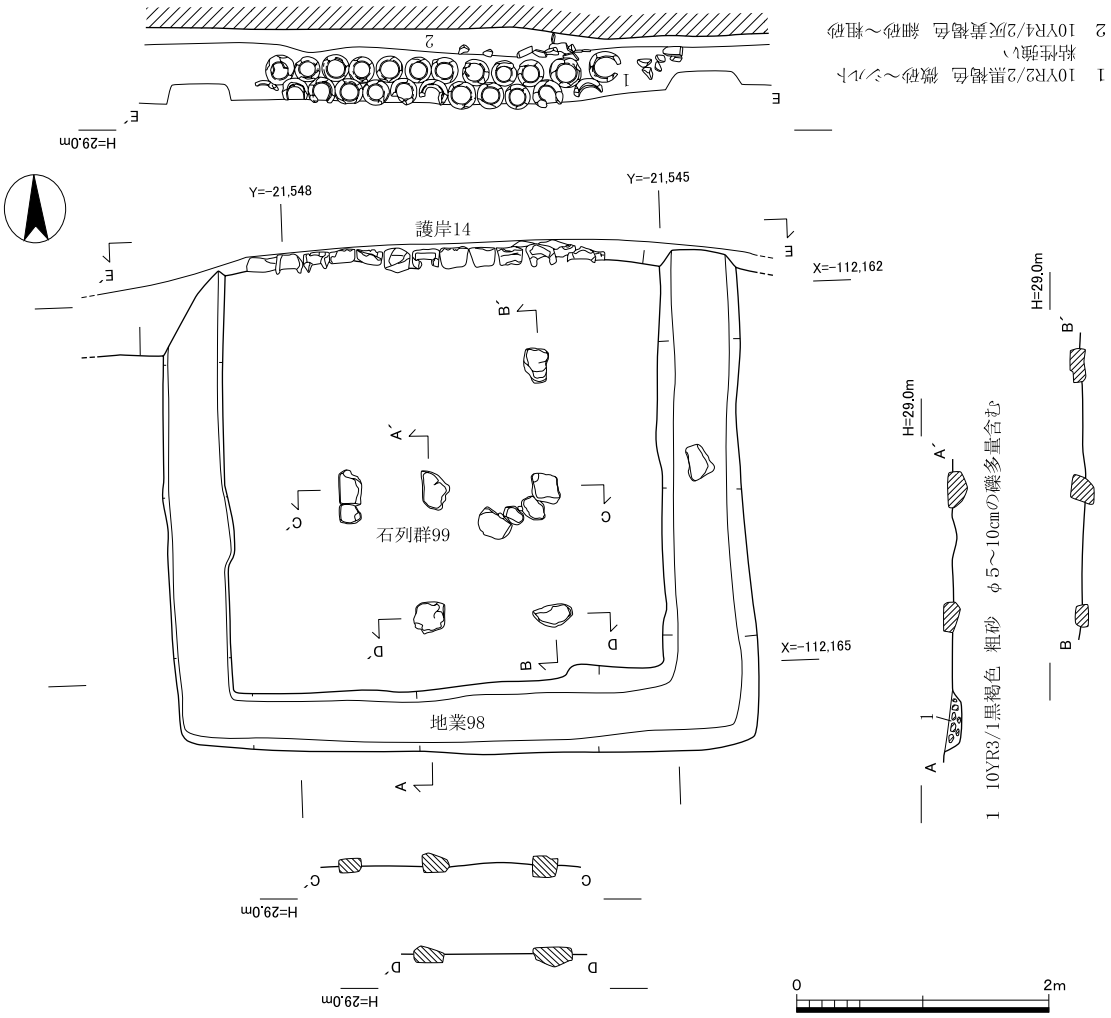
1　10YR5/2灰黄褐色　微砂～細砂　φ3～5㎝の礫多量含む
2　10YR5/4にぶい黄褐色　微砂
3　10YR2/2黒褐色　微砂～シルト　φ3～5㎝の礫多量含む
4　10YR8/1灰白色　微砂
5　10YR5/4にぶい黄褐色　微砂　φ5～20㎝の礫多量含む
6　10YR4/1褐灰色　微砂　粘性あり
7　10YR8/1灰白色　粗砂　φ3～5㎝の礫多量含む
8　10YR5/6黄褐色　微砂　焼土・漆喰多量混じる　やや粘性あり
9　10YR4/1褐灰色　微砂　炭ごく少量混じる
10　10YR5/4にぶい黄褐色　細砂～粗砂
11　10YR8/2灰白色　粗砂　φ1～5㎝の礫多量含む(基盤層)

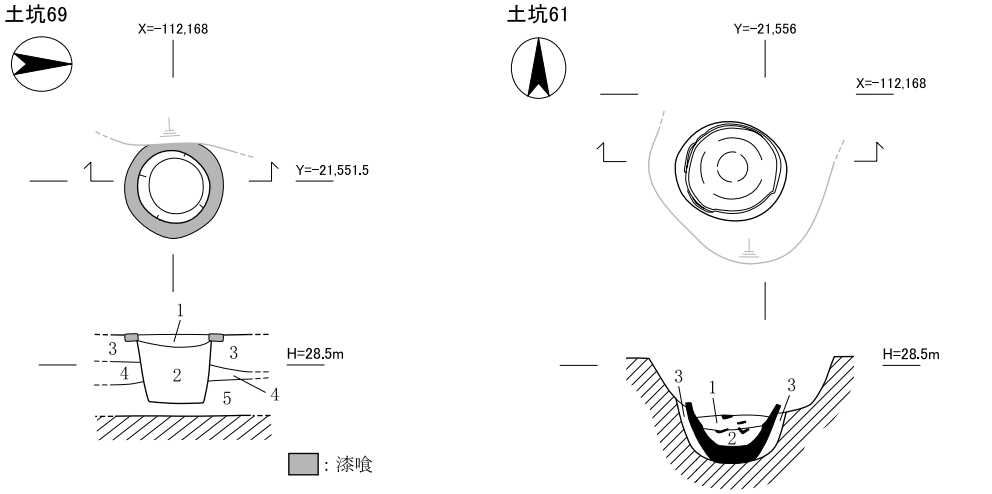


1　10YR6/1褐灰色　粗砂　φ3～5㎝の礫含む
2　10YR4/1褐灰色　微砂　炭少量含む　粘性強い

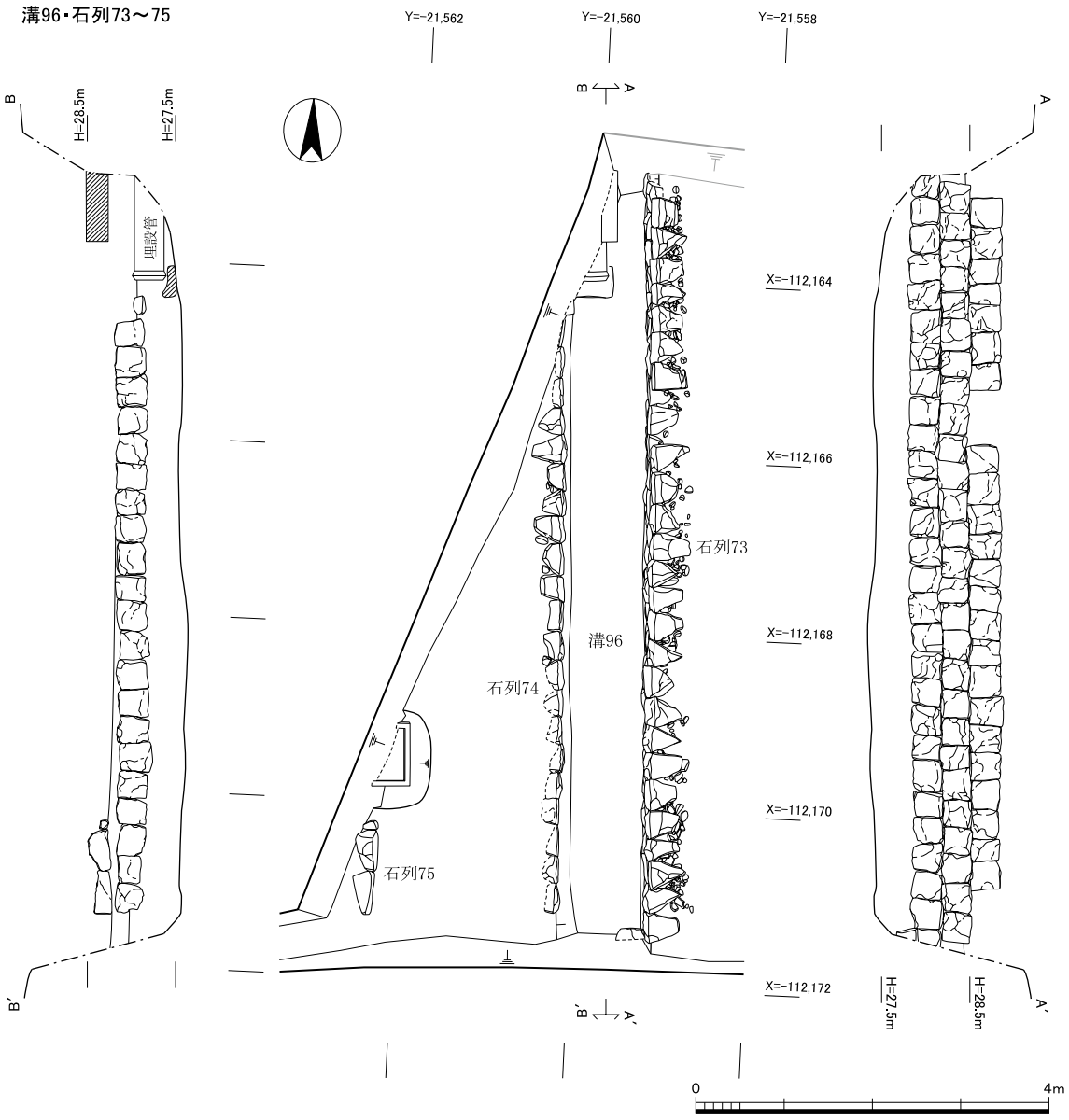
地業55実測図（1：60）、炉6実測図（1：30）

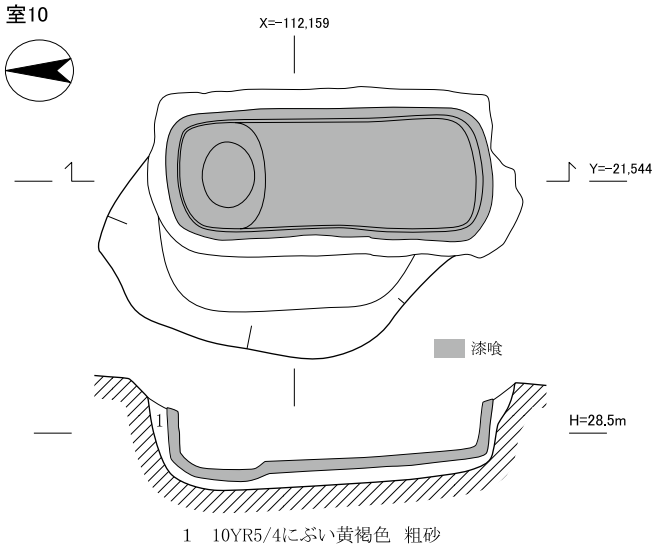
地業98・石列群99・護岸14

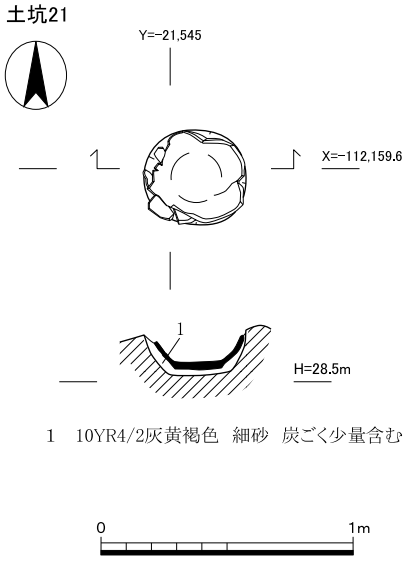




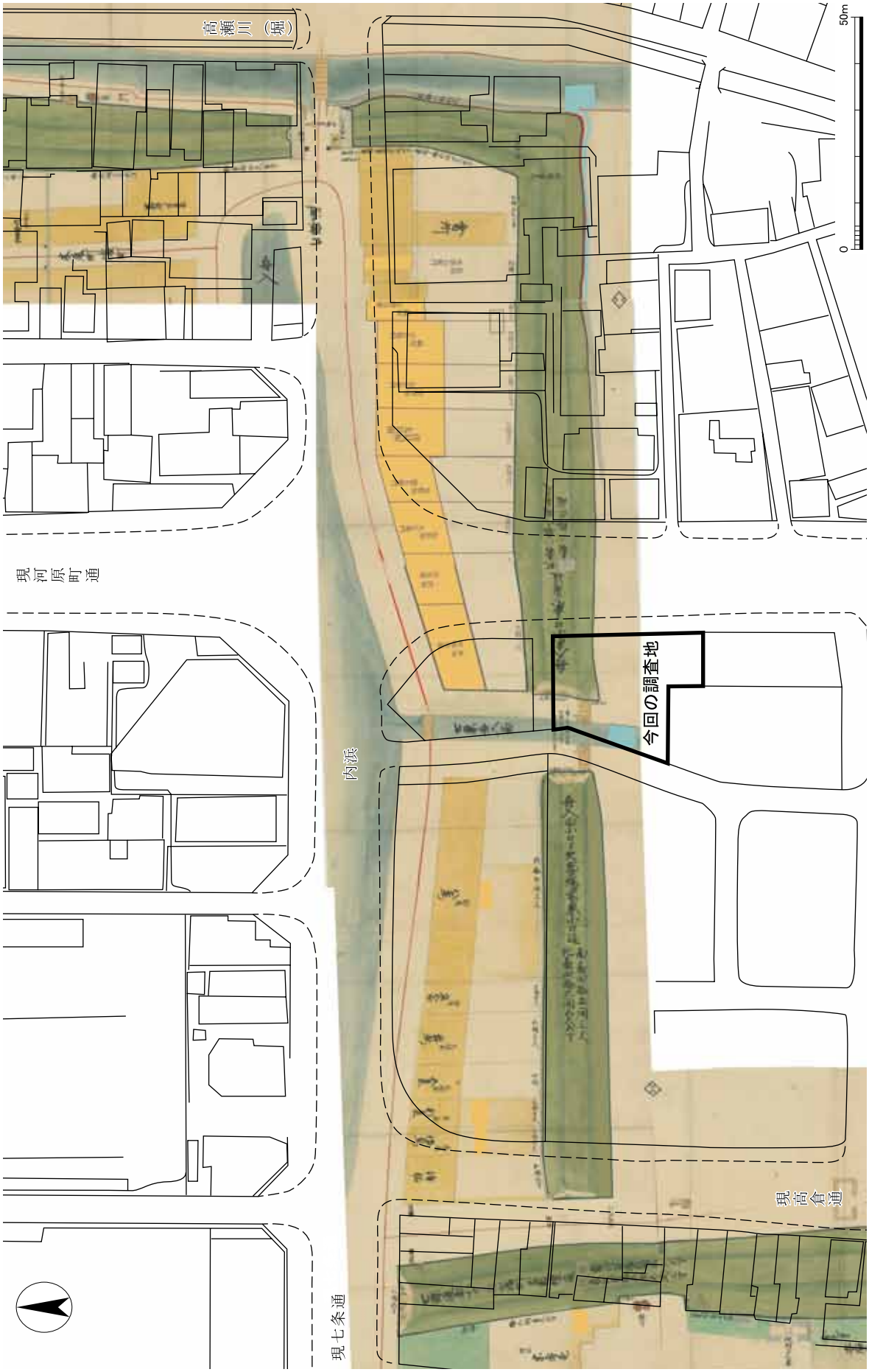
地業98・石列群99・護岸14実測図（1：60）、土坑61・69実測図（1：50）





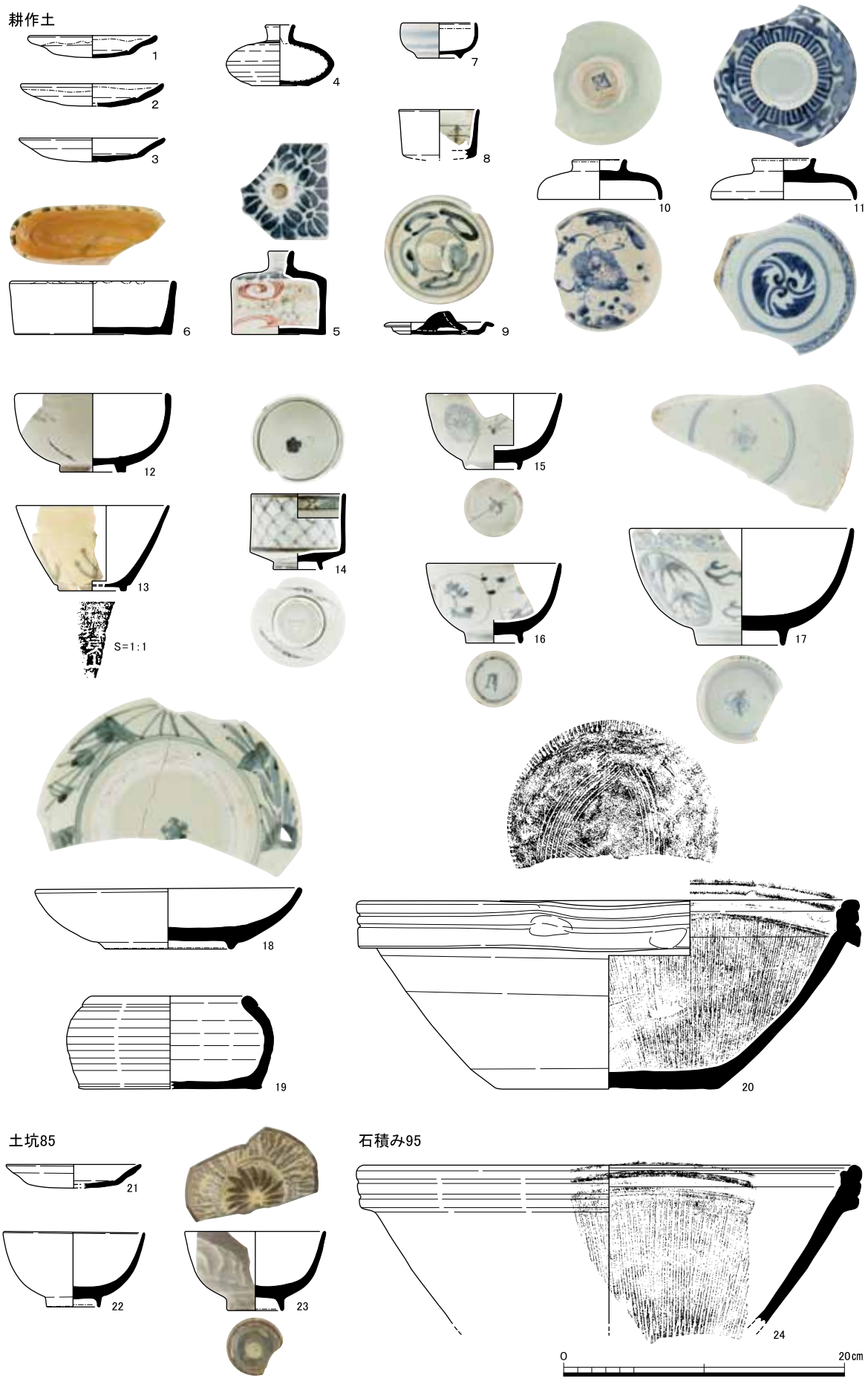


溝96・石列73～75実測図（1：80）、室10・土坑21実測図（1：30）

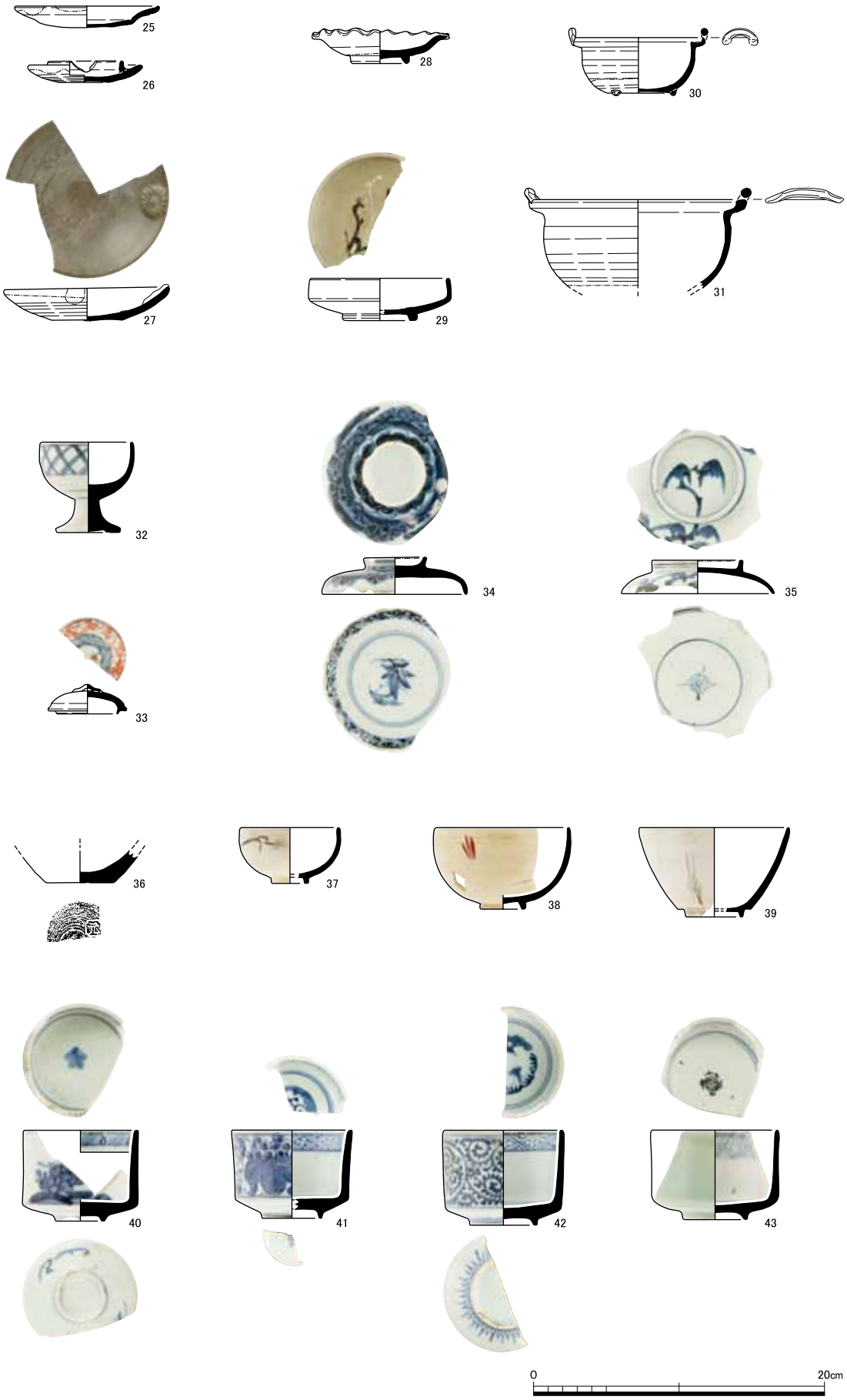


『京都惣曲輪御土居絵図』（京都大学総合博物館所蔵）と今回の調査地（１：1,200）

図版12　遺物



耕作土・土坑85・石積み95出土土器実測図（１：４）



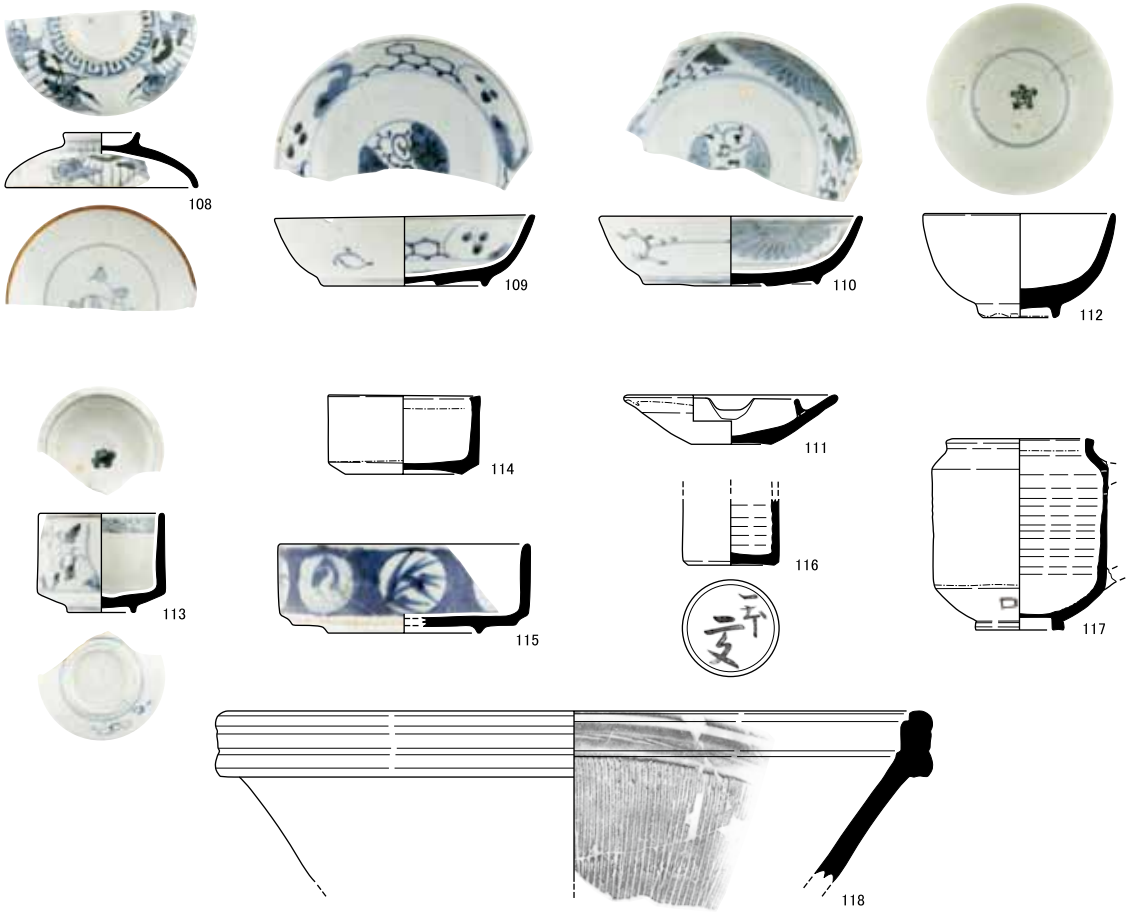
土坑46出土土器実測図１（１：４）

土坑46出土土器実測図２（１：４）

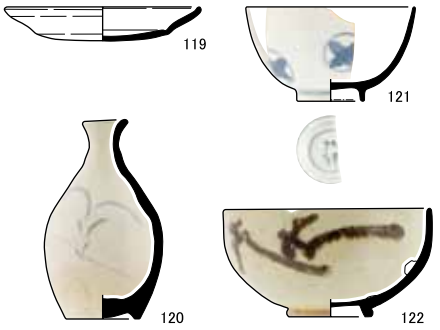
整地土出土土器実測図１（１：４）

整地土出土土器実測図２（１：４）

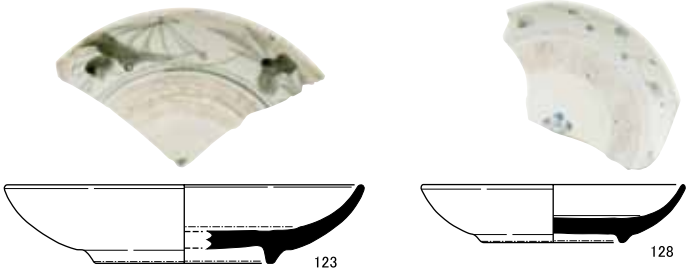
水路88



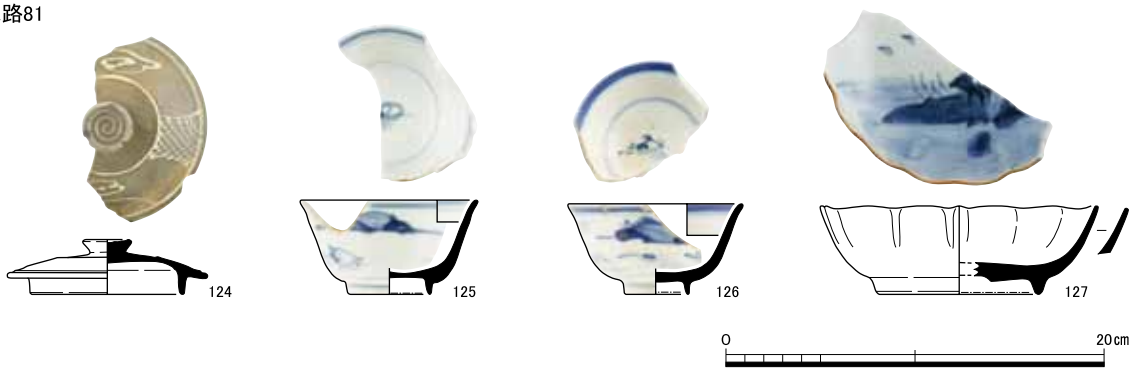
水路100



護岸14



水路81

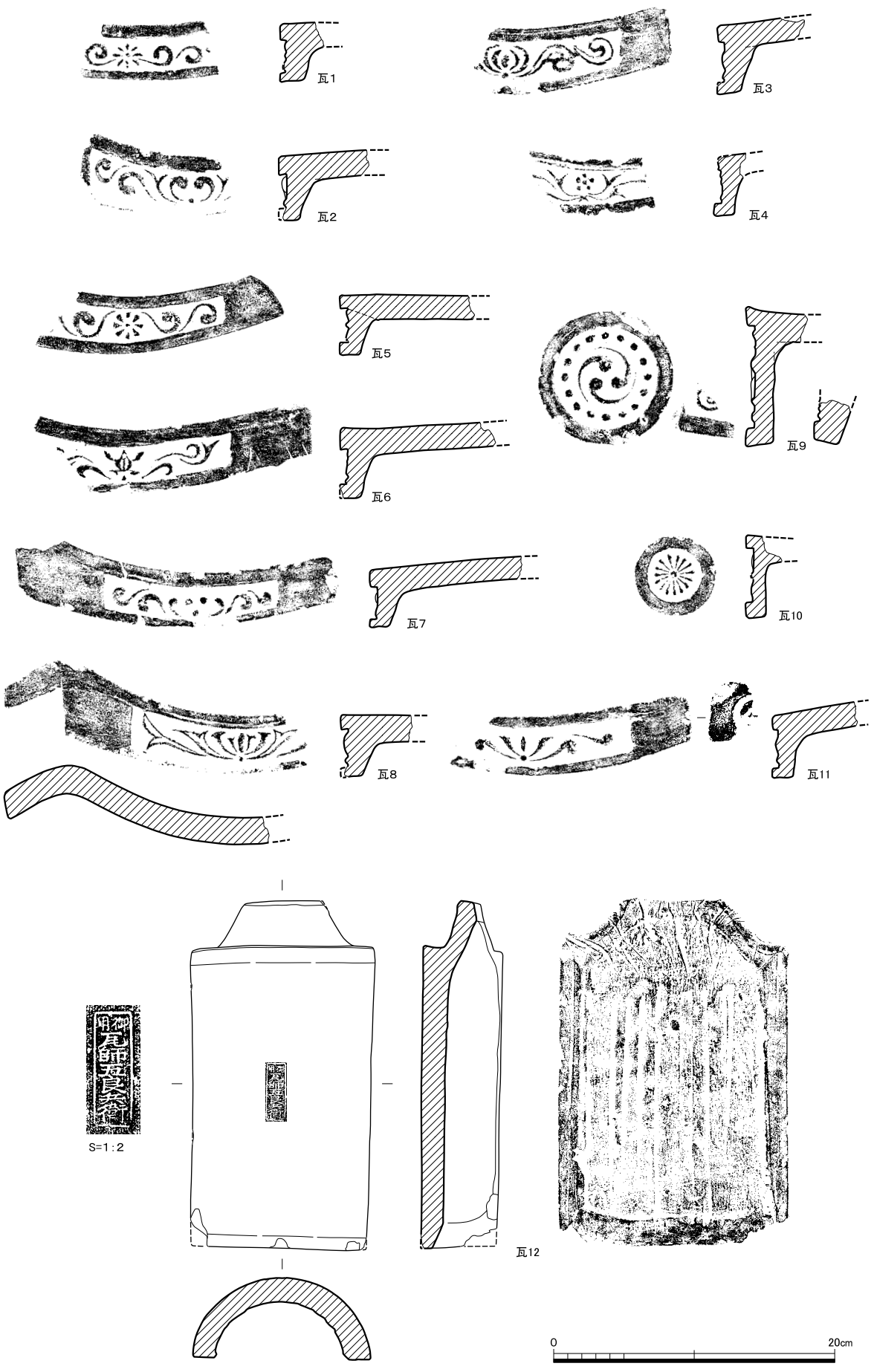


水路88・100・81、護岸14出土土器実測図（1 ： 4）

図版18 遺物

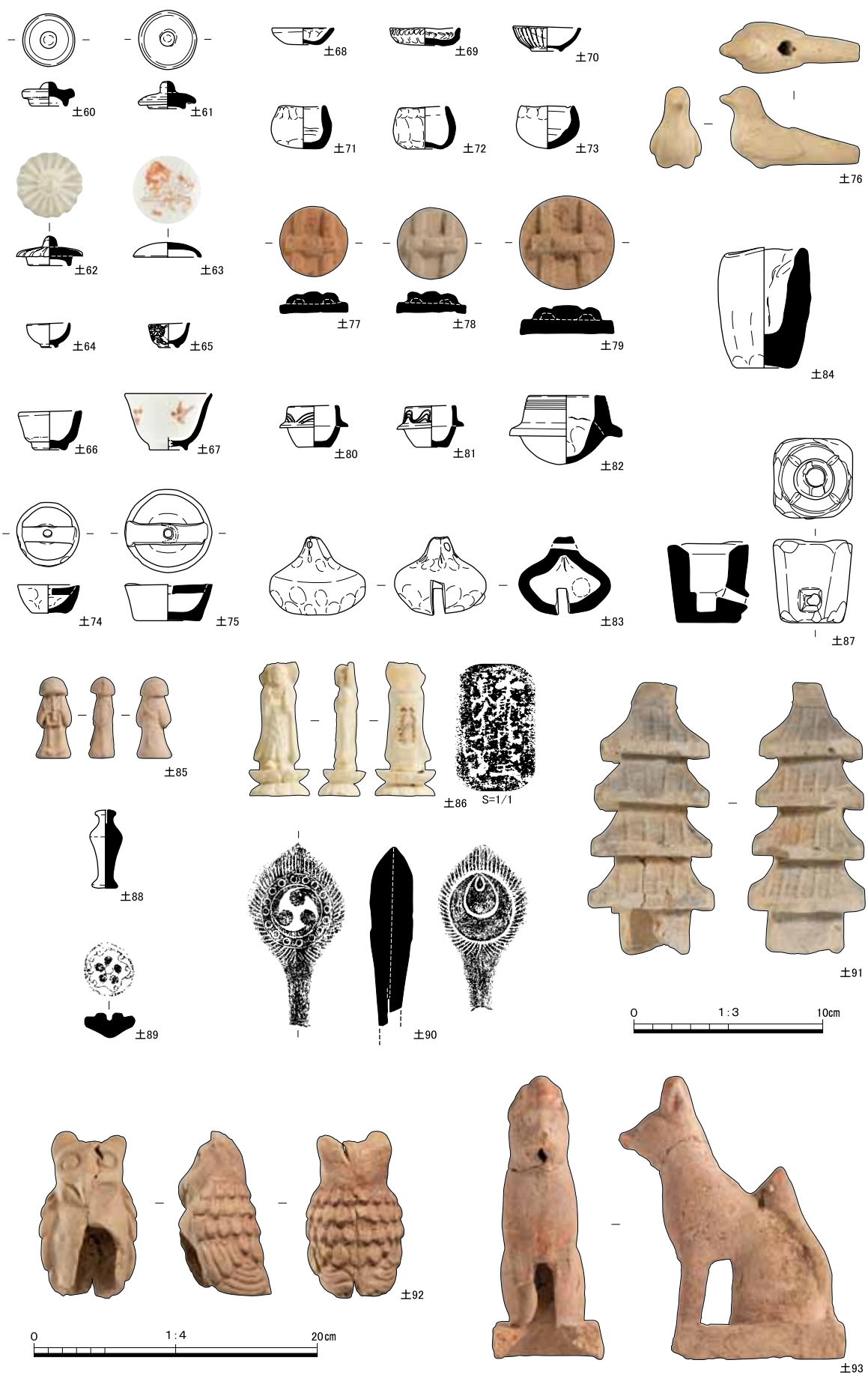
溝１、石列73・74出土土器実測図（１：４、158のみ１：８）

石列75・溝96・室７出土土器実測図（１：４）

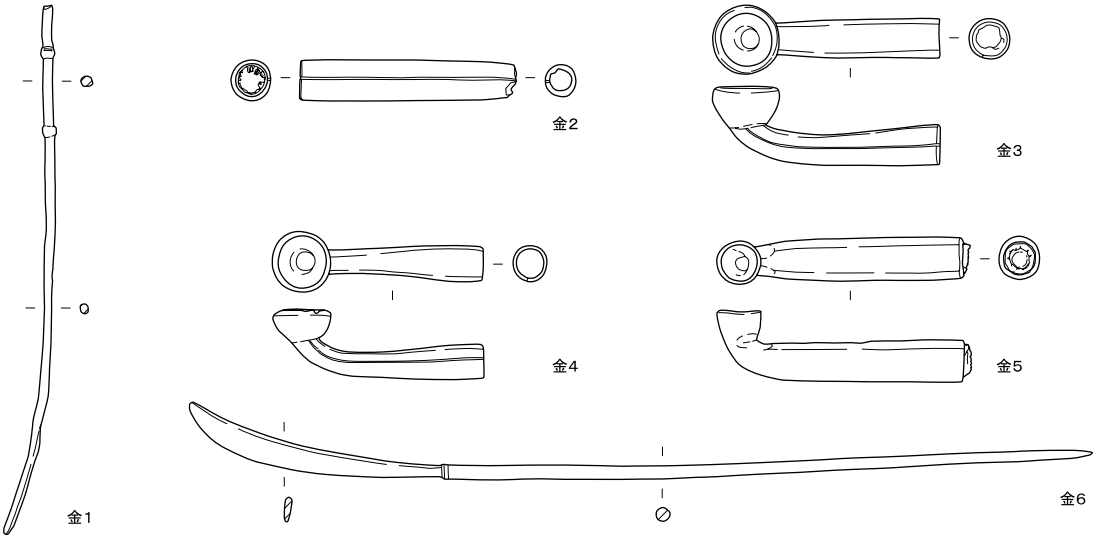


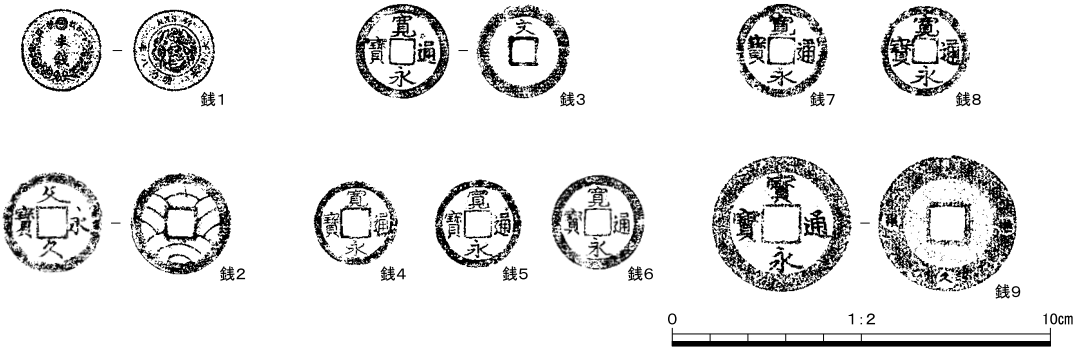
瓦類拓影及び実測図（１：４）

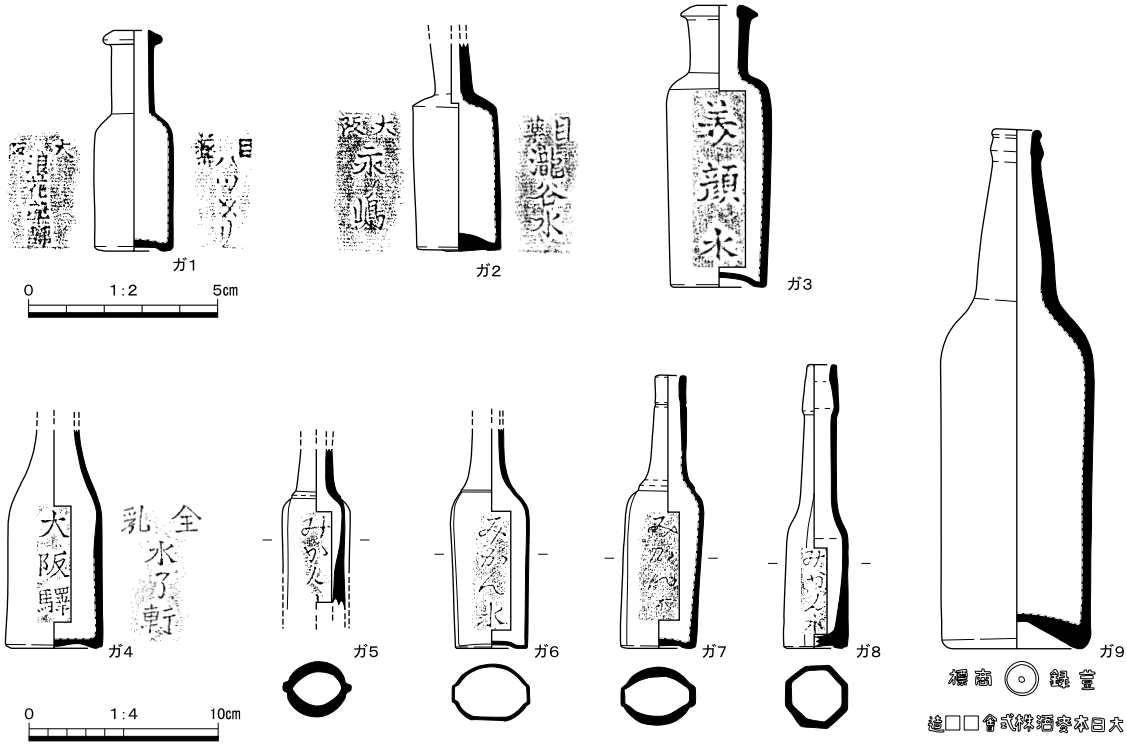
土製品（泥面子類）実測図（１：２）



土製品実測図（1：3、土92・93のみ1：4）





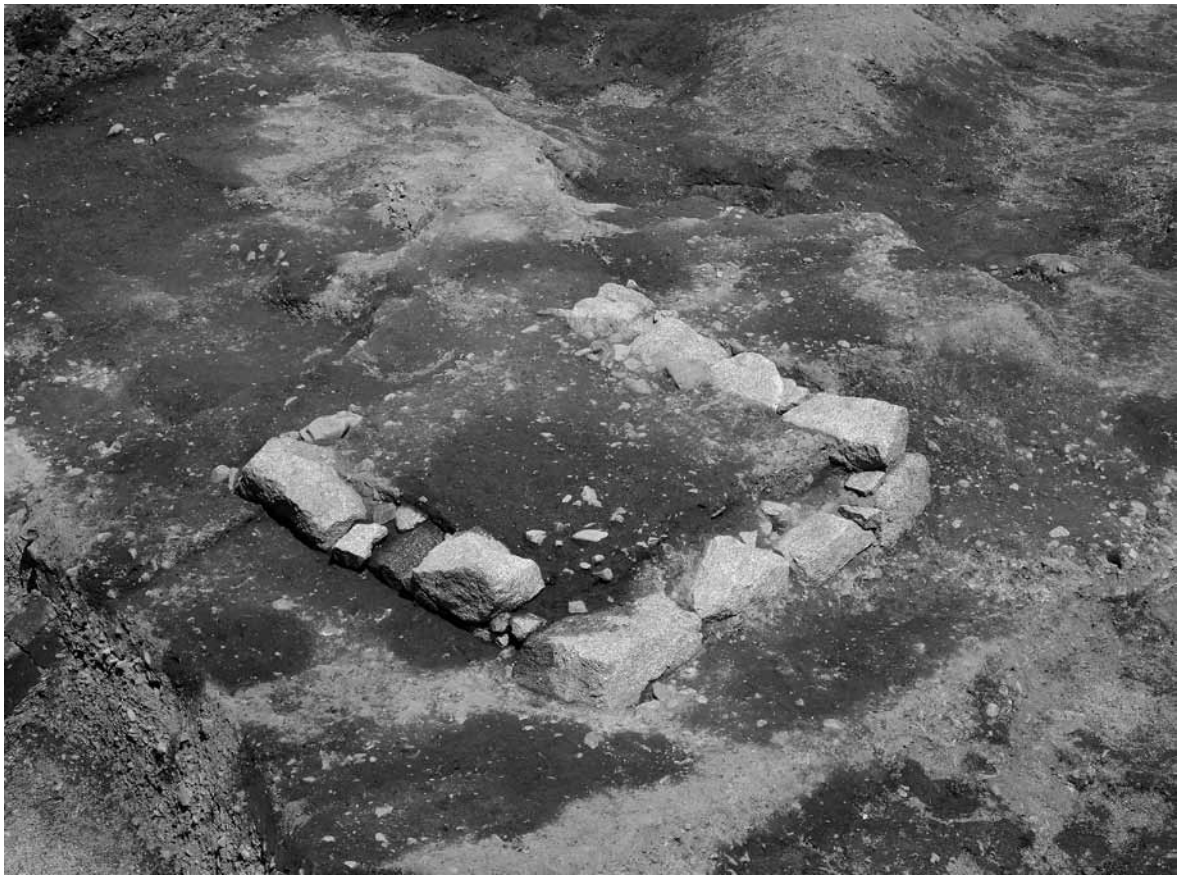


金属製品実測図・銭貨拓影（１：２）、ガラス製品実測図（１：４、ガ１～３のみ１：２）

1　1区　第２面全景（北から）

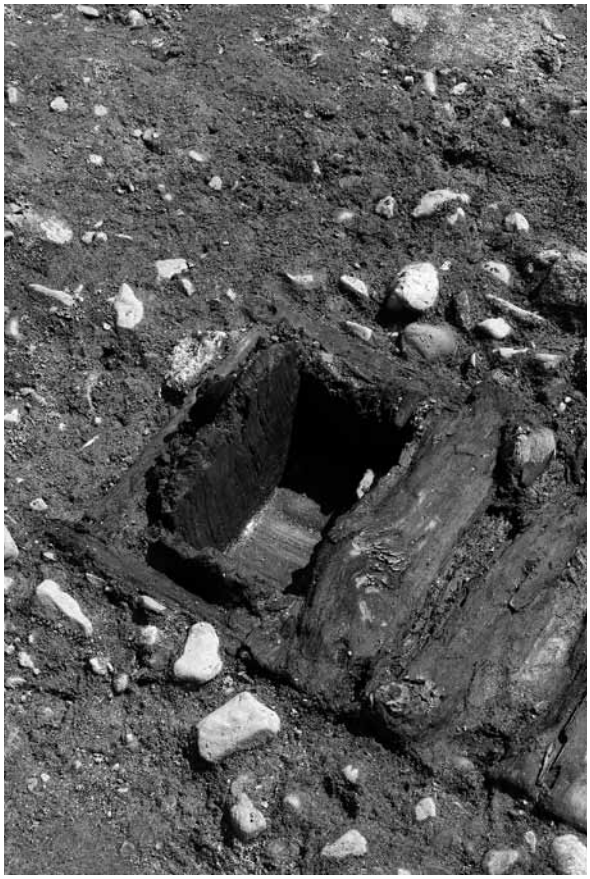
2　2区　第２面全景（東から）

1　３区全景（南西から）



2　石積み95検出状況（南西から）

1　暗渠94検出状況（南東から）



2　暗渠94開口部（北西から）

3　暗渠94内部（南東から）

1　水路88検出状況（北西から）

2　水路81検出状況（北から）

1　1区　第1面全景（北から）

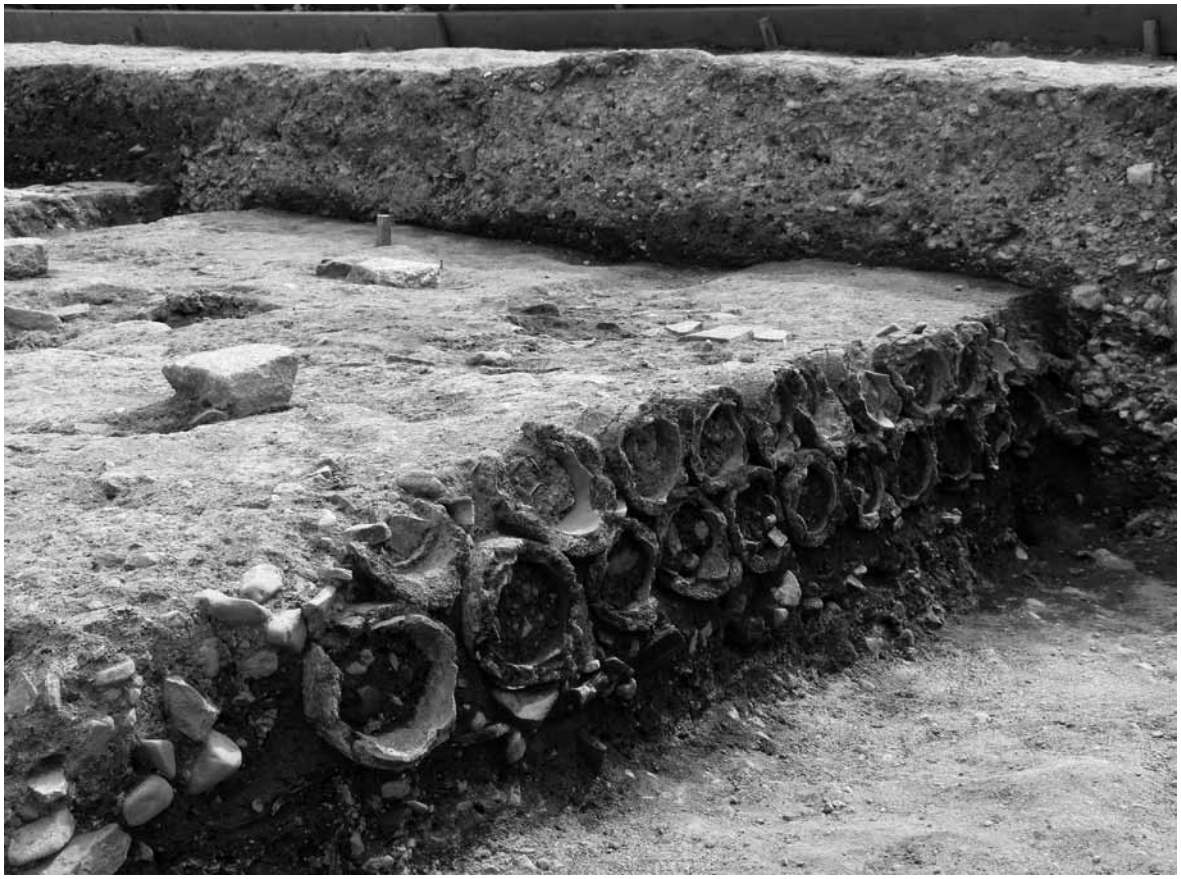
2　2区　第1面全景（東から）

1　地業55検出状況（北から）

2　炉６検出状況（南西から）

3　炉６下部構造検出状況（西から）

1　地業98・石列群99・護岸14検出状況（北から）



2　護岸14検出状況（北東から）

1　溝96、石列73・74検出状況（南西から）

2　溝96底石検出状況（北西から）

3　土坑61検出状況（北東から）

土製品

報　告　書　抄　録

ふ り が な	へいあんきょうさきょうはちじょうしぼうはっちょうあと・おどいあと
書　　名	平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２１－１１
編 著 者 名	岡田麻衣子・小檜山一良
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発 行 年 月 日	西暦2022年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京跡（へいあんきょうあと） 御土居跡（おどいあと）	京都市下京区（きょうとしししもぎょうく） 郷之町（ごうのちょう） 153番地７他	26100	1 149	34度 99分 87秒	135度 76分 39秒	2021年４月 26日～2021 年９月24日	509.25㎡	土地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡 御土居跡	都城跡 土塁跡	江戸時代前期	土塁、水路	土師器、磁器	江戸時代前期に付け替えられた御土居の土塁を検出した。 江戸時代後期から明治時代にかけて３時期の七条舟入の水路の改修工事痕跡を確認した。 江戸時代後期から明治時代の六条村の建物跡などを確認した。
		江戸時代後期	耕作土、水路、暗渠、石積み、土坑	土師器、土師質土器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品、銭貨、骨	
		江戸時代後期～末期	整地土、水路、炉、地業、井戸、土坑、柱穴、護岸		
		明治時代以降	石列、溝、室、土坑	焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品、銭貨、ガラス製品、骨	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2021-11

平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡

発行日　2022年3月31日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961